

埋蔵文化財調査報告書45

高蔵遺跡（第1次）

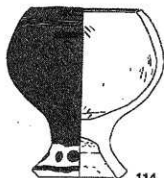
2003

名古屋市教育委員会

正誤表

『塩蔵文化財調査報告書』46 に誤りがありました。お詫びするとともに、下記のように訂正します。

頁	行	誤	正
6 頁	表 1 市橋遺跡 8 次文庫		平出・伊藤 1999
48 頁	第 33 頁	土器番号 109~112	107~114 (それぞれ 1 番ずつずれる)
49 頁	第 34 頁	土器番号 113~118	115~118 (それぞれ 2 番ずつずれる)
55 頁	第 37 頁 114	アミ欠落	右側の通り
58 頁	8	黒褐色土色	黒褐色土と
99 頁	第 40 頁	N4212 N4216 N4212 N4216	N422 N4212 N422 N4212
107 頁	27	[永井・村木 2000]	[永井・村木 2002]
116 頁	16	以上を	トル
118 頁	1	何例	何例か



埋蔵文化財調査報告書45

高蔵遺跡（第1次）

2003

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、1981年に名古屋市熱田区高蔵町（高蔵保育園内）で実施された、高蔵遺跡（第1次）発掘調査の報告書である。この調査については、概要報告書（『高蔵遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会1982）が刊行されているが、本書をもって正報告とする。
2. 本書では、水準値にN.P.（名古屋港工事基本海面）を用いている。これは、調査当時、N.P.を用いており、すべての記録がそれに基づいて作成されていることによる。現在の値では、N.P.=T.P.（東京湾の平均海面）+1.4119mである。また、調査地点位置については、国土産標などのデータはなく、現存の建物範囲が調査地点であると特定できるに過ぎない。また、本報告中で北方向の基準としては磁北を用いる。図の中にはグリッドのラインによって北方向が示されているが、このグリッド北は、磁北から約12° 30′ 東偏している。
3. 現地調査は、名古屋市教育委員会の岡本俊郎（故人）、水谷栄太郎、山口純一が担当した。本書を作成するに際しての整理作業は、山田の協力を得て、見晴台考古資料館の村木誠、田原和美が行った。遺物の整理作業には、脇田真也（立命館大学大学院）、山崎健（名古屋大学大学院）が自らの研究の一環として参加した。本書の執筆も整理作業の参加者が行った。執筆分担は目次に示す。編集は村木が行った。また、貝層の分析を実施して頂いた渡辺誠先生からは玉稿を賜った。
4. 現地調査及び整理作業、今回の報告書作成に際しては下記の方々にご教示、ご協力を頂いた。記して謝意を表す。現地調査や整理中にご協力いただいた方については遺漏も多いかと思われるが、時間も経過しており、ご寛恕頂きたい。
石黒立人、伊藤淳史、長田友也、加納俊介、藤原和夫、鈴木敏則、永井宏幸、新美倫子、渡辺誠
5. 調査の記録、出土遺物は見晴台考古資料館で保管している。

目 次

1. 遺跡の位置と環境 (村木)	1
2. 調査の歴史 (村木)	3
3. 調査の経過 (山田・村木)	9
4. 調査の成果	
4-1 調査の概要 (村木)	12
4-2 基本層序 (村木)	15
4-3 遺構と遺物 (出原・村木)	27
5. まとめ	
5-1 弥生時代前期 について (山原)	89
5-2 弥生時代後期 について (村木)	94
5-3 古墳時代から平安時代 (村木)	96
付論	
1. 高蔵遺跡出土の自然遺物	99
2. 高蔵遺跡の弥生土器について—パレススタイルを中心に—	107
3. 高蔵遺跡第1次調査出土の前期弥生土器について	121
4. 高蔵遺跡ブロックサンプル採取地点以外の動物遺存体	131

1. 遺跡の位置と環境

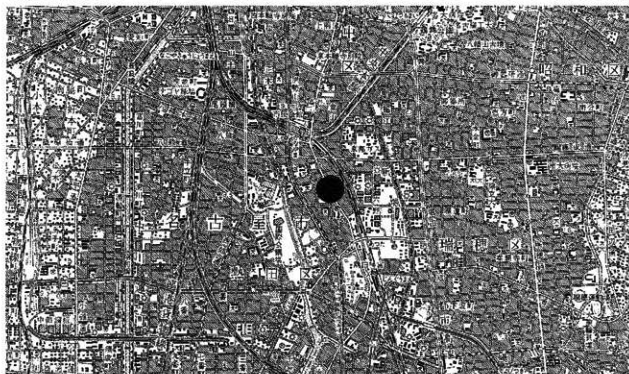
名古屋市の地形は、市域中央部の台地、その北及び西に広がる低地、市域東部の丘陵部に大別できる。この内、市域中央部の台地は、今から6万年ほど前に堆積したといわれる熱田層からなるが、この台地は名古屋城を北西隅とし、名古屋市の中心部を乗せ、南は、熱田と笠寺にむかってそれぞれ半島状に突出している。熱田にのびている西側の突出部は、熱田台地とも通称される。市街化した現在からは想像しにくい、江戸時代の東海道が、熱田台地の先端から海路によって西へとつながっていたことからも知られるように、海に突き出した半島のような景観を呈していたと推測される。特に、弥生時代以前にはこの台地の南にまで海が迫っていたと復元されている。高蔵遺跡はこの熱田台地の東縁に所在する。

この熱田台地から北にかけての台地上では縄文時代以降の遺跡が数多く知られている。これらの遺跡については、点的な調査がなされているのみであるが、高蔵遺跡の動向とも関わるので幾らか見ておこう。

高蔵遺跡のすぐ南に位置する玉ノ井遺跡では縄文時代晩期の貝層の存在が知られていたが、2002年に縄文時代晩期の墓が数多く検出された。また、この遺跡には弥生時代後期の遺構もあり、環濠かとも推測されている幅の広い溝も見つかっている【水野2000】【藤岡2003】。縄文時代晩期の遺構、遺物に関しては、高蔵遺跡の弥生時代前期集落との関わりの中で興味深い。現在のところ晩期でも最末のものではなく、時間的な断絶があるようで、今のところ直接的な関わりを考えることはできない。また、玉ノ井遺跡では弥



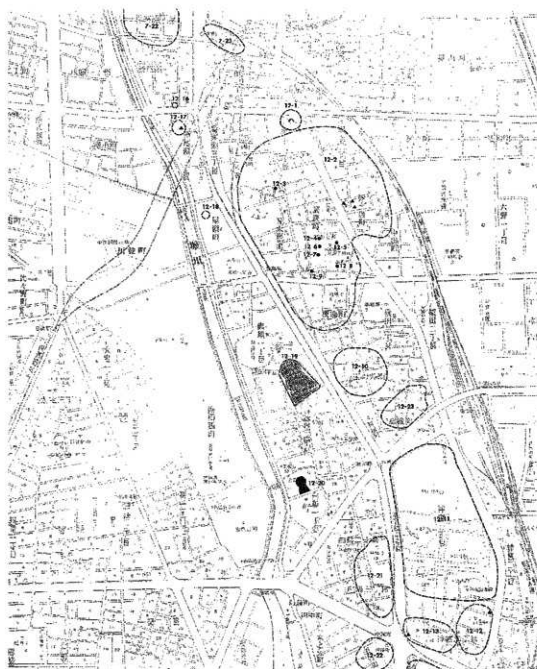
第1図 名古屋市の地形と高蔵遺跡の位置 (●印)



第2図 高蔵遺跡の位置 (国土地理院発行 1:50,000地形図 名古屋南部)

生時代後期の遺構も多く検出されている。中でも高蔵遺跡範囲の南から数百mしか離れていない地点で検出された弥生時代後期の大溝は、規模などから見て環濠の可能性も指摘され、高蔵遺跡の後期集落の動向を考える時には大きな意味をもつ。しかし、両遺跡の間については全く不明であり、今後の調査に待つところが大きい。また、玉ノ井遺跡ではその後古代の集落が営まれているが、これも高蔵遺跡の古代集落と時間的にも重なっており、一連の居住域であった可能性も考えなければならない。

弥生時代に関しては、玉ノ井遺跡の更に南に森後町遺跡が所在する。この遺跡も、弥生時代後期の遺物



- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-------------|-------------|
| 7-22 尾張元興寺跡 | 7-23 東古渡町遺跡 | 12-1 熱田村城 | 12-2 高蔵遺跡 | 12-3 花ノ木古墳 |
| 12-4 高蔵1号墳 | 12-5 高蔵2号墳 | 12-6 高蔵3号墳 | 12-7 高蔵4号墳 | 12-8 高蔵5号墳 |
| 12-9 高蔵6号墳 | 12-10 玉ノ井遺跡 | 12-11 熱田神宮遺跡 | 12-12 新宮坂貝塚 | 12-19 断夫山古墳 |
| 12-20 白鳥古墳 | 12-21 熱田C遺跡 | 12-23 森後町遺跡 | | |

第3図 周辺の遺跡

が見られる。遺構は不明であるが、弥生時代後期後半の土器がまとまって採集されており、高蔵遺跡とは時間的に重なっている。詳細は不明であり評価をすることは難しいが、高蔵遺跡の動向を考える上では欠かせない遺跡である。

目を北に転ずると、高蔵遺跡の北1km程の、現在の金山駅の北に所在する、弥生時代前期のなかでも古い時期の土器を出土した古沢町遺跡が注目される。この遺跡では若干の時間差をもつといわれる2条の溝が検出され、条痕紋系の土器が出土している。高蔵遺跡の弥生時代前期を考える上では欠かせない。

古墳時代に関しては、高蔵遺跡の南方数百mの地点に、古墳時代後期における東海地方最大の前方後円墳、断夫山古墳が立地する。このあたりでは、断夫山古墳の南に白鳥古墳が立地し、その他にも古墳の可能性が指摘される「塚」や「築山」が知られており、大規模な古墳が築かれている。高蔵遺跡においては、これらの古墳におそらく先行する時期の小規模な方墳が極めて多く検出されている。両者は古墳としては対極的な特徴を示し、時間的にも幾らか隔りがあるが、何らかの関わりが想定することもできよう。玉ノ井遺跡でも土輪の出土が知られており、高蔵遺跡と同様な墳丘を失った古墳が存在する可能性もあろう。

一方、北側には高蔵遺跡と同様な小型の方墳が見つかった東古渡町遺跡がある。同様な古墳であるが、時期的には東古渡町遺跡がやや古い。時間の変化に伴う古墳分布の変化についてはまだ不明であるが、こちらも当然高蔵遺跡と関連していると思われるべきであろう [藤井2002]。さらに東古渡町遺跡の北には、初期須志器などを出土する、古墳時代中期から後期にかけての大集落である、伊勢山中学校遺跡や正木町遺跡が存在し、古墳と集落の関わりを考える上でも重要である。

その後の時代については、周辺遺跡での調査事例に乏しい。先述したように、玉ノ井遺跡で古代の集落が知られる。また、伊勢山中学校、正木町遺跡などでも古代の集落が知られているが、まだ不明なことが多い。

先述した森後町遺跡の南には、草薙の剣を祭神とする熱田神宮が所在する。熱田神宮の社地も埋蔵文化財の包蔵地として知られており、山茶碗など中世から近世の遺物が数多く出土している。その他では、高蔵遺跡の周辺に中世の城跡とされるものが幾つか知られている程度である。

古代以降についてはまだ不明なことが多いが、高蔵遺跡の所在する熱田台地周辺は、縄文時代以来、人間活動の痕跡が豊富に残されている。

2. 調査の歴史

高蔵遺跡について記されたものとしては、明治31年に、齋藤何氏による石鏃採集の報告がもっとも古いものとされる。その後、鍵谷徳二郎氏の「尾張熱田高蔵貝塚実況」〔東京人類学会雑誌〕第二百六十六号(明治41年)において、遺構、遺物がまとまった形で報告された。齋藤氏の報告のころから「貝塚」の存在は知られていたらしいが、鍵谷氏はその地点に現在の大津通が造られ、開削された際に調査を行った。氏は、土器、石鏃、貝、獣骨などの自然遺物を採集している。

鍵谷氏の報告後、高蔵遺跡は弥生時代の遺跡として広く知られ、数多くの研究者が高蔵遺跡を調査した。個々の調査については一覧表にまとめたが、これらの調査については、調査の規模が小さかったことや十分な報告がなされた調査が少ないといった事情もあって、高蔵遺跡の内容は明らかになったとはいえない状況であった。しかし、そうした状況でも高蔵結御子神社東(後述する田中氏のC地点)などでは、弥生

時代前期の「遠賀川式」土器が出土することが知られ、弥生前期文化の波及の東限と考えられるようになった。また、後期には、赤彩、文様をもつ土器が多く出土することが知られ、この内の一つが濱田耕作によって「バレス式」と名付けられるなど、弥生時代の遺跡として有名になった。

これらの調査の中でも重要なのは、田中稔による調査、報告である。田中は、分布調査によって遺構、遺物が観察された地点をA地点からK地点とし、それぞれの地点について、確認できた遺構や遺物について記述している。この田中の分布調査は、高蔵遺跡の広がりを考える上で重要なものであり、都市化が進んだ現在では貴重なデータとなっている。中でも、田中が報告した大規模な「V型ピット」は、集落を取り巻く環濠の可能性が高く、弥生時代集落の復元には欠かせない。

また田中はF地点と呼んだ地点の調査を行い、環濠らしい溝とそこから出土した土器について報告を行った。こちらも高蔵遺跡の実態説明だけでなく、この地域の弥生時代中期の土器研究の点でも重要である。田中が報告した各地点については、1953年と56年には南山大学がD地点を、名古屋大学がE地点を調査している。南山大学の調査については、その後遺物を中心とした報告がなされ、高蔵遺跡の環濠集落の動向を考える上で貴重な資料となっている。これらの調査の資料をもとに、弥生時代中期の土器様式名として「外十居式」「高蔵式」といった名称が与えられた。

1981年以降は、名古屋市教育委員会が主に調査を実施している。これらの調査は面積が小さい場合が多く、1回の調査の成果には限界があるが、各所で調査が行われ、少しずつではあるが高蔵遺跡の実態が明らかになってきた。各調査の成果については一覧表にまとめたので、ここでは時代ごとに現状で明らかになっていることを簡単にまとめておく。

縄文時代については、少数の縄文土器の破片が見つまっているのみである。確実な遺構は見つかっていない。土器の破片は、夜寒地区や五本松地区、或いは第5次調査など、遺跡内各所で後期、晩期のものが見られるが、いずれも数点ずつでまとめて見られる地点はない【伊藤・川合1993】。

弥生時代については、前期から後期のそれぞれについてある程度の知見が得られ、名古屋台地周辺における弥生時代の中心的地集落という評価が定着しつつある。前期は、本書で報告するものも含め、遺跡範囲の東側の、台地の縁辺で多条の環濠が見つかり、名古屋台地上ではもっとも大規模な前期の遺跡と見られる。環濠の内側の居住域については全く不明である。環濠の周辺、37次、39次といった調査で、前期土器の破片が出土する程度である。前期の環濠が埋まった後の中期の初めについては、前期の環濠内から僅かな土器の破片が見つまっている程度であり、これまでの調査から判断する限り、前期の集落からみると極端に小規模化しているものと思われる。まったく廃絶してしまったかどうかはわからないが、前期の集落がそのまま中期の集落へとつながっていったという状況ではないだろう。

その後、中期の中葉になると、D地点などで遺物が採集されるようになる。遺構はほとんど見られない。F地点で行った33次調査では、大半が攪乱された状態ではあったが、土器の量はまとまっており、前期の集落とは別の地点に中期の集落が営まれるようになったことがうかがえる。

中期も後葉の凹線文系土器が波及した後については、遺構、遺物が増加する。E地点を初めとし、田中氏が報告した地点の幾つかでは環濠らしい溝がある。掘削された時期は不明であるが、出土する土器はこの時期のものが主体である。環濠内側では住居などは検出されていないが、方形周溝墓は環濠集落の想定範囲の縁辺で何基か見つまっている。この環濠が埋まった後、中期の最末になると、環濠からは離れた広

い範囲で住居や方形周溝墓が見つっている。

弥生時代後期は、これまで検出された遺構、遺物をもっとも多い時期である。D地点で見つかった大溝や田中氏が報告する溝を環濠と判断すれば、中期の環濠集落を一回り大きくした形の環濠集落域が復元できる。但しこの範囲内での住居などの検出例はほとんどない。この環濠は、掘削された時期や機能していた時期を特定するのは難しいが、出土遺物は後期後半を中心としている。竪穴住居は、環濠との時間的な関わりが難しいが、環濠集落域の北と南でそれぞれ検出されている。南の居住域は後期前半のものであるが、住居址が密集し、中国製の鏡の破鏡が出土するなど、居住域の中でも中心部にあたるものと思われる。その他には方形周溝墓が数多く検出されている。遺跡の南西部の広い範囲で検出されており、かなり広大な墓域であったことが推測される。また、この墓域とは離れた遺跡の北東部でも検出例があり、複数の墓域があったようである。

高蔵遺跡では、途中断絶はあるもののほぼ弥生時代を通じて人間活動の痕跡が認められる。大雑把な傾向としては遺跡の東側から南側にかけてが居住域として利用され、西側には墓域が形成されていたということができよう。

弥生時代の終末から古墳時代前期にかけては、弥生時代から引き継ぎ方形周溝墓（古墳時代のものは方墳と呼ぶべきか）が築かれている。これらは形態や規模、出土遺物の点では弥生時代後期の方形周溝墓と変わるところがない。こうした墓も、古墳時代の初頭まではある程度の調査事例があるが、古墳時代前期については極端に少なくなり、前期の後半以降はほとんど見られない。古墳時代の前期については、居住に関連した遺構など、墓以外の遺構は全く検出されておらず、遺物の出土もあまり知られてない。集落の規模が縮小した可能性が高い。

古墳時代中頃以降になると竪穴住居が遺跡の南東部で点々で見つっている。夜寒地区、春日荘地点では須恵器が出現する直前の竪穴住居が検出されており、この頃になって古墳時代の集落が成立したものである。同じ頃の遺構として、古墳も数多く検出されている [藤井2002]。古墳は、墳丘を失い、周濠だけが検出されているのであるが、遺跡範囲の西半を中心に見つっており、形わかるもの多くが方墳である。これらの古墳の多くは5世紀後半から6世紀前半代のものである。江戸時代に記された『尾張志付園』には、現在の高蔵遺跡の範囲内いくつか「塚」が描かれており、発掘調査で見つかった古墳がそれらの「塚」に比定される可能性も指摘されている [竹内1990]。

高蔵結御子神社境内から高蔵公園にかけては、墳丘の残る古墳もある。この内高蔵1号墳は名古屋大学によって調査され、横穴式石室をもつ7世紀代の古墳であることが明らかになっている。その他、高蔵公園内には墳丘の残る古墳が数基知られている。

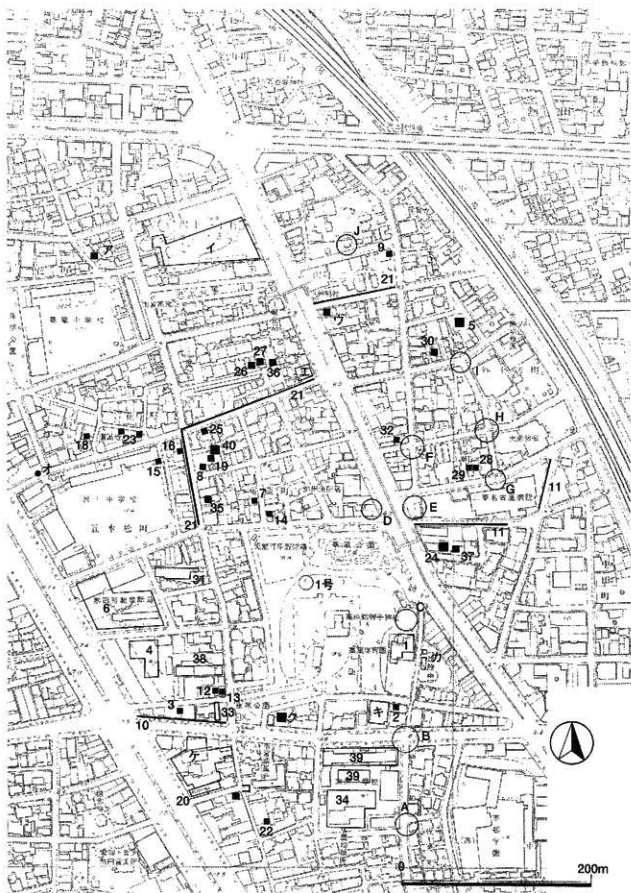
奈良時代から平安時代については、高蔵結御子神社を中心とした遺跡の南半を中心に竪穴住居が見つっている。1次調査区のすぐ南にあたる夜寒地区では、7、8世紀の竪穴住居や溝状の遺構が検出されているほか、34次、39次調査では7世紀から9世紀頃までの遺構、遺物が大量に見つっている。39次調査では、緑釉陶器の耳皿が2点出土するなど注目すべき遺物もある。遺跡範囲の東部にあたる24次調査などでも竪穴住居が見つっているほか、遺物の出土は遺跡内各所で見られる。高蔵遺跡では、弥生時代や古墳時代の包含層に掘りこまれた竪穴住居の検出が極めて困難であることを考慮すれば、本来は更に多くの住居があったものと推測される。時間の経過に伴う集落の変化はまだ不明であるが、7世紀から9世紀に

調査年	調査主体	図の表示	本文中での呼称	調査地点	弥生時代の遺構・遺物	古墳時代の遺構・遺物	古代以降の遺構・遺物	文献
1908	藤谷龍三郎			大津通				随行1908
1913	井上菊四郎 (旗屋小)							
1916	安藤清次郎							
1917	徳川義親			E地点				
1917	佐藤亀一							
1919	小金井良精・ 柴山常忠							
1919	清野謙次							
1927	直良信夫							
1928	小澤謙次郎・ 伊藤文四郎							
1940	鈴木義一			D地点				
1941	酒誌仲男			C地点(高蔵 結御子神社)				
1942	高橋儀一			C地点(高蔵 結御子神社東)	弥生土器			
1943	山内清男							
1946	新村弘							
1951	田中徳	E	E地点	外土居町12 (E地点)	中期溝			
1951	澄田正一							澄田1955
1953	中山英司	D	D地点	高蔵町62 (D地点)				熊田1979
1954	名古屋大学 (橋崎彰一)			高蔵1号墳				
1956	南山大学 (稲垣晋也)			D地点				水口1985
1961	高蔵遺跡調査 会(伊藤秋男)	カ	春日荘地点	高蔵町1001-2	前期・後期土 器	中期堅穴住 居、土師器		杉浦編1982
1981	市教委1次	1		高蔵町9-7	前期彌生、後 期周溝墓		古代堅穴住居	名古屋市教委1982
1982	市教委2次	2		夜寒町70	前期彌生	埴輪	須恵器	名古屋市教委1983
1985	夜寒地区調査 会(笠原和男)	キ	夜寒地区	夜寒町204	前期弥生、後 期周溝墓	中期堅穴住居	古代須恵器	重松他編1987
1985	荒木実(1次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1986
1986	荒木実(2次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1987
1987	荒木実(3次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1987
1987	夜寒町遺跡調 査会(荒木実 他)			夜寒町102				夜寒町遺跡調査会 1988
1987	市教委3次	3		五本松町1002			古代須恵器、 瓦、中世溝・ 土坑	水野1988
1988	荒木実	ウ	沢上二丁目 地点	沢上二丁目 501	中・後期堅穴 住居	須恵器、土師 器		荒木他1989
1989	市教委4次	4		五本松町901				竹内1990
1989	荒木実(4次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1990	荒木実(5次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1990	荒木実(6次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1990	荒木実(7次)	ケ	五本松地点	五本松町11				荒木他1991
1993	高蔵遺跡(花 町地区)調査 会(中嶋理恵)	ア		花町6-15		須恵器、土師 器		中嶋・尾野1994
1993	市教委5次	5		沢上二丁目 704	後周溝溝墓	中期溝、後期 周溝墓		野口1994
1994	市教委6次	6		五本松町7- 2030	後期周溝墓	古墳	古代土坑・溝	野口・伊藤1995
1994	市教委7次	7		高蔵町6-10		古墳		加藤編1995
1994	市教委8次	8		高蔵町1-17		古墳(周溝墓)		
1995	市教委9次	9		沢上二丁目 4-12	後期土坑			

表1 これまでの調査(1)

調査年	調査主体	図の表示	本文中での呼称	調査地点	弥生時代の遺構・遺物	古墳時代の遺構・遺物	古代以降の遺構・遺物	文献
1995	市教委10次	10		五本松町・夜寒町	中期溝		中世土坑	野口1996
1995	市教委11次	11		外土居町	中期土坑	須恵器		服部1996
1996	市教委12次	12		五本松町909-3		方墳	中世溝	田原編1997
1996	市教委13次	13		五本松町909-4		方墳、須恵器	中世井戸	田原編1997
1996	市教委14次	14		高蔵町5-18	中期周溝墓、弥生土器			田原編1997
1996	市教委15次	15		五本松町4-4		方墳		田原編1997
1997	市教委16次	16		五本松町503-1	後期周溝墓			
1997	市教委17次	17		高蔵町1-18		方墳、須恵器、土師器		野澤1998
1998	市教委18次	18		五本松町208-3			中世山茶碗	山田1998
1998	市教委19次	19		高蔵町110		方墳、埴輪		山田・野口1999a
1998	市教委20次	20		五本松町11-18	後期周溝墓	溝	古代土壇	服部1999
1998	市教委21次	21		沢上二丁目		溝、埴輪		山田・野口1999b
1998	市教委22次	22		夜寒町6-617		須恵器		伊藤編2000
1999	市教委23次	23		五本松町3-8			中世大溝、青磁片	伊藤編2000
1999	市教委24次	24		外土居町806	中期土坑?		古代土坑	伊藤・村木2000
1999	市教委25次	25		高蔵町1-1		方墳、埴輪		伊藤・村木2000
1999	静岡人類学研究所	エ	人類学研究所地点	沢上一丁目6-19	中期環溝、周溝墓	古墳、須恵器		森2001
1999	高蔵遺跡調査会(会長伊藤秋男)	イ		沢上一丁目3				
2000	アイシン開発株式会社他	コ		五本松町1202		溝	山茶碗	廣田他2001
2000	市教委26次	26		沢上一丁目621-1	中期土器	古墳、埴輪		篠原編2001
2000	市教委27次	27		沢上一丁目6-28		古墳、埴輪	古代堅穴住居	篠原編2001
2000	市教委28次	28		外土居町5-13	後期堅穴住居	中・後期堅穴住居		篠原編2001
2000	市教委29次	29		外土居町5-14	後期堅穴住居	中・後期堅穴住居		篠原編2001
2000	市教委30次	30		沢上二丁目713	中・後期方形周溝墓	後期堅穴住居		篠原編2001
2000	市教委立会調査	オ		五本松町			中世土坑、銅銭	伊藤厚編2002
2000	市教委31次	31		五本松町604	後期方形周溝墓、バレス壺	古墳、須恵器		伊藤厚編2002
2001	市教委32次	32		外土居町110	中期堅穴住居、貝類			伊藤厚編2002
2001	市教委33次	33		五本松町1004-4				伊藤厚編2002
2002	市教委34次	34		夜寒町5-1(協栄小学校)	中後期堅穴住居		古代堅穴住居、土坑	村木編2003
2002	市教委35次	35		高蔵町617	後期方形周溝墓、バレス壺		中世地下式墳	藤井編2003
2002	市教委36次	36		沢上二丁目620-2,3	中期方形周溝墓	古墳		藤井編2003
2002	市教委37次	37		外土居町805	中期土坑	後期堅穴住居		藤井編2003
2002	市教委38次	38		五本松町907,908		古墳、埴輪		藤井編2003
2002	市教委39次	39		夜寒町5-1(協栄小学校)	後期周溝墓	古墳、埴輪	古代堅穴住居	村木編2003
2002	市教委40次	40		高蔵町108-2,109	後期周溝墓			藤井編2003
2003	市教委41次			高蔵町404				藤井編2003

表2 これまでの調査(2)



第4図 これまでの調査

かけての集落は大規模であったことは間違いない。

その後の鎌倉時代以降についても各種の遺構が見つかっている。4次調査では、鉄滓が出土したほか、鋳型らしい破片を出土する鍛冶に関わるかと推測される遺構が調査されている。また、12次・13次調査のように、古墳の周濠上位から山茶碗などが出土する例もあり、その時点でまだ埋まりきっていなかった古墳の周濠に何らかの造作を加えた可能性が考えられている。遺跡南部では少量であるが瓦も出土している。しかし、鎌倉時代以降については、性格不明遺構も多いし、各調査区の点的な調査から全体像を復元するまでには至っていない。

3. 調査の経過

調査に至る経過

1980(昭和55)年10月に、名古屋市文化財パトロール員より、高蔵遺跡の範囲内である熱田区高蔵町でマンションの建設予定があるとの情報が、教育委員会文化課(現在の文化財保護室)に通報された。同年10月21日に、係員が建設予定地の現地確認を行った。その際に、建設予定地と道路を隔てて西側に隣接する市立高蔵保育園内に、プレハブの仮設園舎が建てられていることに気づいた。早速に、市民局(現在の健康福祉局)に「同園の園舎改築工事計画の有無」について照会したところ、10月23日に「改築工事計画がある」との回答があった。その内容は、「建築面積450㎡の新園舎を、1981年4月開園を目標に建設する」というものであり、本工事に着手する直前のことであった。文化課は、民生局との協議を進めて、工事に先立っての発掘調査が必要なことについての了解を得た。11月に、工事予定地の遺跡の状況と調査の作業量を把握する目的で、試掘調査を実施した。

しかし、民生局から「国庫補助事業である等の様々な事情もあって、長期の工事延長は無理なので、1981年度中には本工事が終了できるように、発掘調査を実施してほしい」と依頼を受けたが、文化課としては「以前から依頼されている他の発掘調査の予定があり、1981年の秋以降まで保育園の発掘調査ができない」と事情を説明した。そのため、調査期間をめぐっての問題が生じ、文化課は、大学や民間研究者に調査を委託することを考えて、関係者に受託の打診をしたが、実現とならなかった。一方、民生局でも、工事延長に伴う、住民の方々への理解や予算の繰越などの検討が進められた。

1981(昭和56)2月、民生局から教育委員会に、発掘調査の正式な依頼があり、両者間で具体的な内容をさらに協議することとなった。その後、園舎建築部分と周辺施設部分について、同年9月から見晴台考古資料館が発掘調査を実施した。

調査の経過

1981年9月10日に既存建物基礎撤去工事の立会いをし、14～16日に発掘区の設定を行った。発掘区のグリッド設定は、発掘区の西辺を東へ約12m、北辺を南へ約20m平行移動させた交点を、基準点(EWSN0000)と定めて、L字状の園舎建設部分と周辺施設部分をふくめ、敷地を四分割する方式とした。東西と南北の軸を4m間隔で区切って、4m四方のグリッドを基本とした。グリッドの名称は、調査の概要の項で述べる。基準点から東北方向をEN区、西北方向をWN区、西南方向をWS区及び水道管理施設部分と砂場新築部分、東南方向を正門新設部分とした。なお、グリッドの北は、磁北から約12°30'東偏している。

調査面積は、圍舎建設部分が約560㎡で、周辺施設部分として、水道管理設部分が約10㎡、砂場新設部分が約16㎡、正門新設部分が約25㎡である。

17日から機械により平均深さ約50cmの表土の掘削を開始し、24日から人力による包含層の発掘を進めた。30日には黄褐色土の地山が部分的に確認され、この面で遺構の検出を進めた。

表土以下の基本層位は、灰褐色土層（江戸時代末期の溝埋土等）、茶褐色土層（平安時代住居跡埋土等）、黒褐色土層（古墳時代以前の遺物包含層）、黄褐色土層（地山）であった。黄褐色土面で検出した遺構の概要を把握した後、10月30日から、小穴や溝など遺構の発掘を進め、12月25日には大部分の遺構を掘り終えることができた。

E・N区の東南では、茶褐色土層が残存し、平安時代前半の住居跡2軒（B1・2）などを、WS区でも平安時代前半の住居跡2軒（B3・4）を検出し、黒褐色土上面からも同時代の須恵器杯身や杯蓋が出土した。また、溝の埋土の上位や包含層から、古墳時代後期前半の須恵器高杯や甕が出土した。WN区の南からWS区にかけて、弥生時代後期の方形周溝築2基が検出され、広口甕など完形土器が出土した。E・N区の東方では、東南～北行する幅約1.7～2.1m、深さ50～90cmの溝が検出され、埋土上面の貝層部分などから弥生時代前期の壺や甕片が出土した。また、WS区でも東北～西南行する溝が検出され、埋土中位の貝層部分などから弥生時代前期の壺や甕片が出土した。

これら遺物の出土状態については、主に11月12～20日と12月21～25日にかけて、実測や写真撮影を行った。また、12月8日と25日に、溝内貝層の内容分析を、名古屋大学考古学研究室の渡辺誠氏に依頼し、貝の採集を実施した。1982年1月5～16日、溝内や発掘区畷の土層断面実測を行った。

1月20日には、発掘作業を終了し、遺構の写真撮影の後、25日にヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。この後、空中写真撮影が不可能であった、水道管理設部分、砂場新設部分と正門新設部分の遺構実測をし、また、空中写真による遺構図化にあたり、写真補正のための遺構箱測を行った。2月20日には、すべての発掘調査作業を終了した。

今回の整理作業の経過

調査終了後、整理作業が行われ、1981年に概要報告書が刊行された。概要報告書では、遺構、遺物の写真が示され、概要が記述された。しかし、遺構、遺物とも実測図は示されず、その記述も調査の成果を知り、再検討するのに十分とは言えないものであった。この調査で出土した遺物は弥生時代を中心に大変重要な資料であったため、その後開催された研究会や見晴台考古資料館における展示に伴う図録などで図面や写真の一部が使用されてきた。見晴台考古資料館の刊行物に限っても、1990年に開催された特別展の図録『弥生時代のはじまり』で弥生時代前期の遺物が示されているほか、2000年の特別展『はじまりの村』でも同様な遺物が示されている。弥生時代後期の遺物については、資料館の紀要に「仮称見晴台式」を考えるための資料として実測図が示されたりする[村木2001]など、部分的な成果の利用が繰り返されてきた。また、展示などで貸し出されたこともある。しかし、こうして公表されたのはあくまでも成果の一部にとどまっており、調査の成果が十分に周知され、活用されてきたとは言えない状況であった。また、そうした使用は主要な遺構、遺物に限られ、各遺構や出土遺物の全体を検討したうえで提示された資料とは言えないものであった。高蔵遺跡がこの地域における弥生時代の中心的な位置を占める重要な遺跡であること、

数多くの遺構、遺物が良好な状態で発見されたことを考えると、正報告の刊行を急ぐべきであると思われる。そのため正報告の刊行を目指して、1995年頃から遺物の整理作業を行ってきた。あわせて、遺構図面などの検討も実施した。遺構の図面については、ほぼ調査時のまま保管されており、今回報告する図面については、すべて改めて整理し直し、トレースしたものをを用いている。遺物については、既に述べた通り遺存度の高い弥生土器については復元されていたが、破片などについては大半のものは手付かずのままであった。そこで、遺構出土の遺物については、遺物の多い遺構に関しては改めて選び出しから行い、接合、図化を行った。その他の遺構についても出土遺物の内容を確認した。包含層の遺物については、遺存度の高いものを選び出し、できる限り図化した。それ以外の採集資料や攪乱からの出土品についてはその内容を確認するにとどめた。しかし、前期の遺物については選び出しに際して遺漏が多くなってしまった。また、前述のように遺存度の高い遺物だけが展示などで持ち出されているようで、須臾器の中にはほぼ完形のものでありながら、出土地点や状況についての情報がまったく注記されていないものも数点あり、それらは出土状況不明遺物として報告することとした。整理作業については、弥生時代前期については田原が行い、それ以外のものについては村木が主として行ったが、弥生時代前期の土器については脇田真也（立命館大学大学院）、動物遺存体については山崎健（名古屋大学大学院）が、自らの研究活動の一環として整理作業に参加した。両氏の研究の成果は、1次調査の資料を整理した結果に基づくもので、今回報告する資料について考えるための材料となり得ると判断し、本書の付論として掲載した。

なお、今回報告を執筆した担当者は、現地調査には参加しておらず、遺構については、図面、写真などの記録に基づいて記述を行った。この作業は困難であったが、残された図面、遺構台帳、調査日誌などを検討し、できるだけ調査成果を忠実に報告できるように努めた。しかし、例えば遺構の平面的な広がりや不明確であったり、断面図では途中で線が切れていたり、点線で描かれたものがある、切り合いによる前後関係が互いに矛盾するものがあるなど、実際の調査者以外には如何ともし難い問題もあった。実際の担当者の協力も得て、できるだけ正確に調査の所見を復元することを試みたが、時間の経過もあって解決できなかった問題点はできるだけその旨を明記して、そのまま報告することとした。また、遺構の名称や土層の注記などについても、明らかな間違いなどを除いて、変更はできるだけ避け、そのまま報告することとした。しかし、報告書の執筆に際しては、こうして得た情報をもとに報告者が更に解釈を加えた上で行っているものであり、必ずしも調査者の意図を復元し提示することを主眼としたわけではないことを断っておく。

4. 調査の成果

4-1 調査の概要

調査が行われたのは、保育園園舎の建設予定地のほかに、門の予定地、砂場部分、水道部分である。この後三者は小規模な調査区であるが、調査区として独立しており、図面や遺構の取扱が園舎部分とは異なっている場合がある。以下これらについては、必要に応じて「門（部）」「砂場（部）」「水道（部）」と呼ぶことにする。

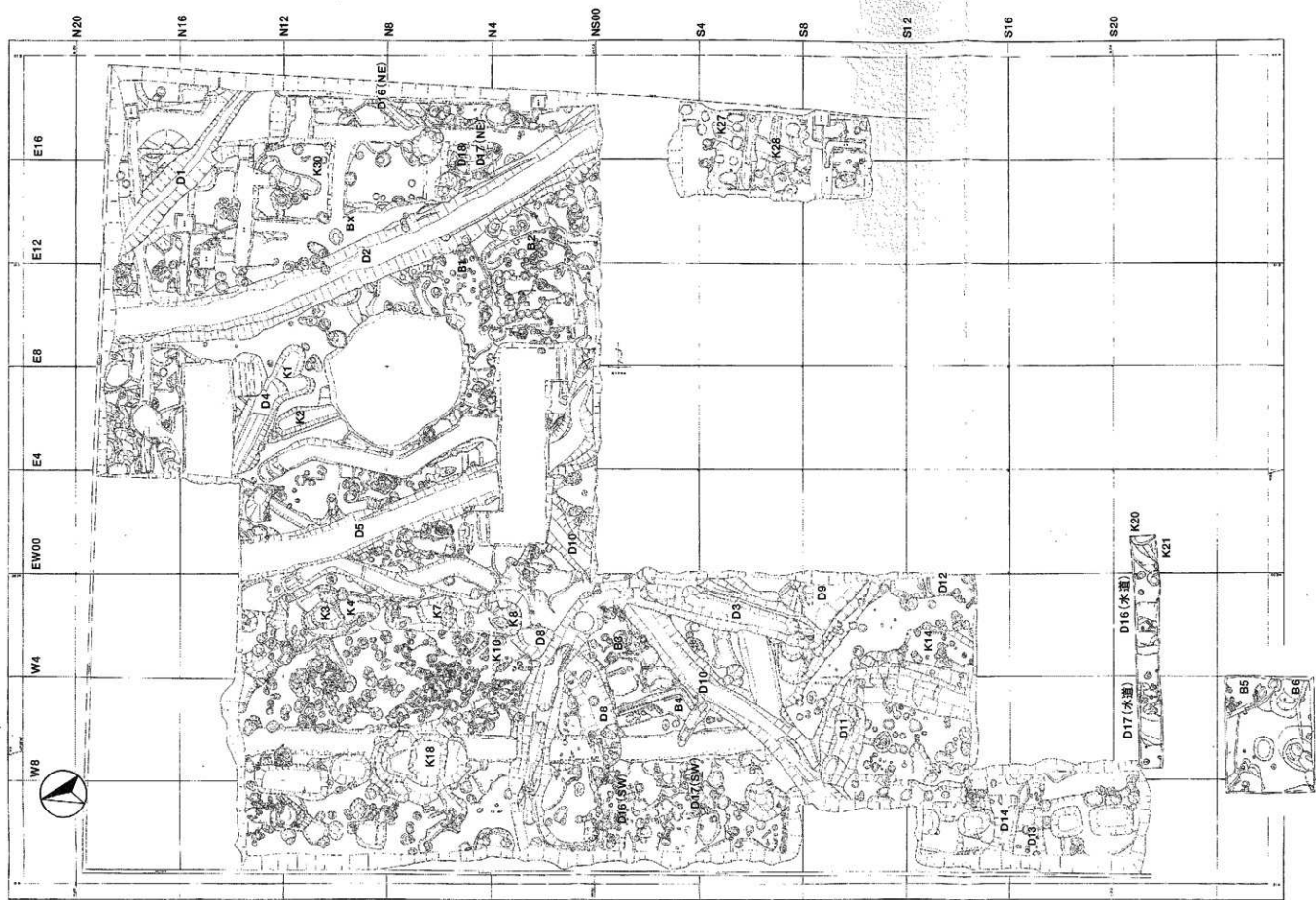
調査区には、4mを単位とするグリッドを設定した。調査範囲中央の、新築建物予定地の屈折部を原点とし、原点から北に4mの軸線をN4、東に4mの地点をE4、南に4mはS4、西にW4というように、軸線に対して名称を与えた。そして、N4軸とE4軸の交点をN4E4と呼んだ。この点を北西隅にもつ区画（この点の南東側の区画）をN4W4グリッドとした。遺物はこのグリッド単位で採集されている。なお、グリッドの名称については、調査時点においても、N4E4グリッドがNE0404或いはNE44などとも呼ばれており、当時の記録には複数の呼称が混在している。本書ではできるだけ統一をはかったが、同じグリッドを示すことを予め断っておく（第5図）。

検出された遺構に対しては、遺構の種類によって、溝はD、竪穴住居はB、土坑はKを冠し、順番に番号が与えられている。ピットにはPを冠した。ピット以外については、調査区全体で通番、ピットはグリッド毎に通番となっている。ただし、N16W8とN12W8およびN12E0とN16E0については2グリッドを合わせて通番となっている。

遺構は、弥生時代前期の環濠らしい溝、弥生時代中期の可能性の高い溝、弥生時代後期以降の方形周溝墓と思われる溝、古代の竪穴住居である。その他、多数のピットがあるが、当時のピット表（遺構台帳）と平面図で対応できなかったものもあり、報告するのは、その対応が明らかなものに限られている。以下では、まず、ピット以外について各時代毎に遺構、遺物を報告する。ピットについては、時期の特定が困難な場合も多いので、一括して報告する。



第5図 グリッド設定図



第6圖 遊構平面圖

4-2 基本層序 (第8図～第14図)

層序の記録は、グリッドの基準線上に設定したアゼと調査区の戦面で行った。層序に関しては、数多くの断面図が残されており、それに基づいた上、高蔵遺跡における近隣地点で報告者らがやっている最近の調査成果を参考にして、推測、解釈を加えて以下の記述を行う。なお、断面図には作成時点で結論を保留した箇所、或いは不明であるとした箇所が数多く見られる。これについては、推測を避け、そのまま示すこととした。

各地点の層序については以下で述べるが、はじめに基本的な層序について述べる。表土下に部分的に茶褐色砂シルトの包含層(0.1m程度)があり、その下はほぼすべて黒褐色の包含層が堆積している。厚い部分では0.4mほどある。この黒褐色土は部分的には分層可能で、砂がちで色の淡い上位が古代までの包含層、下位が弥生、古墳時代の包含層であると思われる。そしてこの黒褐色包含層の下位は地山である熱田層である。

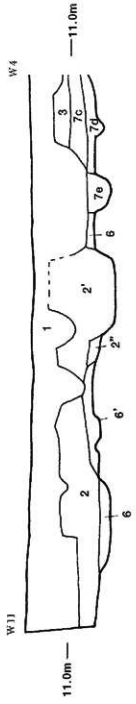
以下地区毎にやや詳しく見ておく。調査区の北壁では、0.2mほどの表土の下位に褐色味を帯びた黒褐色土が0.2mほど堆積している。これは須磨器以降の遺物包含層である。その下位は遺構の上面に達する地点と、ややシルトがちな黒褐色土が堆積している部分がある。同じく調査区北よりのN8軸上では、SN00より東には砂がちな黒褐色砂シルトが0.4m以上と比較的厚く堆積しているが、西側では注記漏れではあるが、包含層が薄かったことがわかる。

SN00軸上の調査区南壁では、調査区の東よりでは表土が0.2～0.3mと比較的薄く、その下位に部分的に灰褐色の粗砂が見られる。この粗砂の堆積時期は不明である。その下位に茶褐色の砂シルトが0.1mほど堆積している。その下位に黒褐色砂シルトが堆積する。この黒褐色砂シルトは、砂がちかシルトがちかといった点や、含まれる地山土の大きさ、量を目安として細分されている。この黒褐色砂シルトの内の最上層は、下位に比べると色調が薄いことから「色淡」と呼ばれていたらしく、調査区の各地点で堆積が確認されている。この層は古墳時代から古代の包含層の可能性が高い。その下位の黒褐色砂シルトは、弥生時代から古墳時代の包含層または遺構の埋土である。

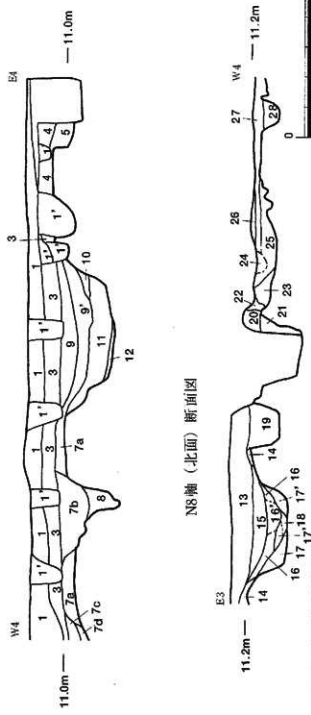
調査区の南よりではEW00軸上の断面図で見られるように、表土が0.5mほどとやや厚く、その下位には黒みの薄い砂がちな黒褐色砂シルトが0.2mほど堆積している。その下位には地山土を多く含む黒褐色砂シルトが部分的にある。この調査区東壁では、遺構の埋土と区別できないせいもあるがシルト質の強い土は見られなかった。また、W4軸上ではSN00軸上からS8軸の間には、黒褐色砂シルトが良好に残っており、0.4mほど堆積している。上位は砂がち、下位はシルトがちである。S8より南ではあまり黒褐色砂シルトは厚くなく、0.2mほどである。

なお、断面図では時代の異なる遺構の埋土と同じ層名、土色、注記がなされているケースがままある。これは、両者が同じ土であることを意味しているのではなく、類似していることを意味しているのは明らかなので、敢えて名称は変更しなかった。

N16軸 (調査区北壁) 断面図



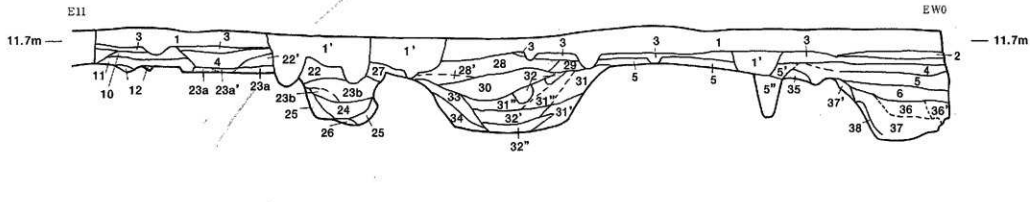
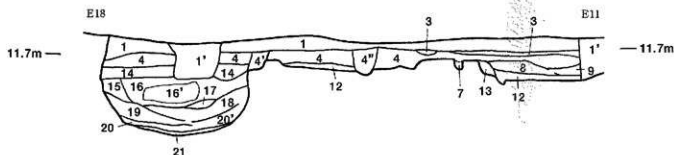
N8軸 (北面) 断面図



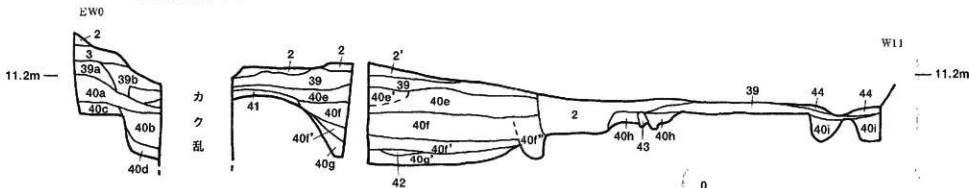
- 1, 1', 粘土、砂層。
- 2, 2', 黒褐色砂シルト…一層砂。2のほろがシルトが厚。
- 3, 灰褐色シルト…2に粘土土質や黒褐色の層が混入する。
- 4, 黒褐色シルト…厚層状に黒色泥層を有し、砂が多く砂が粗い。5より厚層状で、黒色泥層が厚い。
- 5, 黒褐色シルト…一層厚層状、黒砂多い。砂が粗。泥層が厚い。
- 6, 黒褐色シルト…4と同層だがややシルトが粗。
- 7a, 7b, 7c, 7d, 黒褐色シルト…2と同層だが粘土土質が多くなり、黒褐色を帯びる。6のほろが粗い。
- 7e, 黒褐色シルト…2と同層だが粘土土質が多くなり、黒褐色を帯びる。6のほろが粗い。
- 7f, 黒褐色シルト…2と同層だが粘土土質が多くなり、黒褐色を帯びる。6のほろが粗い。
- 7g, 黒褐色シルト…2と同層だが粘土土質が多くなり、黒褐色を帯びる。6のほろが粗い。
- 7h, 黒褐色シルト…2と同層だが粘土土質が多くなり、黒褐色を帯びる。6のほろが粗い。
- 8, 黒褐色シルト…7bより厚層状で、黒色泥層が厚い。
- 9, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 10, 粘土土質。
- 11, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 12, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 13, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 14, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 15, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 16, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 17, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 18, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 19, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27 注記なし。
- 28, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 29, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。
- 30, 黒褐色シルト…8よりやや厚層状を帯び、シルトが粗い。

第7図 東西断面 (1)

SN00軸 (調査区南壁) 断面 (1)



SN00軸断面 (2)

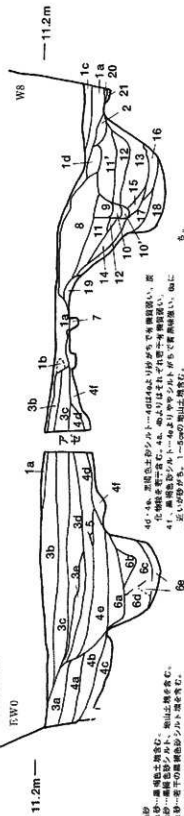


- 36. 黒褐色砂シルト-36に比べ地山土の混入が多く、大きい。36b地土とする途程多可な透孔。
- 37. 黒褐色砂シルト-36aに比べ灰色味を帯び、粗砂の量は少ない。1cm次の地山土。深褐色土を少量含む。
- 37' 黒褐色砂シルト-37cに比べ地山土の量多く、大きい。
- 38. 灰色砂状地山土 (37, 37', 38aはD砂土)
- 38. 黒褐色砂シルト-有機質多い。細砂が目立ち、上層では39が混入。bはより灰色味を帯びる砂など混入。
- 40a. 黒褐色砂シルト-39と同等有機質が目立ち、油黒色。40aよりシルトが多可。
- 40. 黒褐色砂シルト-39より有機質多い。砂がよりやや有機質多い。1-2cmの地山土を少量含む。
- 40d. 黒褐色砂シルト-40a。bよりやや有機質多い。砂が。1cm次の地山土。灰色味強可な透孔。 (40a-40dはD砂土)

- 40e. 黒褐色砂シルト-39より有機質、シルト質多い。W4輪の9a。
- 40e'. 黒褐色砂シルト-40aに1cm次の地山土混入。W4輪の9a'
- 40f. 黒褐色砂シルト-40aより有機質、シルト質多く、油黒色に強い。粗砂が目立ち、1cm次の地山土。灰色味強可。W4輪の9b。
- 40f'. 黒褐色砂シルト-40cに地山土比較的多可含む。W4輪の9b'
- 40g. 黒褐色砂シルト-40dとの有機質は多いが、有機質多い。ピット。
- 40g'. 黒褐色砂シルト-40 (又は39') と黄色砂状地山土混入するが、地山土の量少ない。
- 40g''. W4輪の40g''
- 40h. 黒褐色砂シルト-43の西側では地山土。黒褐色砂が若干含まれる。
- 40. 黒褐色砂シルト (40e-40g' はD砂土)
- 41. 黒褐色砂シルト-40a。bよりやや有機質多い。地山土の可能性大。
- 42. 黒褐色砂シルト (40e-40g' はD砂土)
- 43. 黒褐色砂シルト
- 44. 黒褐色砂シルト

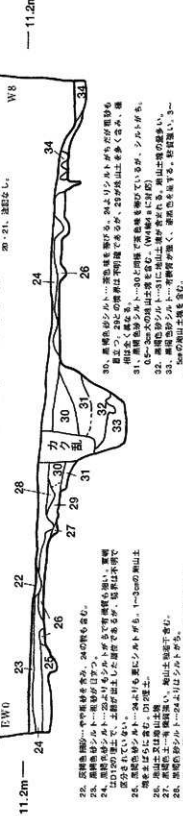
- 1-1'. 灰土、混入
- 2. 灰褐色砂-砂層が混入
- 3. 灰褐色砂シルト-砂が。混入
- 4. 黒褐色砂シルト-灰色強い。粗砂が目立ち、砂が。灰褐色味の粗砂を多く含む。bに多い。
- 4'. 黒褐色砂シルト-4に地山土が混入。
- 4''. 黒褐色砂シルト-4よりやや有機質多い。砂が。
- 5. 黒褐色砂シルト-5に比べて砂が。
- 6. 黒褐色砂シルト-1。2cmの地山土混入。
- 6'. 黒褐色砂シルト-1。2cmの地山土混入。
- 7. 黒褐色砂シルト-灰色味を帯びる。地山土を含む。ややシルトが。
- 8. 黒褐色砂シルト-10bは10と同じ。
- 9. 黒褐色砂シルト-10aより有機質多い。砂が。
- 10. 黒褐色砂シルト-11に比べて砂が。11より有機質多い。シルトが。
- 11. 黒褐色砂シルト-11に比べて砂が。10より有機質多い。シルトが。10aの深褐色土を少量含む。
- 12. 黒褐色砂シルト-有機質多い。シルトが。1, 2cmの地山土混入。
- 13. 黒褐色砂シルト-有機質多い。地山土混入。
- 14. 黒褐色砂シルト-有機質多い。地山土混入。砂が。
- 15. 黒褐色砂シルト-有機質多い。地山土混入。シルトが。
- 16. 黒褐色砂シルト-有機質多い。地山土混入。1cm次の地山土混入。14よりシルトが。1より砂が。
- 16'. 16aに16bを含む混入。
- 17. 黒褐色砂シルト-16a。16bの地山土混入。深褐色土を少量含む。有機質がやや細く、灰色味を帯びる。
- 18. 黒褐色砂シルト-16a。16bの地山土混入。深褐色土を少量含む。
- 19. 黒褐色砂シルト-17aに比べて。17aは地山土混入。深褐色土を少量含む。多い。
- 20. 黒褐色砂シルト-18より大型の地山土混入。深褐色土を少量含む。層も19より多い。やや砂を帯びる。
- 20'. 黒褐色砂シルト-20aの地山土混入。深褐色土を少量含む。
- 21. 黒褐色砂シルト-20aの地山土混入。深褐色土を少量含む。粗砂。 (14-21はD砂土。粗砂が混入しているところは、粗砂が明確に混入しているところ)
- 22. 黒褐色砂シルト-有機質多い。粗砂が目立つシルトが。
- 22'. 黒褐色砂シルト-22と同じ。有機質多い。やや砂が。
- 23a. 黒褐色砂シルト-23aより有機質多い。シルトが。単一の褐色砂シルト地山土混入が多い。
- 23a'. 黒褐色砂シルト-23aより有機質多い。粗砂が目立つシルトが。
- 23b. 黒褐色砂シルト-23bより有機質多い。粗砂が目立つシルトが。
- 23b'. 黒褐色砂シルト-23bより有機質多い。粗砂が目立つシルトが。
- 24. 黒褐色砂シルト-24に多量の黄色砂状地山土混入。有機質多い。24より褐色味強い。粗砂は多い。シルトが。1cm次の地山土を少量含む。
- 25. 灰色砂状地山土 (23b-26はD砂土)
- 27. 黒褐色砂シルト-褐色味を帯びて粗砂が目立つシルトが。1-2cmの地山土混入。
- 28. 黒褐色砂シルト-28に比べて有機質多い。砂が。
- 29. 黒褐色砂シルト-28に比べてやや灰色味強い。シルトが。
- 30. 黒褐色砂シルト-28bより有機質多い。粗砂が目立つシルトが。灰色味を帯びる。
- 31. 黒褐色砂シルト-灰色味強い。シルトが。5に混入。30-32aの地山土混入。油黒色土混入。
- 31'. 黒褐色砂シルト-31より有機質多い。
- 31''. 黒褐色砂シルト-31より有機質多い。
- 32. 黒褐色砂シルト-有機質、シルト質が多い。地山土。灰色味強い。
- 32'. 黒褐色砂シルト-32に比べてシルトが。有機質多い。
- 32''. 黒褐色砂シルト-32に比べて有機質多い。灰色味強い。地山土が多い。
- 33. 黒褐色砂シルト-32に比べて砂が。32'に比べて灰色味強可。灰色味がやや細く、灰色味を帯びる。
- 34. 黒褐色砂シルト-33に比べてと砂がで地山土が。
- 34'. 黒褐色砂シルト-地山土混入。
- 35. 黒褐色砂シルト-35に比べて砂が。
- 36. 黒褐色砂シルト-6。6に比べて褐色味強い。砂が。1cm次の地山土。深褐色土を少量含む。D10を帯びる透孔。

S8軸断面図



14. 赤褐色砂
15. 赤褐色砂
16. 赤褐色砂
17. 赤褐色砂
18. 赤褐色砂
19. 赤褐色砂
20. 赤褐色砂
21. 赤褐色砂
22. 赤褐色砂
23. 赤褐色砂
24. 赤褐色砂
25. 赤褐色砂
26. 赤褐色砂
27. 赤褐色砂
28. 赤褐色砂
29. 赤褐色砂
30. 赤褐色砂
31. 赤褐色砂
32. 赤褐色砂
33. 赤褐色砂
34. 赤褐色砂
35. 赤褐色砂
36. 赤褐色砂
37. 赤褐色砂
38. 赤褐色砂
39. 赤褐色砂
40. 赤褐色砂
41. 赤褐色砂
42. 赤褐色砂
43. 赤褐色砂
44. 赤褐色砂
45. 赤褐色砂
46. 赤褐色砂
47. 赤褐色砂
48. 赤褐色砂
49. 赤褐色砂
50. 赤褐色砂
51. 赤褐色砂
52. 赤褐色砂
53. 赤褐色砂
54. 赤褐色砂
55. 赤褐色砂
56. 赤褐色砂
57. 赤褐色砂
58. 赤褐色砂
59. 赤褐色砂
60. 赤褐色砂
61. 赤褐色砂
62. 赤褐色砂
63. 赤褐色砂
64. 赤褐色砂
65. 赤褐色砂
66. 赤褐色砂

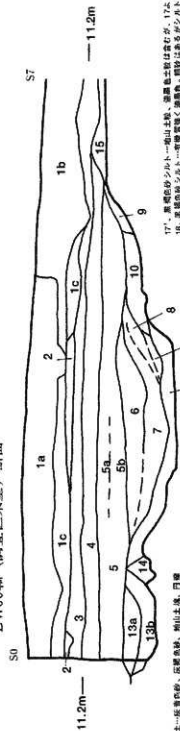
S12軸断面図



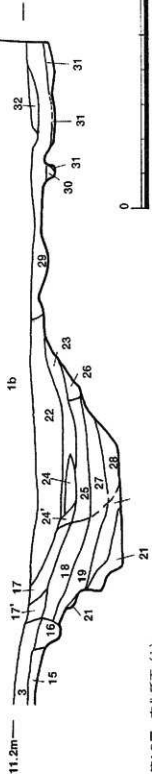
22. 赤褐色砂
23. 赤褐色砂
24. 赤褐色砂
25. 赤褐色砂
26. 赤褐色砂
27. 赤褐色砂
28. 赤褐色砂
29. 赤褐色砂
30. 赤褐色砂
31. 赤褐色砂
32. 赤褐色砂
33. 赤褐色砂
34. 赤褐色砂
35. 赤褐色砂
36. 赤褐色砂
37. 赤褐色砂
38. 赤褐色砂
39. 赤褐色砂
40. 赤褐色砂
41. 赤褐色砂
42. 赤褐色砂
43. 赤褐色砂
44. 赤褐色砂
45. 赤褐色砂
46. 赤褐色砂
47. 赤褐色砂
48. 赤褐色砂
49. 赤褐色砂
50. 赤褐色砂
51. 赤褐色砂
52. 赤褐色砂
53. 赤褐色砂
54. 赤褐色砂
55. 赤褐色砂
56. 赤褐色砂
57. 赤褐色砂
58. 赤褐色砂
59. 赤褐色砂
60. 赤褐色砂
61. 赤褐色砂
62. 赤褐色砂
63. 赤褐色砂
64. 赤褐色砂
65. 赤褐色砂
66. 赤褐色砂

第9図 東西断面 (3)

E-W00軸 (調査区東壁) 断面

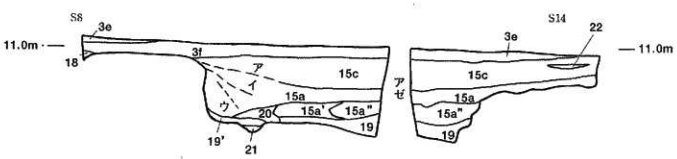
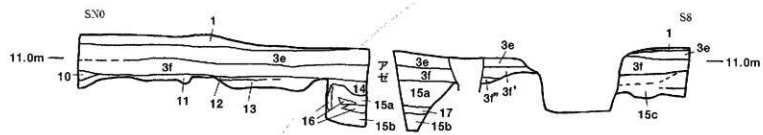
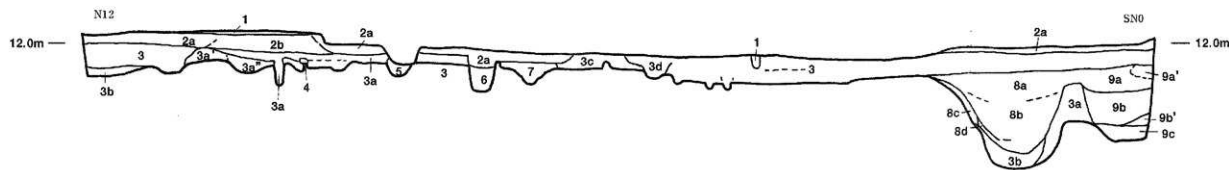


- 1a. 黄土-灰褐色砂、灰褐色砂、粘土土塊、粘土土塊、砂が、主要砂層を成す。
- 1b. 黄土-灰褐色砂、灰褐色砂、粘土土塊、粘土土塊、砂が、主要砂層を成す。
- 1c. 黄土-灰褐色砂、灰褐色砂、粘土土塊、粘土土塊、砂が、主要砂層を成す。
- 2. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 3. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 4. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 5. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 5a. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 5b. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 6. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 7. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 8. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 9. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 10. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 11. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 12. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 13a. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 13b. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 14. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 15. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 16. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 17. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 18. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 19. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 20. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 21. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 22. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 23. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 24. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 24'. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 25. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 26. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 27. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 28. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 29. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 30. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 31. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 31'. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 32. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 33. 黒褐色砂シルト-砂が主。
- 34. 黒褐色砂シルト-砂が主。



第10図 南北断面(1)

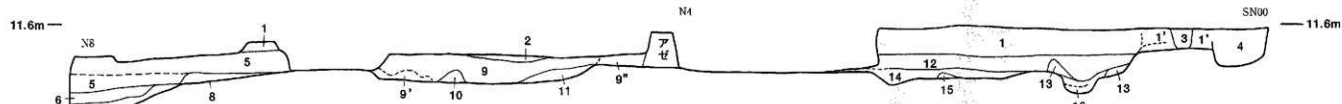
W4軸断面



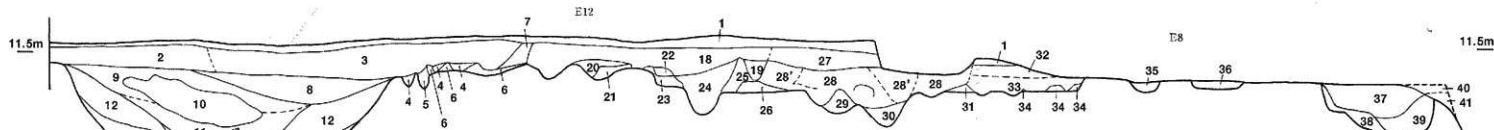
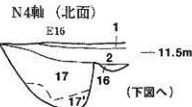
1. 灰褐色砂シルト
- 2a. 黒褐色シルト→砂質が強い。
- 2b. 黒褐色シルト→粘質が強い。
3. 黒褐色シルト→凝結の部分では下部に0.2~1cmの地山土粒を含む。
- 3a. 黒褐色シルト→0.2~1cmの地山土粒目立つ。黒褐色シルトと黒褐色シルトの中間的な色調。凝結のあまりが黄土色の分布する部分。
- 3a'. 黒褐色シルト→3aと比較すると地山土が全体的に混入し、凝結度の低減を要する。
- 3a''. 黒褐色シルト→3a'との区別は、0.5~1cmの地山土粒。0.3cmの黄土粒が見られること。
- 3b. 黒褐色シルト→0.5cmの地山土粒を含む。2)に比べて黒味が希薄。
- 3c. 黒褐色シルト→3と同等だが、0.1~0.3cmの地山土粒が目立つ。
- 3d. 黒褐色シルト→3dと同様だが、有機質(炭)が多い。
- 3e+3f. 黒褐色シルト→この層は共に3dと同じであるが、砂質のaとシルト質のbに区別した。
- 3f. 黒褐色シルト→3fは0.2cmの地山土粒が混入する。
- 3f'. 黒褐色シルト→3fと同様。地山土の混入あまり見られない。
4. 黄褐色砂地山土
5. ほぼなし。
6. 灰褐色シルト→0.5~1cmの地山土目立つ。
7. 黒褐色土
- 8a. 黒褐色シルト→砂質強い。0.2cmの黄土粒混入。
- 8b. 黒褐色シルト→8aと同様で質は不明瞭。
- 8c. 黒褐色シルト→1~1.5cmの地山土混入。
- 8d. 黒褐色シルト→1cmの地山土混入よりさらに混入したが、量不明瞭。
(a=a+dのD型土)
- 8a. 黒褐色シルト→上層より有機質、シルト質ともに強い。8a'の砂質が強い。S100層40'層。
- 8a''. 黒褐色シルト→8a'に0.2~0.5cmの黄土粒目立つ。S100層40'層。
- 8b. 黒褐色シルト→8aより有機質、シルト質共に強く、黒褐色に強い。1cmの地山土混入。灰化物質を含む。S100層40'層。
- 8b'. 黒褐色シルト→8bより地山土粒多く含む。S100層40'層。
- 8c. 黒褐色シルト→8b'又は9'に3~5cmの黄色砂粒が同層に含まれる。S100層40'層。
(8a=8c+d型土)
10. 11d土粒についての地質とし、D部の埋土のときに黒褐色シルトと判定。11については、0.5cmの地山土混入を含む。其(D8のこと)の埋土となつてしまふが、後者の可能性はあるはずである。
12. 地山土と黒褐色砂が層状に重なる部分があり、住身の跡がある。
13. 黒褐色シルト→3と同様な黒褐色シルトに1cmの地山土粒が混入。
14. 黒褐色シルト→3と同様な黒褐色シルトに1cmの地山土粒が混入。
- 15a. 黒褐色シルト→粘質が強い。0.5~1cmの地山土。1~2cmの黒褐色シルトの層が混入して堆積する。
- 15b. 黒褐色シルト→15aに1cmの地山土粒が混入。
- 15c. 黒褐色シルト→15cに2~3cmの地山土粒が混入して堆積。垂直的に面を形成した感じ。A B 層。
- 15d. 黒褐色シルト→砂質強い。
(14、15a、15bはD100の地山)
- 15e. 灰色シルト→粘質。a)に比べて有機質混入で砂質、黒味薄い。土の凝結の上には地山土粒が混入する。下の凝結層については不明。D型土か。
(ア、イ、ウの凝結は地山土の有機質混入の進みで違いが認められると想定するが、分層にはいたらなかったらしい)
16. 炭化物層中する部。
17. 炭化物層中する部。1cmの地山土粒が混入する。
18. D型土の地質。土中の砂が少く分けて15cか。
19. 黒褐色シルト→アウの別では砂質強く硬い。間隙では0.5cmの地山土粒混入も見られるやや強い。
- 19'. 黒褐色シルト→19cのD土粒混入より混入。炭化物も若干混入。
20. 黒褐色シルトか?→1cm以下の地山土粒が混入にだけ確認。
21. 黒褐色シルトか?→1cm以下の地山土粒が混入にだけ確認。
22. 黄土と炭化物が混入する部。



E12軸 (西面)



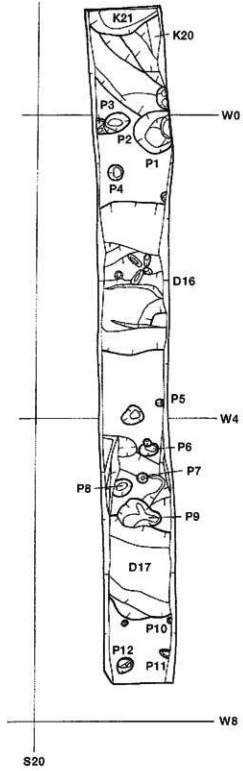
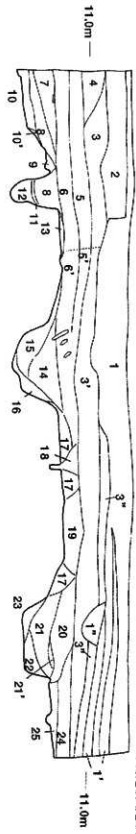
1. 黒褐色シルト→黄褐色シルト層が混入し、色調は濃い。粗砂を多く含む。0.5cmの塊山土層がまばらに含まれる。
- 1'. 黒褐色シルト→1との境界は不明。
2. 黒褐色シルト→黄褐色シルトが多く混入。0.5cmの塊山土層を含む。
3. 黒褐色シルト→有機質強く、細かい。
4. 黒褐色シルト→0.5cmの塊山土層。灰褐色シルト粒目立つ。
5. 黒褐色シルト→粗砂を多く含む。粘土粒が密着する。0.5-1cmの塊山土層が目立ち、色調は濃い。破砕の塊山土層が下はシルトが。
6. 黒褐色シルト→0.5cmの塊山土層を含む。
7. 黒褐色シルト→2cmの塊山土層を多く含む。
8. 塊山土に黒褐色土層がまばら。塊山中。
9. 黒褐色シルト→1cmの塊山土層。灰褐色シルト層が混入。12に混入するが、塊山土の量がかなり多い。11の塊山土と混入される。
- 9'. 黒褐色シルト→9に1.2cmの塊山土層が混入している。
- 9". 黒褐色シルト→0.5cmの塊山土層が目立つ。9との境界不明。
10. 塊山土層
11. 黒褐色シルト→3cmの塊山土層が目立つ。
12. 黒褐色シルト→灰褐色シルト層がまばらに含まれる。粗砂はほとんど少ない。2の塊山土。
13. 塊山土層
14. 黒褐色シルト→黒褐色シルト層は少なく、色調は濃い。0.2-0.5cmの塊山土層がまばら。この層の上層が2の断面と異なる。
15. 地記なし
16. 黒褐色シルト→2-3cmの塊山土層混入。破砕の塊山土層は不明。

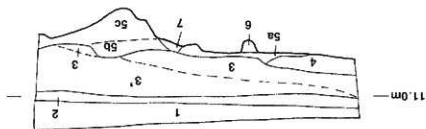
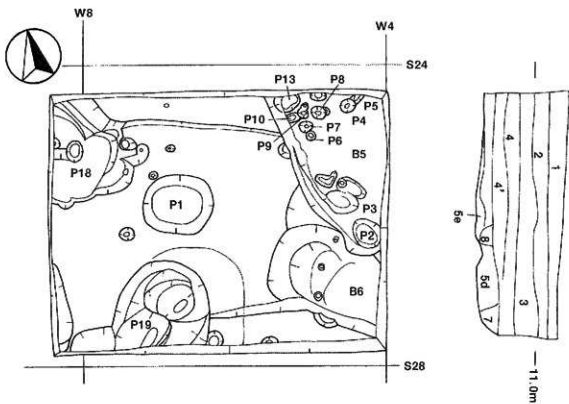


1. 黒褐色シルト→有機質強く、砂が。黒褐色に近い。
2. 黒褐色シルト→有機質強く、黒褐色シルトが。粗砂は少なく、1cmの塊山土層をばらに含む。
3. 黒褐色シルト→1に近く、黒褐色、砂が。2. 3cmの塊山土層をばらに含む。2との境界は不明だが、破砕の塊山土層をばらに含む。2の塊山土。
4. 黒褐色シルト→2よりシルトが。2cm以下の塊山土を含む。
5. 黒褐色シルト→3より有機質の強く、シルトが。黒褐色を混する。黄褐色→塊山土層、塊山土層。
6. 黒褐色シルト→2に似ている。Bに似ている。
7. 黒褐色シルト→2に近い。ややシルトが。
8. 黒褐色シルト→2より粗砂を多く含む。黒褐色を混する。1cmの塊山土層。白灰色砂層、粗砂を含む。
9. 黒褐色シルト (塊山土層) →2に比べて塊山土層を混入する。
10. 黒褐色シルト→2より粗砂を多く含む。シルトが。塊山土層。
11. 黒褐色シルト→2より粗砂を多く含む。シルトが。塊山土層。
12. 黒褐色シルト→有機質強く、黒褐色。5よりも有機質強くシルトが。2. 3cmの塊山土層をばらに含む。
13. 黒褐色シルト→有機質。シルト質強い。黄褐色層を含む。塊山土層を含む。
14. 黒褐色シルト→12に2. 3cmの塊山土層を含む。
15. 黒褐色シルト→2より有機質強くシルトが。2より灰色味を帯びる。1-1.5cmの塊山土層を含む。
16. 黒褐色シルト→2より有機質強く、粗砂を多く含む。シルトが。
17. 黒褐色シルト→2より粗砂を多く含む。2より灰色味を帯びる。1-1.5cmの塊山土層を含む。
18. 黒褐色シルト→19より砂が。62' 埋土が。
19. 黒褐色シルト→18より有機質強くシルトが。1cmの塊山土層をばらに含む。
20. 黒褐色シルト→18に塊山土層が混入する。
21. 黄褐色→灰褐色土層。塊山中。
22. 黒褐色シルト→18に塊山土層が混入する。
23. 黄褐色→塊山土層。塊山中。
24. 黒褐色シルト→18より灰色味を帯びる。1. 2cmの塊山土層をばらに含む。
25. 黒褐色シルト→19に1. 2cmの塊山土層を含む。28' と関連。
26. 塊山土層→塊山土層。
27. 黒褐色シルト→28より砂が。18との違いは不明。
28. 黒褐色シルト→27より有機質強くシルトが。1cmの塊山土層をばらに含む。18との違いは不明。
- 28'. 黒褐色シルト→28に1. 2cmの塊山土層を含む。
- (28. 28' は2埋土が)
29. 塊山土層→塊山土層。
30. 黒褐色シルト→有機質強くシルトが。塊山土層を含む。
31. 塊山土層
32. 黒褐色シルト→粗砂が目立ち、砂が。1. 2cmの塊山土層をばらに含む。
33. 黒褐色シルトが7-32と共に色1層となされている。
34. 黒褐色シルト層→粗砂が。
35. 黒褐色シルト→灰色味を帯びる。シルトが。塊山土層を含む。混入。
36. 黒褐色シルト→塊山土層
37. 黒褐色シルト→黒褐色を混する。シルトが。1. 2cmの塊山土層を多く含む。
38. 黄褐色塊山土層→塊山土層
39. 黒褐色シルト→37に2cmの塊山土層を含む。
40. 41埋土なし。



1. 黄土
2. 黄土層の少し上、褐色の山土層が帯状に露れる。
3. 黄土層「底」を穿てた後、頁岩層を穿てた後、
4. 頁岩層の少し上、褐色の山土層、黄土層、砂岩層を穿てた後、
5. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
6. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
7. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
8. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
9. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
10. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
11. 山土層が帯状に露れる。
12. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
13. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
14. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
15. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
16. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
17. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
18. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
19. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
20. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
21. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
22. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
23. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
24. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、
25. 黄土層の少し上、褐色の山土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、黄土層を穿てた後、





1. 黄土
2. 灰褐色シルト…シルト質強い。砂質弱。
3. 灰褐色細砂…シルト質強く、あまり押し出っていない。砂世階層を含む。
- 3'. 灰褐色細砂…特に軟らかく、色度の異なるシルト混じり、攪乱を受けている。
4. 茶褐色シルト…砂質強い。粘土土層を含む。
- 4'. 茶褐色シルト…4よりシルト質強く、粘性強い。腐味も強く、2-3cmの粘土少量を含む。
- 5a. 黒褐色シルト…灰褐色シルト塊を含む。5b, 5cに比べ砂質強く、色度は深い。
- 5b. 黒褐色シルト…5aに比べて砂質強く、腐味が強い。
- 5c. 黒褐色シルト…5bより更に砂質強く、腐味も強い。
- 5d. 黒褐色シルト…地山土塊、粘土塊を多量含む。黄土粒は4'より大きい。
- 5e. 黒褐色シルト…1-3cmの地山土塊を多く含む。断面時に露出したような状態。
6. 黒褐色土…地山土塊…地山土塊は大きい。ピット埋土。
7. 地山土塊混黒褐色シルト…地山土は量が多く、大きい。
8. 茶褐色シルト…4'に近いが、腐味が強く、粘性も強い。ピット埋土。



第14図 砂場平面・断面

4-3 遺構と遺物

検出された遺構は、弥生時代、古墳時代、古代（平安時代）に大別できる。以下、この順に報告する。検出された遺構は位置や埋土、出土遺物などを一覧表にまとめた（表6）。これらのなかには周囲の掘削などにより滅失したり、プランが曖昧になったりしたため、確認できなかったものもあるが、そのまま示してある。また遺構名が重複しているものもあるが、明記し、区別を示した上で名称はそのままである。以下では、時期が特定できた遺構を中心に記述する。また、遺構ごとの断面図はあまりないが、基本層序で示したグリッドのAゼで記録されているものが多いのであわせて参照していただきたい。

なお、遺物に関しては、器種、形式の分類は改めては提示せず、一般的に使用されている名称を採用した。遺物の相対的な時期については、弥生土器は〔永井・村木2002〕に基づき、須恵器は〔尾野2000〕によった。また、調整などの記述に関しては、一般的に用いられる語を採用したつもりであるが、用語について若干の説明をしておく。土器の調整については以下のように使い分けた。ハケメは、板状の工具によると思われる調整の内、条線が明瞭に確認できるもの、それに対してイタナアも同様な原体であると思われるが、条線が観察されるものの不明瞭なもの、ヘラナアは同様な幅の原体であっても条線が観察されないもの、である。条線が確認できるものの内、極めて粗く、原体がハケメとは明らかに異なるものは条痕と記した。

弥生時代

前期

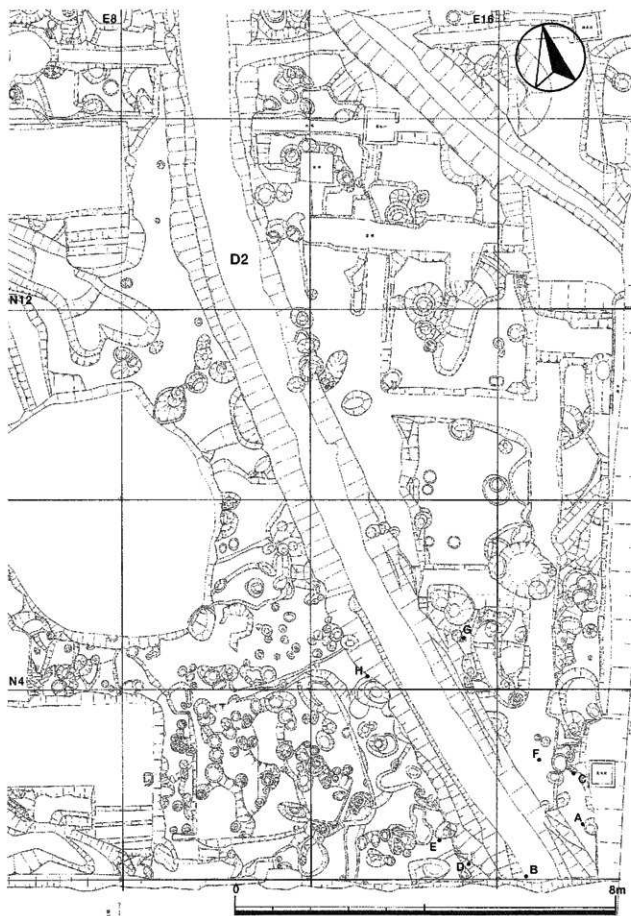
D2（第15図）

D2は、調査区東部で検出された溝で、北西から南東方向にのびている。幅は、検出面で1.5から2mをはかる。

D2の埋土断面は、N12E8グリッド北東端、N8E12グリッド、N4軸上、SN00軸上（第8図）等で記録されている。断面の形状は、逆台形ないしはU字形を呈する。検出面の状況によって深さはまちまちであるが、底部の水準値は10.6mではほぼ一定である。

埋土は、基本的にすべて黒褐色土であり、砂を多く含むシルト質である。含まれる地山土や、漆黒色土の大きさや量で分層されているが、境界が不明瞭なところも多く、明確には分層できない。また、4地点の埋土を比較すると、上位が漆黒色に近く、下位が灰色味を帯びているという傾向が見て取れるが、具体的に層序を対応させるのは困難であった。ただし、貝層については埋土の比較的上位で、径が1cm程度の地山土粒を含む上層中に形成されている点は共通している。貝層については、ブロックサンプリングを実施した。位置は図（第15・16図）の通りである。このサンプルの分析結果については渡辺誠先生から頂いた原稿を付論に掲載した。なおサンプル4・5は同一地点のものを上下に分けたものである（第16図参照）。

この溝からは弥生時代前期の上器がまとまって出土している。土器は、層位的には貝層が染められた黒褐色土を中心に出土している。1群から9群に分けて取り上げられている。埋土上面から出土した6つの土器群は、北から順に1群から6群とされ、1から3群は貝層外、4から6群は貝層上端に接しての出土である。この土器群を取り上げたところ、その下から更に3群の土器が出土した。これを北から順に7群から9群とした。これらの土器群も埋土の上位にあり、8群の一部と9群は貝層中から出土であった。出土



第15圖 D2平面圖

状況は一部を図化したが、各土器は一體体が丸ごと残っているものもあるが、破片化したもののほうが多い(第17図～第19図)。

D2は、弥生時代前期の資料が最もまとまって出土した遺構であり、その量も、同じく弥生時代前期に属するD5やD10を上回る(第23図～第25図)。

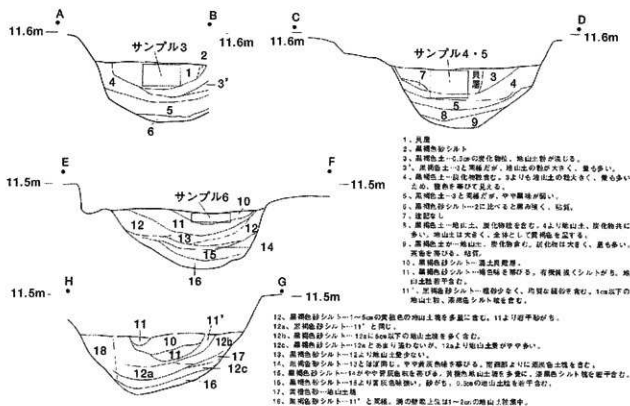
出土資料の大半は土器が占める。対して石器やその他の遺物も少量あり、土鍾も数点出土している。出土土器は、遠賀川系が最も多く、ついで条痕文系、削痕文系もわずかに見られる。沈線文系は確認できていない。

[遠賀川系土器]

A類(汎西日本共通の特徴を持つ一群)とB類(在地系遠賀川/金剛坂式土器と呼称された一群)とがある。A類のほうが主であり、B類は容体的で出土頻度は低い。器種は、壺・甕・鉢・甍がある。

壺は、大型のものの中・小型のものとみられる。A類は、口縁が大きく外反して胴部が張り出す器形に多条のヘラ描沈線文が施されるもの1～3と、口縁部の外反が緩やかで頸部があまりしまらないもの4・5がある。後者も頸部にヘラ描沈線文を施しているが条数が少ない。6・7・9・10はB類である。ただし9は器形的にはB類だが、胎土はA類と同様の白く粗い砂粒を多く含む上である。11は手づくねの小型の壺、12は小型壺を製作する途中で転用されたような器形を持つ鉢である。

甍は大半がA類のものであり、B類のものは数少ない。中型の大きさが中心で、さほど大型のものは見られない。A類は頸部のヘラ描沈線文の条数が4条程度、口縁端部には刻み目を施すものがほとんどである。胴部が丸みを持ち頸部がくびれる器形13もあるが、胴部の張りが弱く、わりあい直線的に立ち上がる



第16図 D2断面図

器形14・15が多い。16はB類で、沈線は半截竹管状工具によるもの。18は蓋の底部と思われる。穿孔を途中でやめている。外面に初圧痕がみられる。

鉢は全体的に大型である。口縁部が短く開き丸みのある胴部を持つ器形20・22と頸部がくびれる21がある。器形や刷毛目や沈線の施し方などに、バラエティを感じる。

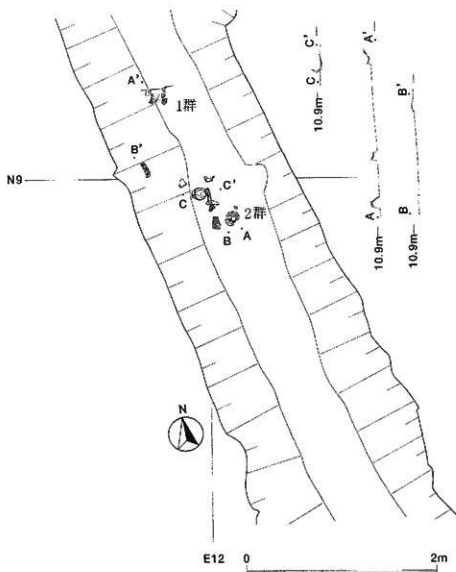
蓋は、壺用と甕用がある。19は頂部のつまみがしっかりした、高さのある甕蓋である。

[条痕文系土器]

壺・深鉢・鉢が出土している。条痕文の原体は貝殻である。

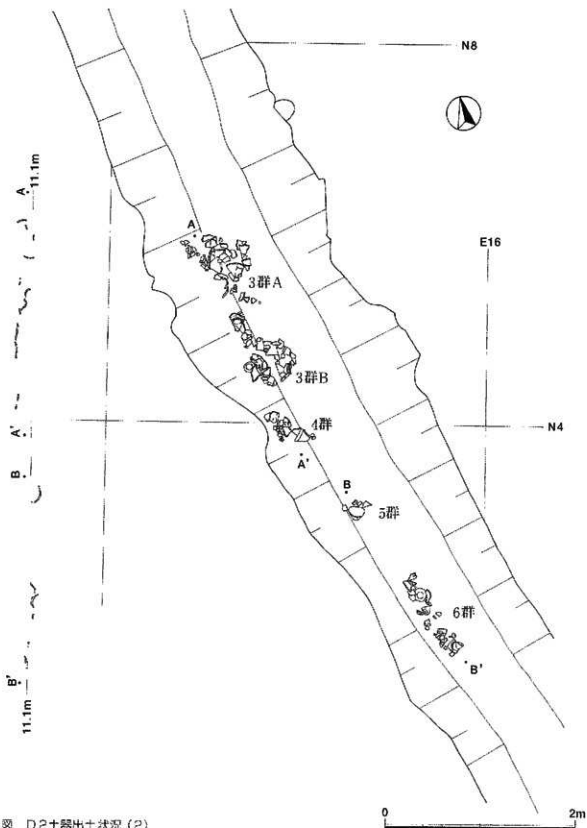
27は蓋の胴部下半である。ハの字状に大きく開いていくことから、本来はかなり大型の蓋と思われる。

深鉢23・24は、比較的まっすぐに立ち上がる器形である。どちらも口縁端部には条痕原体による押引文が施されている。一方、25は遠賀川系の影響を受けて甕化しているもので、頸部がくびれた丸みのある胴部と、短く外反する口縁を持つ器形である。口縁端部には、遠賀川系と同様に刻み目が施されている。条痕の方向は斜位が多いが、24は胴部上方は横位、下方は斜位に施されている。条痕文系深鉢の底部は中央に穿孔をおこなっている例がよく見られる。

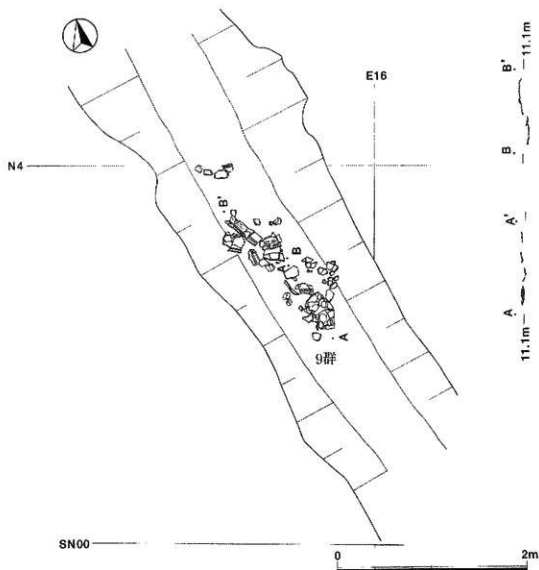


第17図 D2土器出土状況(1)

26は小型の鉢である。条痕文系土器ではあまり見られない器種である。全体に粗雑な作りである。
 ここで、条痕文系土器と遠賀川系土器は使用している胎土が異なるが、23や25は遠賀川系の壺などとよく似た胎土で作られている。



第16図 D2土器出土状況(2)



第19図 D2土器出土状況(3)

[その他の遺物]

28は条痕文系上器の破片を利用した加工円盤である。あまり二次加工を施した形跡はない。

29は柱状片刃石斧である。石材は頁岩と思われる。刃部欠損後に二次調整の打撃をおこなっている。形状から、偏平片刃石斧が縦位に割れたものを再生利用している可能性も考えられる。

D 5

D 5は、調査区の中央部EW0N16からE4N4で検出された溝である。方向はD 2とほぼ平行し、北西から南東方向にのびている。

D 5の断面は、調査区北壁面(第7図)、N8軸、SN00の調査区南壁(第8図)で記録した。断面の形状は逆台形をしており、検出面(熱田層上面)からの深さは0.5~0.7mをはかる。底部の水準値は、南のほうが小さく、南に下がるように傾斜しているものと思われる。この溝は、調査区の南端で二段に分岐しており、調査中には二つの遺構が重なっている可能性も考慮された。しかし、直接の切り合いは確認できず、どちらとも決し難いため、両者をD 5として扱った調査時の所見に従っておく。

埴土は、すべて黒褐色砂シルトである。上位層には粗砂が多く含まれており、最下層には多量の地山土塊が含まれている。調査区の北よりEW0N12付近では埴土の上位に地山土による面が形成されていた。

D5は、D2やD10と比較すると、遺物の量は少なく、破片資料が多いため器形を復元できる資料が少ない。そのためもあるだろうが、全体的に大型の遺物は見られないという印象がある。

出土遺物は土器に限るようだ。石器類、その他の遺物は確認できていない。土器は、遠賀川系（A類・B類）と条痕文系、削痕文系が確認でき、多くは遠賀川系である。

[遠賀川系土器]

壺・甕・鉢・蓋がある。

壺ではB類にあたる資料は確認できなかった。条数が4条以上で頸部が長く直線的である66・69のタイプもあるが、D5では63・64のような、頸部があまり発達せず口縁部が短く緩く外反する器形が目立った。このタイプには頸部に削出突帯（もしくは沈線を利用してそれを模しているもの）を持つものがみられる。70～72は貼付突帯に棒状工具やヘラ状工具で刻み目を施した壺の破片である。

68は壺か鉢の底部だと思われるが、内面に鉄分が多く付着している。ベンガラなどの彩料を保存していた痕跡かもしれない。

壺は甕蓋と壺蓋が出土している。壺蓋73は頂部のつまみ部分で、それほど発達しておらず小振りなものである。壺蓋74・75はどちらもミガキ調整のみのシンプルなものだが、75は縁辺に半円形の赤彩を施したような痕跡がある。76も蓋かと思われたが高杯脚部の裾部分の可能性もある。内外面とも丁寧にミガキ調整が施され、穿孔が1穴確認できる。

鉢78は短くわずかに開く口縁と張った胴部を持ち、ハケ調整の後にナデ調整を施している。破片資料80でもナデ調整をよくおこなっている。84も鉢口縁部と思われる。

甕はA類・B類共に存在する。B類は81・82・85である。強く外側に折れた口縁部とあまり張らない胴部を持つ。頸部の沈線文は半截竹管状工具による。

[条痕文系土器]

ほとんど破片資料で、深鉢の破片が多い。87～90は口縁端部に条痕原体で押引文や沈線を施している。91は強化した資料の口縁部で、わずかに外反する器形と口縁端部の刻み目が確認できる。94は波状文の一部か、壺胴部の破片と思われる。97は深鉢の底部である。

[削痕文系土器]

破片資料だが深鉢の口縁部などが少量みられる。79は器面の磨耗が激しいが削痕文系に含まれる資料と思われる。

D10 (第20回)

調査区の中央部EW0N4から南西にむかっているのびる溝であり、弥生時代後期の方形周溝墓などに切られているが、15m程を検出した。北側の端は、防空壕によって切られており不明であるが、時期と位置関係から見てD5から分岐した溝であろうと思われる。南西は調査区外へと続いている。地山面での幅は、1.8～2.0m、地山面からの深さは、最大で0.8mをはかる。底部の水準軌は、南にいくほど小さくなっており、南に下がっていくものと推測される。溝の断面は逆舟形を呈している。埋土はいずれも黒褐色砂シルトであり、地山土の昏や黒褐色土の暈で分層されているが、境界が不明瞭なところも多く、明確な区分は難しいようである(第8～11図)。溝の最下位には地山土を多く含む土が堆積していた。また、S0軸からS4軸の間では、黒土中に地山土を多く含む黒褐色土によって面が形成されていた。そして、それと同じレベルで埋土が焼け、炭化物が集中していた。また、同じレベルで貝層が検出された。ここでもサンプルを採集している(第21図)。この炭化物の層は、S4軸付近ではほぼ水平に面をなすように堆積しているが、S8軸付近では溝の形状に沿うようにじ字形に堆積している。

溝内では致箇所で土器がまとめて出土している。D10の一番北部分ではD3と重なる地点で土器が出土しているが、この内壺の口縁部は土器の特徴から見て本来D3に属するものと思われる(第22図)。

前期の遺物では、多くの上器とともに、石器や加工円板などが出土している。

土器はほぼ遠賀川系もしくは系外系に分類でき、それ以外は前痕文系と思われる破片資料がごくわずかみられたのみである。土器は全体的に、大型のものが多い印象を受けた。

[遠賀川系土器]

A類・B類ともに存在する。しかし、A類が主体で、B類の出土はごくわずかである。壺・甕・鉢・蓋がある。

壺は中・大型品が中心で、32のような小型のものは少ない。A類は、頸部が柱状に立ち上がるもの30・33とくびれるだけのもの31と二種類あるが、どちらも朝顔状に大きく口縁部が外反する。胴部はかなり大きく横に張り出すが、扁平なB類よりも丸みがある。ヘラ描沈線文の多線化が目立ち、6～8本で一単位を成すものが多くみられる。沈線文と貼付突帯を組み合わせた文様帯をもつもの31・36もある。35・36はB類である。35はヘラ描沈線文4条一単位で山形文らしい文様を描いている。36は胴部の扁平化と大型化が顕著である。この資料は器形的にはB類だが、胎土はA類と同様のものを使用している。また、34は甕の底部と思われるが、底部外面に刺痕が残っていた。

甕は、37のような典型的な遠賀川系A類の特徴をもつタイプのほかに、擬位の刷毛目を施した後口縁部から頸部をナデ調整で無文帯にするタイプ38・39がある。器形や調整に前痕文系と似ている部分があり、折衷型に分類できるかもしれない。

鉢は胴部が口徑と同等くらいにまで張って丸みが強い。40は、鉢の刷毛目は通常横位であるのにその原則に当てはまらない例である。鉢にしてはやや縦長で甕との中間ともいえる器形。胴部下方にミガキ調整が施されている。41は煮炊用の鉢で、一對の把手がつくタイプ。小型鉢42はナデ調整。

蓋は蓋蓋が出土している。円盤状のもの45と笠形につまみがついたもの46とあり、どちらもミガキ調整で仕上げられている。46は円周に沿って縁辺に2条ヘラ指沈線文が施されている。

〔条痕文系土器〕

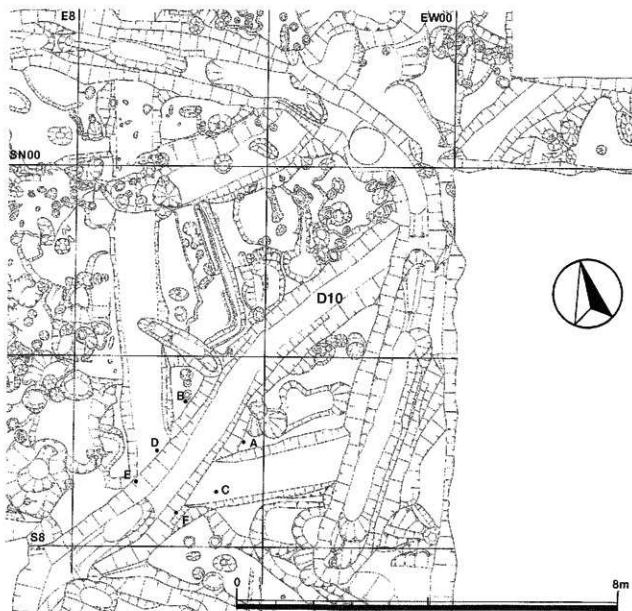
壺・深鉢・鉢がある。出土した条痕文系土器の大半は深鉢である。

壺50は、肩部～胴部上半が大きく膨らむ卵形の胴部を持つ大型の壺である。条痕原体の沈線をはさんで、2条の波状文が二段、肩部に展開している。同様の例が58の壺破片である。

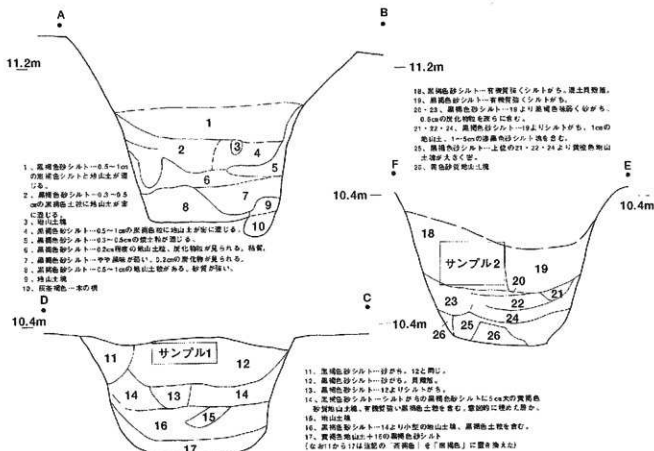
48・49・51～57は深鉢の資料である。底部48・49はどちらも中央に穿孔をおこなっている。このような穿孔された底部破片は比較的多い。51～56は口縁部破片だが、どれも口縁部の外反が弱いことから、直線的な胴部を持つタイプではないかと思われる。条痕の方向は、口縁部は横位で頸部以下斜位や横斜位に変化する例が多い。口縁部内面に細い棒状工具による刺突文をもつもの54や口縁端部に押引文等施されているもの55・56もある。鉢47は条痕を施した後イタナアを雑におこなっている。

〔削痕文系土器〕

ごくわずかに破片資料がある。43・44はいずれも深鉢の口縁部片と考えられる。



第20図 D10平面図



(A~Eは第20図と対応)

第21図 D10断面図

【その他の遺物】

59は、遠賀川系土器の壺破片を利用した加工円板。断面部分をよく磨っており、丸くなっている。

石器が3点ある。60は太形の向刃石斧。石材は輝緑岩か閃緑岩と思われる。刃部欠損後叩き石として再利用したようで、叩打痕が確認できる。61はスクレイパー、石材は灰色チャートで江戸時代の委老煎火打石と同じ石材である。62は石鏃で、石材は下呂石。一部欠損している。

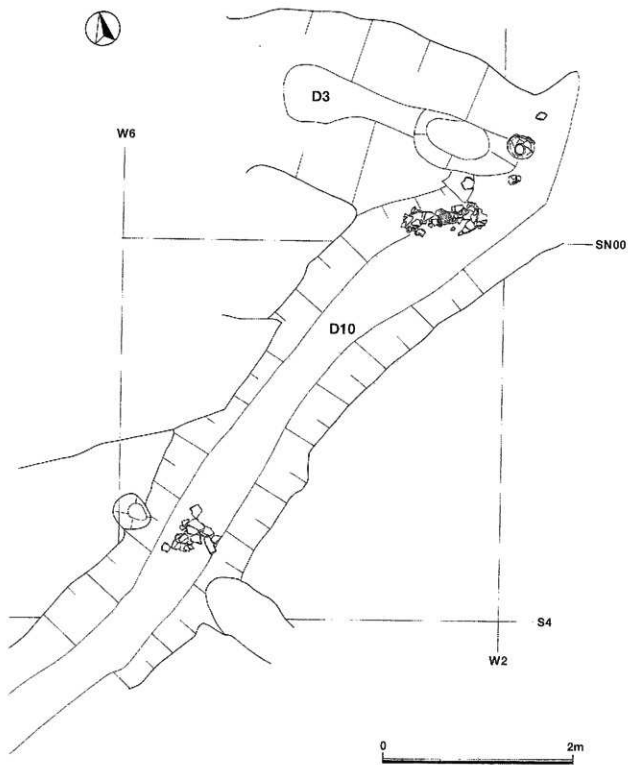
その他の前期遺物

D2・D5・D10以外の遺構からも、弥生時代前期の資料が出土している。中には前後する時期の資料も含まれている。ここでそのような例から3点ほど報告する。

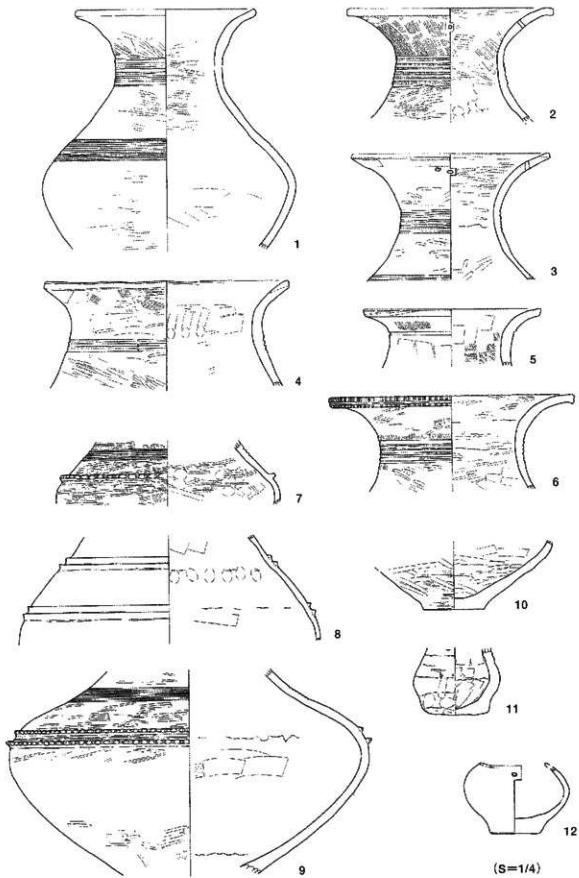
98はD9の屑から出土した石棒である。石材は緑泥片岩で、下方は失われている。全面的に風化しているが、あばた状の叩打痕が観察される。本来、石棒は縄文時代晩期に多くみられる遺物であるが、今回の調査地点では晩期資料が他にみられないことから、弥生時代前期まで下る可能性がある。

99は内傾口縁土器。溝状遺構からの出土らしいが出土位置が曖昧な資料である。器面荒れが激しいが条痕による調整がみられる。肥厚化がみられ、前期末~中期初頭の資料と思われる。

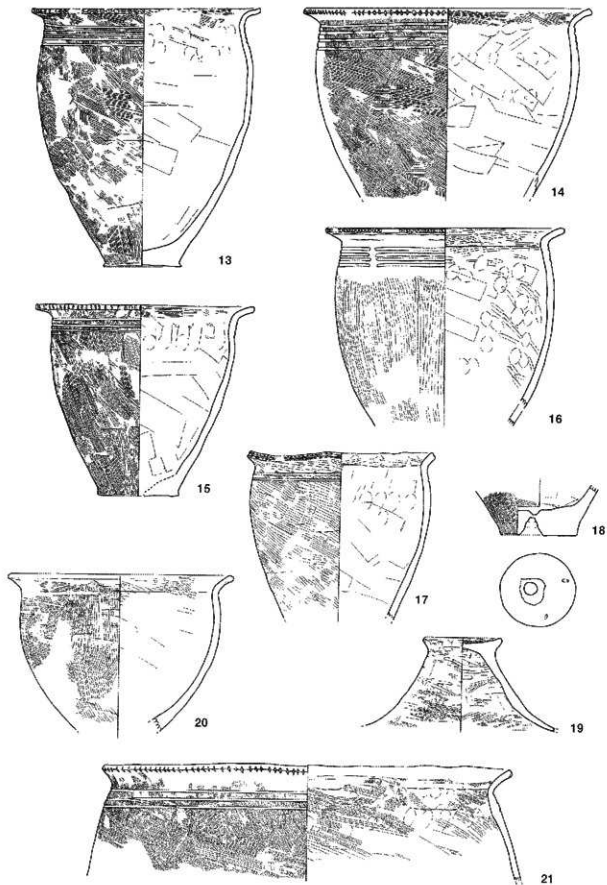
100はいわゆる大地式土器と呼ばれる、沈線文系の土器破片。黒褐色の胎土で内外面とも沈線文と浮文で加飾されている。これもやや時期が下り、中期初頭の資料と考えられる。



第22圖 D10土器出土状況

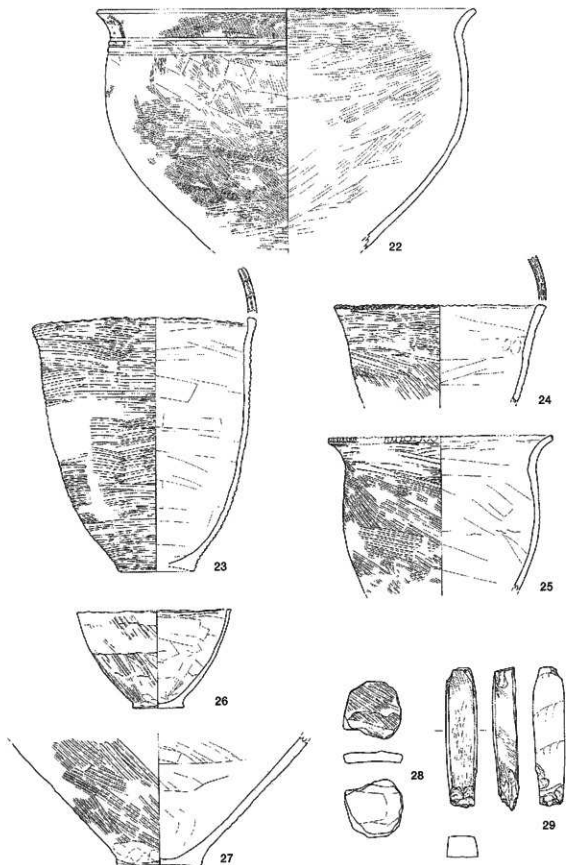


第23図 弥生時代前期の遺物 (1) 1~12 : D2



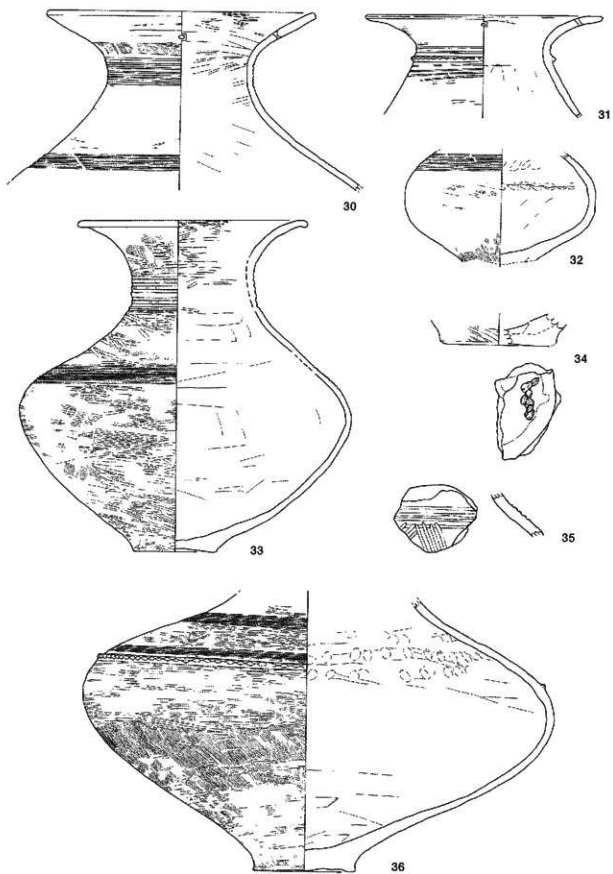
第24図 弥生時代前期の遺物(2) 13~21:D2

(S=1/4)



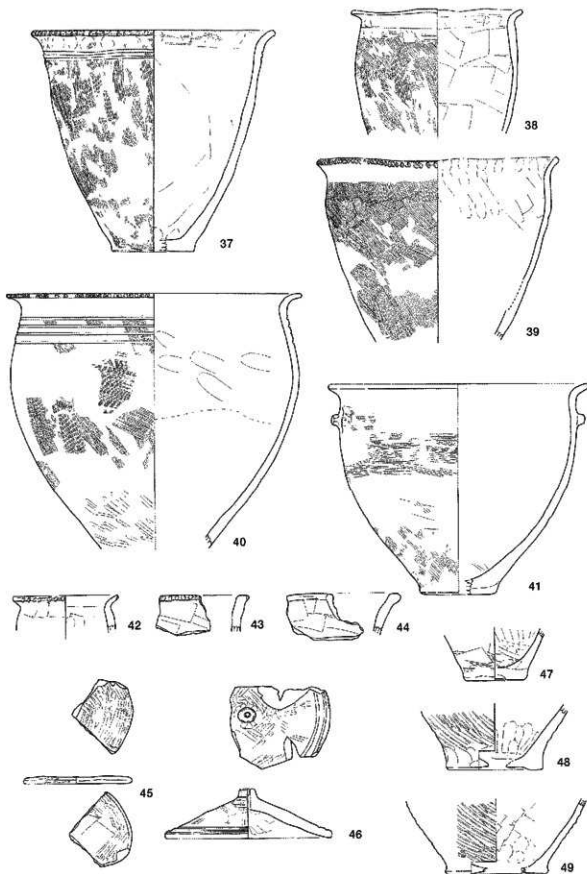
(22~27 : S=1/4, 28 : S=1/3, 29 : S=1/2)

第25図 弥生時代前期の遺物 (3) 22~29 : D2



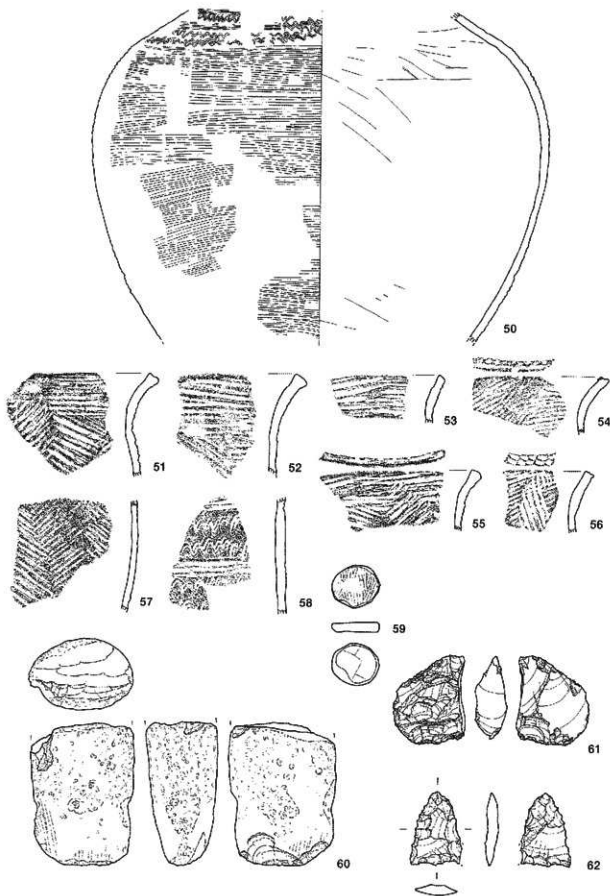
(30~33・36 : S=1/4, 34・35 : S=1/3)

第26図 弥生時代前期の遺物 (4) 30~36 : D10



第27図 弥生時代前期の遺物 (5) 37~49 : D10

(37~42 : S=1/4、43~49 : S=1/3)



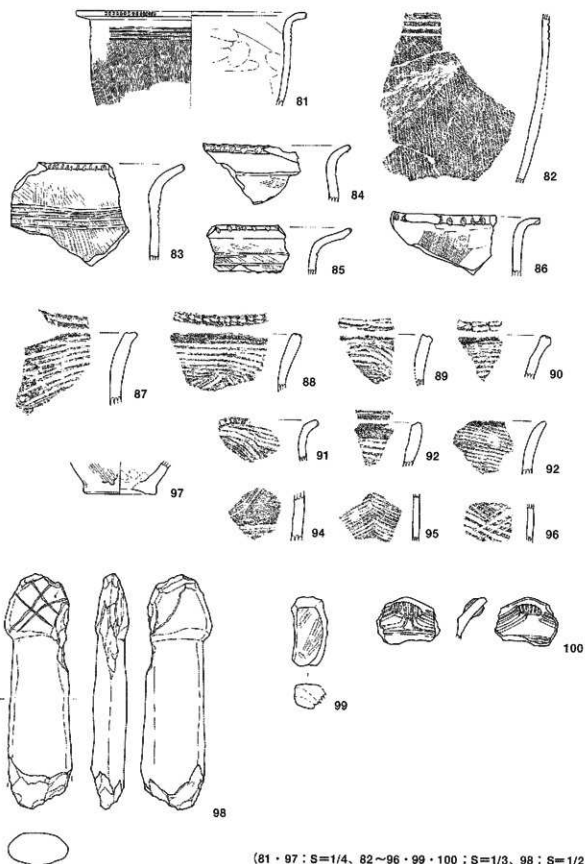
(50 : S=1/4、51~59 : S=1/3、60・61 : S=1/2、62 : S=1/1)

第28図 弥生時代前期の遺物 (6) 50~62 : D10



(63~68・76~78 : S=1/4、69~75・79・80 : S=1/3)

第29図 弥生時代前期の遺物(7) 63~80 : D5



(81・97 : S=1/4, 82~96・99・100 : S=1/3, 98 : S=1/2)

第30図 弥生時代前期の遺物 (8) 81~97 : D5, 98 : D9, 99・100 : 包含層

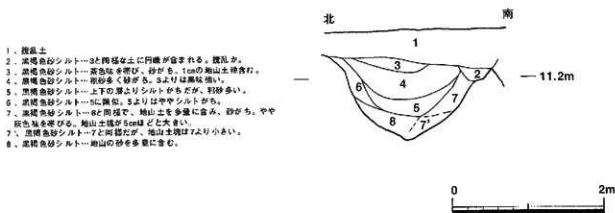
中期

D 1

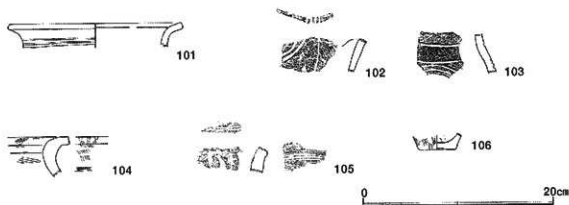
調査区の北東端で検出された溝状の遺構であり、北西から南東に伸びている。残りのよい部分で幅は1.2m、検出された面からの深さは約0.5mを測る。

検出された部分のうちの北半は、埋土の中位まで攪乱を受けており、1943年に東大が発掘調査を行った痕跡であると判断された。埋土はいずれも黒褐色砂シルトであるが、上位が砂がちであった。溝の下位には地山土の塊が多く含まれていた。この地山土塊を含む土は、溝の南西側から流れ込んで堆積したように見える（第31図）。

遺物は小片が多い。101のように弥生時代前期のものもあるが、沈線紋らしい土器の口縁部102や瓜壺式かと思われる壺の胴部103など中期の遺物も含まれている。102は波状になる口縁部の破片である。104は壺の口縁部、105は条痕文系の壺の口縁部であろう。端角と内面に沈線が施される。106はミニチュア品の底部である。出土遺物からみる限り、この溝が埋まったのは弥生時代中期であると思われる。ただし、前期の溝D 2やD 10にも中期といってもいいような小破片もあるため時間的な関係は難しい。



第31図 D1断面（調査区東端）



第32図 D1出土遺物

後期

D 3

調査区の南部で見つかった溝である。N4W12グリッドから東にのび、N4W4グリッドではほぼ直角に折れ、南に伸びている。南端は、S8W4グリッドで途切れている。幅は1.5m（最大幅2m）、深さは1m（最大1.3m）を測る。断面の形状は緩やかなU字形である。埋土は何れも黒褐色砂シルト。上位は地山土を含まないが、下位には1cmから5cm程度の地山土を含んでいる。また、埋土の上位から中位には焼上、炭化物粒が含まれている。底から30cm～80cmの間は、黒味が強く漆黒色を呈している（第8・10・11図）。

この溝の東辺上層では破片となった土器がまとめて出土している（第35図）。また、埋土の中位から下位の漆黒色上からは完形の土器が数多く出土している（第33・34図）。この下位の土器は、東辺および東辺から北辺へのコーナー部に見られる。下位の土器は、完形の壺が主体である。溝の底からは上位の地点で、土器の向きはまちまちであり、その場に据えられたような状況ではない。これらの土器の周辺には米粒大の焼上粒が集中しているのが認められた。

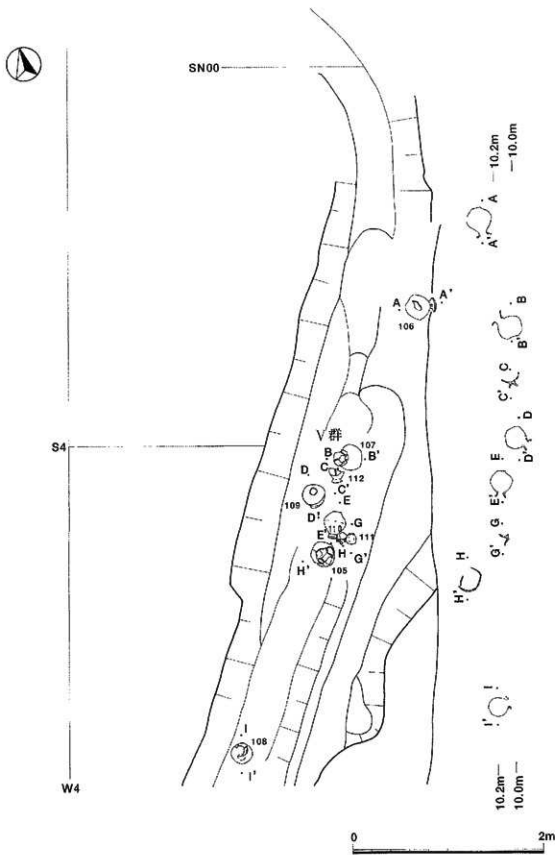
この溝は、L字状に屈折している点や遺物の出土状況等から見て、方形周溝墓の一部である可能性が高い。しかし、南辺に相当する溝が未検出である。南辺の溝が想定される位置にはD11があり、時期から見てこれに壊されている（あるいはこれと共有されている）可能性が高いが、それを示す所見は観察されていない。

遺物は、埋土の中位～下位から出土した遺物と、上面でまとめて出土した遺物に分けることができる。調査時点ではIからVI群の6つのまとまりに分けて取り上げられているが、IからIII群までは上面土器群と明記されている。土器群IVについては出土状況図が残されていないが、水率値や出土土器の特徴から見て埋土上面土器の一部と判断する。VおよびVI群については埋土下層から出土した土器群である。

下層の土器のうち、V群とされたのは東辺中央から出土したもの（第33図）で、VI群は東辺から北辺のコーナーから出土した土器群である（第34図）。土器は完形の壺が多いが、正位のものほかに、横倒しになった状態のものや倒立したものもあり土器の出土の仕方はまちまちで、据え置かれたというような状況とは思えない。埋土中位から下位の漆黒色に近い土層中から出土しており、底に接するような最下位ではない。

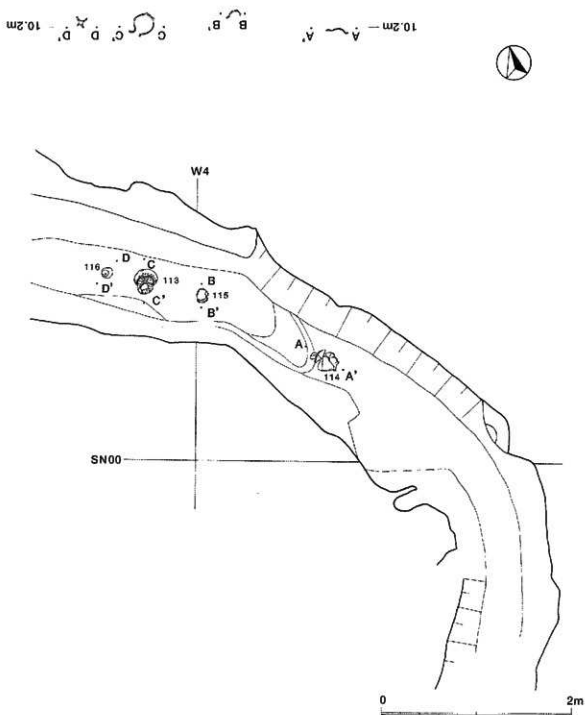
これらのV・VI群の土器は遺存度も高く、本来この方形周溝墓に伴う土器であると認めてよいと判断する。その他に出土位置が明記されていないものもあるが、この中には遺存度の高いものと小片となったものがあり、前者は本来この方形周溝墓に伴った土器である可能性が高い。東辺と北辺、更に正確な位置不明だが遺存度の高いもの、同じく遺存度の小さいものという順序で遺物を提示する。なお、法量、調整などについては観察表（表3～5）も合わせて参照して頂きたい。

107から114は東辺から出土した土器である。壺が中心で、ブランドーグラス形の高杯、これとよく似た台付鉢とでも呼ぶべきものがそれぞれ1点伴っている。壺はいずれも無文のものであり、107のみが残っている胴部外面全体に赤彩を施している。この壺は残っている限りでは、胴部の上位にも文様が見られず無文であると判断する。108から112については全く装飾を持たない。法量的には108、109はそれ以外よりはやや大きい。口縁の作りや胴部の形態、調整など多様であるが、口縁端部の形態を見ると、108～110は面をなし下方に突出しているのに対し111、112は端部は四角くなり面を持つものの、下方に突出してはい



第33图 D3东边土器出土状况

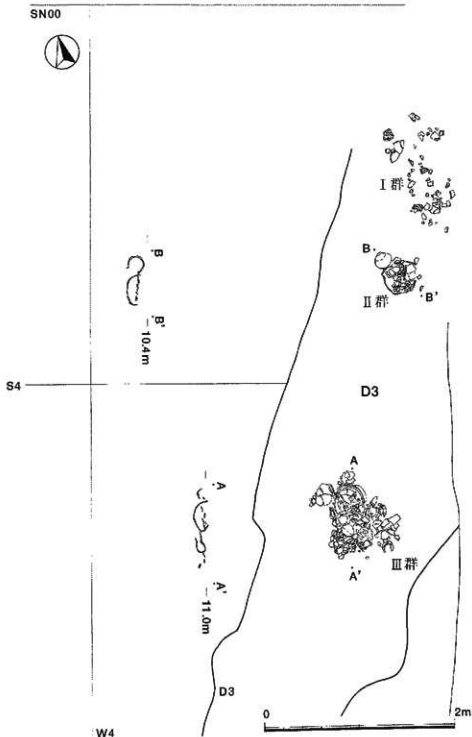
ない。ただ、前者についても2がヨコナデによって、1条の凹線を持つように見えるほかは、凹線或いは擬凹線のものはない。頸部の形態は、111のように緩やかに屈曲しているものもあるが、大半ははっきり外折している。胴部外面の調整については、ハケメないしはナデによるものが大半であり、ミガキが見られるのは109のみである。109については、胴部下半にミガキに先だって縦方向にヘラケズリないしはイタナデの痕跡が認められる。



第34図 D3北辺土器出土状況

113は球形の杯部を持つ高杯である。杯口縁付近は直立している。後のブランドーグラス形高杯の祖形と思われる形態である。外面は全面赤彩である。114は113と同様な形態をしているが、鉢部は単純に内湾して終り、台部も113とは異なる形態で、堯の台に近い形態をしている。114のこうした特徴は、後のブランドーグラス形高杯につながっては行かないため台付鉢として113とは区別しておく。114の鉢部外面は櫛を原体とする羽状刺突、直線文、波状文で飾られている。鉢部は直線文の部分を除いて全面赤彩、台部には9個の円形赤彩が施される。

115から118は北辺から出土した土器である。115、116は壺であるが、東辺とは異なって共に文様を持



第35図 D3上面土器出土状況

っている。115は、胴部に直線文と扇形文、口縁内面にも扇形文を持っている。116は胴部に斜位刺突、直線文、扇形文が施されている。口縁部を欠いているが、胴部から口縁部への屈曲は緩やかである。

117は、有段の口縁を持つ鉢である。外面全体が赤彩されている。あまり類例を知らない。118は、小法量の高杯である。杯部は浅い椀状を呈し、口縁部付近を赤彩する。脚部は上位が中実であり、裾部は屈折して開き、端部には面をなす。端部付近を帯状に赤彩し、裾部には円形の赤彩を施している。

以下の土器は、D3出土ではあるが、出土地点の位置や水準が記録されていないものである。「上面土器群」と明記されているものは除いたが、遺物をもみても明らかな通り、本来上面の土器と思われるものが若干含まれている。また出土層位も「黒褐色」などとあるのみで、図面に示された層位との対応や水準が不明なものである。119から123はその中でも土器の1/2以上が残るなど、遺存度合いが高いものであり、本来D3に所属する可能性が高いものである。119は口縁部を欠いているが文様を持つ壺である。グリッドから判断すると東辺の南半から出土している。櫛指の波状文、直線文、逆U字形の文様が施される。胴部の外面下位は下向きにヘラケズリを行った後縦方向にミガキを行う。これがこの遺構に伴うものであるとすると、東辺で出土した中では唯一の文様を持つ壺ということになる。120はD3というだけで出土位置が不明である。胴部から口縁部へは緩く屈曲する。胴部には櫛による波状文、直線文が施されている。内外面とも器面の剥離が目立ち、調整は良くわからない。121は、台付鉢と呼んでおこう。鉢部の内面にはススや炭化物の付着が目立ち、火にかけた土器である。外面は縦方向にヘラミガキが施されている。口縁部や台の端部はヨコナデによって四角く造っているが、シャープな凹面とはなっていない。台部の形状は壺の口の形状に近い。122は鉢である。短く外反する口縁部を持つ。頸部に2個の穿孔がなされている。外面は縦方向にヘラミガキされる。123はミニチュアの壺である。口縁部を欠いているが、胴部は全体が残る。胴部の最大径の位置に円形の刺突が施されている。122、123は残りがよいが、本来小さな土器であるから、遺存度だけではD3に確実に属するとも言えない。

124から131は、D3出土ではあるが、I-VIの土器群に含まれないもので遺存度の大きくないものである。であるから本来D3とは関わらない遺物や埋土上面土器群のものが含まれている。124から126は壺である。124はIV様式期の受口口縁になる太頸壺に類似する。しかし、口縁端部は凹線ではなく、櫛指の擬凹線である。口縁端部には面を持ち、ヘラによる刺突が施される。125、126は壺である。125は、D3の東辺がD10と交わった地点から出土しており、当時の注記にはD3又はD10とある。出土地点の水準値は10.552mでD3の墳上の範囲内であり、土器の時期からみてもD3に属するものとして扱ってよいと判断した。125、126共に口縁端部には擬凹線が施されているが、125は頸、126はヘラによるらしい。125の口縁の内面には羽状刺突と扇形文が、126には扇形文が6段施されている。125は、頸部に竹管刺突を持った赤帯が2条付けられている。127は壺の台かと思われる。外面は前面が赤彩されている。128~130は壺である。128は外反する口縁を持つが、あまり横には開かず上方に立ちあがっている感じである。口縁端部には棒状工具による刺突が施されている。胴部の外面は丁寧にナデが施されており、タタキ、ハケメなどの痕跡はみられない。内面は頸部直下までヘラケズリが施されている。東辺から出土しているが、位置の記録はなく、図の1/2程度の残存であり、残存状況からはD3に属するとは決め難いものである。129は受口状口縁を持つ壺である。口縁部の外面には櫛によるらしい刺突が施される。胴部上位は斜めハケの後、横ハケメを施している。東辺の北よりで黒褐色出土と記録されているが、位置と土器の特徴から見て上面土器群に関連

するものの可能性が高い。130は甕の台部である。胴部外面はハケメ、内面はイタナデ又はナデが施される。D3出土ということしかわからないが、土器の残存度合いと内湾する形態からみて中下位の土器群ではなく、上面土器群に関連したものである可能性が高い。131はおそらく甕の蓋になるものと思われる。端部はやや丸みは帯びているが四角く作っている。内外ともハケメ調整。内面にはススが附着している。

これらの下層の土器群は、全部が同時である根拠はないが、土器の特徴から見ると明確な時間差は見出せない。甕は口縁部から頸部への形状や文様に弥生時代中期の特徴を色濃く残しているが、タタキのない甕や、赤彩された小さな供養器の存在など後期の土器とすべき新しい特徴も持っている。しかし、こうした新しい特徴も、山中式として知られる後期の典型的な姿には至っていないので後期初め頃（VI-1様式）と考える。

一方上面の土器群は、方形周溝墓の東辺および北東のコーナー付近で出土している（第35図）。東辺中央で検出されたⅢ群は、D3の埋土の上面とはほぼ同じレベルであり、記録からはD3埋土中とできるか微妙であるが、調査時に埋土上位からの出土と判断されており、土器の広がりもD3内に収まっていることからD3上位のものとする。このⅢ群には、極めて多くの土器が含まれる。これに対し、Ⅱ群は、溝内の埋土中位に近いレベルでの出土である。バレス甕の胴部全体と完形の短頸甕が接するように出土している。北東コーナー付近のⅣ群は、土器の出土した水準値は10.734m～11.014mであり、上面に近い高さである。これらの土器群は、完形の土器が多い下位の土器群とは異なって、破片となった土器群がまとまった感じである。もちろんの中には完形に復元できるものもあるが、部分的な破片が土器群に多く含まれている。特にⅠ群については破片ばかりである。

132・133は、Ⅰ群の土器である。132は高杯の口縁部。口縁部には内傾面が形成される。杯体部はやや横に開いている。口縁部付近内面にはユビオサエの痕跡が残るが、これにより口縁部付近は微妙に内湾している。133は台付長頸甕である。台部は欠損している。甕部は頸部があまり締まらない器形である。口縁部外面には貝殻によると思われる羽状文が施されている。

134・135はⅡ群である。134はバレススタイル甕である。口縁部は全く欠損しているが、胴部はほぼ全体が残っている。頸部には突帯をもち、帯による鋸歯文、直線文が施されているが、直線文は浅く、ハケメ又はイタナデのようであり、不連続である。突帯、鋸歯文上及び胴部下が亦彩されており、典型的なバレス甕である。135は短頸甕である。外面はヘラミガキ、内面にはヘラケズリが残る。口縁端部は丸い。136～139はⅣ群の土器である。こちらも破片が多く、全体が分かるものはない。136は台付甕の台部である。台は直線的に開いており、端部は潰れて下側に平出面をなしている。137は直口甕である。口縁部を欠いているが、胴部の遺存度は高い。小さな平底をなしている。138は高杯の脚部。法量が小さなもので、直線的に開く形態である。3方向に外側から透孔が穿たれているが、いずれも貫通していない。139は、高杯の脚或いは台付鉢の台になるものと思われる。端部はヨコナデにより明確な凹面を持ち、下位の土器群に近い特徴を示している。

140～151は土器群Ⅴである。この群は、完形に近いものと破片が混在している。出土状況から見てこうした混在が本来の姿に近いものと考え、ここではそれを区別しないで記述する。140はバレススタイル甕の口縁部。摩滅が進んでいるが、口縁端面には擬凹線と棒状浮文が施され、赤彩の痕跡も残っている。内面は2段の羽状文と円形の刺突がなされる。内面の赤彩については摩滅のため不明である。141・142は球

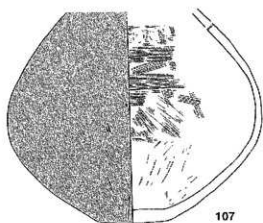
形の胴部、単純口縁の壺である。141の口縁が斜めに開いているのに対し、142の口縁は直立している。141の口縁端部は薄くなっており、面はなさないが内側に突出している。142は薄く、丸くなって終わる。いずれも外面はヘラケズリであると思われ、器面は整っていない。143はS字状口縁台付壺である。口縁部の外面に筋による刺突が施されている。口縁部は途中で屈折して直立し、端部には面をなす。胴部の外面は斜めのハケメの後横にハケメを施している。この胴体は、出土地点がD3上面としか特定できない153に類似しており、同一個体の可能性もあるが、それぞれから復元される口径が異なり、色調も違うため別個体として報告する。144は受口状口縁になる壺である。I群部の外面には、胴部の粗い条痕と同一原体によると思われる刺突が施されている。胴部の条痕は極めて粗い。内面はヘラケズリである。145・146は台部から胴部下位の破片である。146の胴部の外面には、一見タタキの痕跡と見間違ふような粗いハケメが施されている。いずれも台部はわずかに内湾している。

147は直口壺。口縁部は内湾し、端部に内傾する面を持つ。器面が摩滅しており、調整、文様はよく観察できない。底部は僅かに上げ底状になっている。148は器台である。法量が小さく、この時期に新たに登場する、新しい器種としての小型器台とするべきなのかもしれない。受部は直線的で、端部は上方に少し突出する。胴部は内湾する。小型化するというのは西日本の諸地域と関連する現象の可能性があるが、形態はこの地域の在来のもと見て良いだろう。149～152は高杯である。杯部は、149・150とも小さな杯底部から体部が大きく開く、浅い器形である。端部も少し内側に突出させ、上面に僅かに内傾する面があるが、幅の広い明瞭な内傾面ではない。脚部は149・151については中位で屈曲をもち、屈曲以下の裾部は内湾している。

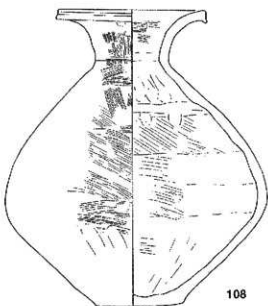
153～156についてはD3堀土上面出土土器群ではあるが出土地点などが確認できなかったものである。上記のI～III群以外の地点の堀土上面土器についての記録などはないので、これらもI～III群周辺の出土であることは間違いないだろう。153は比較的遺存度の高いS字壺である。口縁部の形態は先述の143に近い。胴部は丸みを帯びており、外面は粗いハケメ、内面はナデ、ユビオサエで調整されている。154は粗雑な感じの、法量の小さな台付壺である。口縁部はあまり整っていないが、屈曲なく単純に外反している。155は単純外反口縁の壺である。端部は薄くなって終わっている。胴部には荒い条痕風の調整が施される。156は台部のみ。端部は潰れて内側に突出している。

以上の上面土器群は、出土した高さ等から見て上位の包含層との区別が困難であったと思われ、当然遺物も混入している可能性がある。この土器群が、完形のもの以外に破片も多く含んでいるからなおさらである。しかし、II群・III群などの様にまとまりを持ったものはそれぞれ同時性の高いものと認めて良いものと思われる。II群については、パレススタイルの壺の特徴からみて、弥生時代後期VII～3様式からその後の古墳時代初頭のものである。III群は、多様な器種が含まれているが、S字壺の特徴、高杯の形状等から見て、こちらもⅢ～3様式ないしはそれ以降のものと思われ、一時期の上層群を知るための良好な資料と言えるだろう。

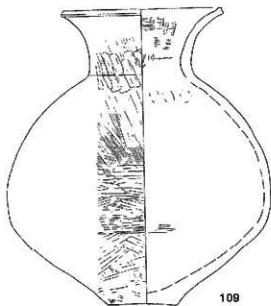
II・III群以外のD3堀土上面土器にも大きく時期を異にするものはなく、堀土上面とした土器群は、弥生時代末から古墳時代初頭に、D3という方形周溝墓に対して行われた何らかの行為に伴う一連のものと考えておきたい。



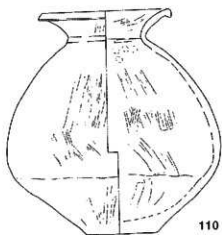
107



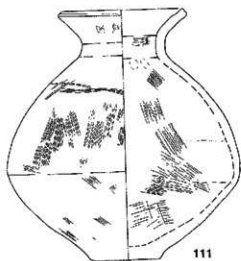
108



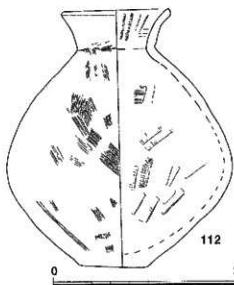
109



110



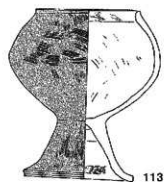
111



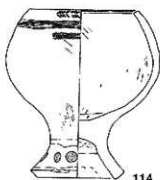
112

0 20cm

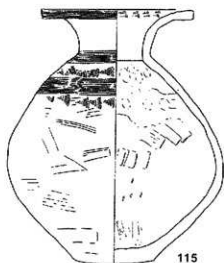
第36圖 D3出土遺物 (1)



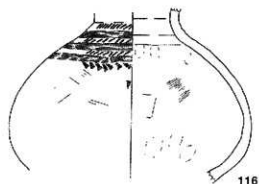
113



114



115



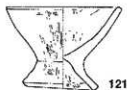
116



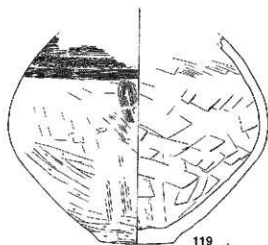
117



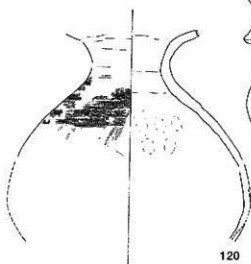
118



121



119



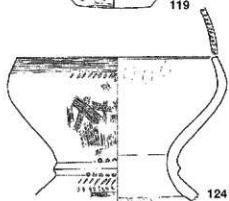
120



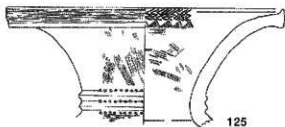
122



123



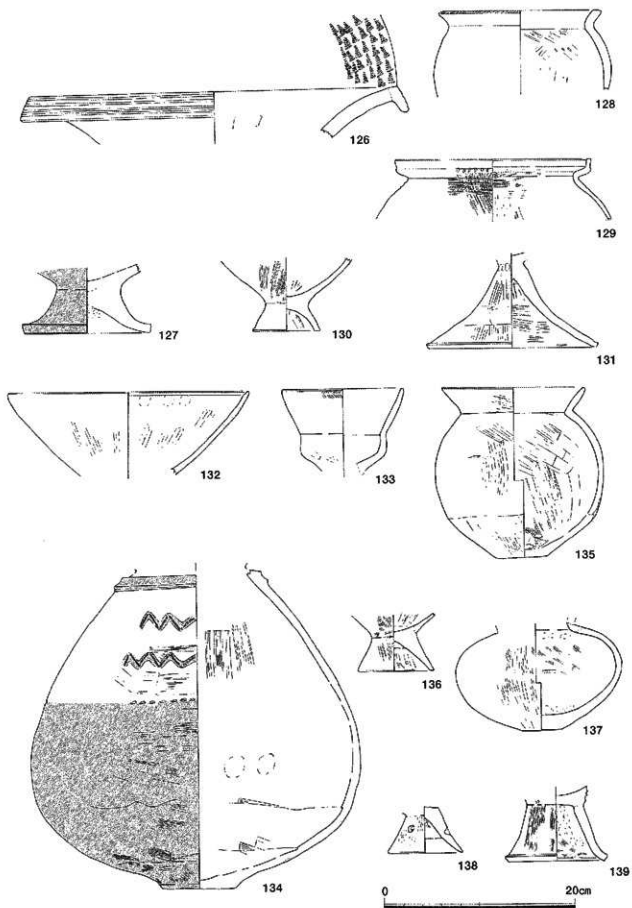
124



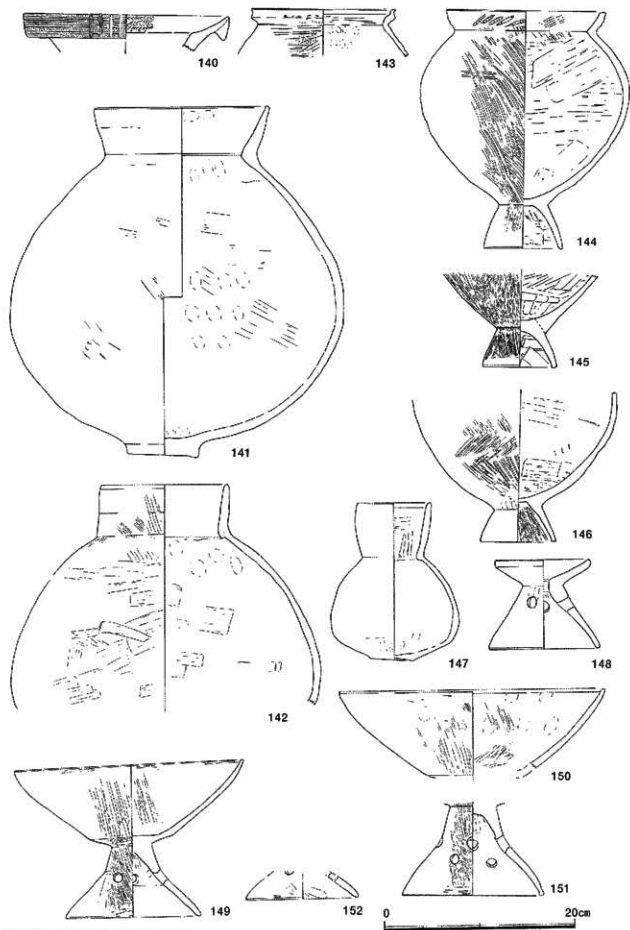
125



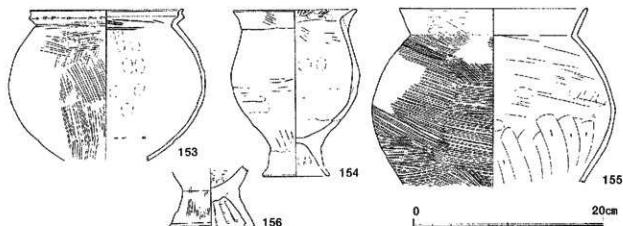
第37圖 D3出土遺物(2)



第38图 D3·D3上面出土器物



第39圖 D3上面出土遺物(1)



第40図 D3上面出土遺物(2)

D11

調査区の南端付近、S8W8からS12W8グリッドにかけて検出された溝である。L字状に検出されている。北西端でD10を切っている。D10との埋土の区別は困難であり、両者の切り合い関係は出土遺物の時期から判断された。また、K14と切り合いを持ち、掘削中にはK14に伴う焼土がD11埋土中に荼かれていたと考えられ、D11→K14という順序が想定されたが、断面の検討ではD11がK14の埋土を切っていると判断されている。そうすると、D11中の焼土はK14とは関係のないものということになる。また、この溝の北辺は前述のD3の南辺にあたる位置である。

幅1.3m(最大1.9m)、深さ0.9m(最大1.3m)をはかり、断面は逆台形を呈する。埋土は何れも黒褐色砂シルトで、地山土や粗砂を含む量で分層されている。上層は砂がちであり、下層はシルトがらである。最下位は黒味が極めて強く、漆黒色を呈している。北辺のD10との交点の断面では、底から20cm~40cmあたりのところに橙黄色の地山土により面が形成されていた。D10と交わる地点で甕の口縁部(157・158)などが出土しており、これらは「土器群1」と呼ばれた。出土土器(157~166)は小片が多い。

157は甕である。I縁部のみ破片である。端部は凹面にはならないが、ヨコナデにより下方に突出している。外反I縁の頸160は口縁端部に面を持ち、帯による刺突が施されている。内面は胴部上位までヘラケズリがなされている。161はS字案に分類されるべきものだろう。162は受口口縁蓋である。口縁は僅かに受口状を呈するが、あまり屈曲しない。端部には明瞭な内傾する面を持っている。163から165は台部の破片である。いずれも端部は潰れて、接地部に面をなしている。166は高杯の脚部。僅かに内湾しつつ、途中で屈曲せずのびる形態である。

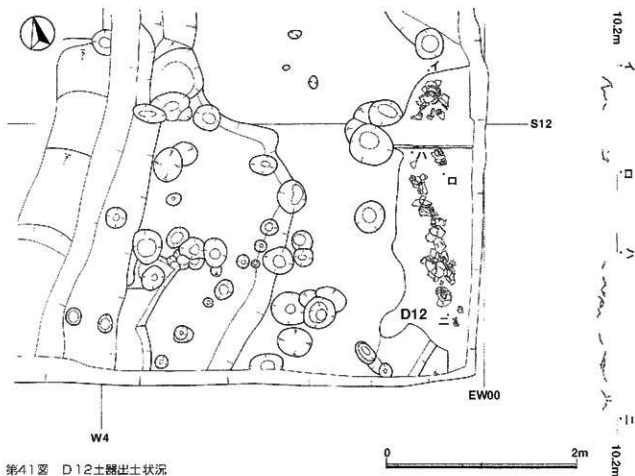
これらの土器については小破片も多く、本来D11に属する土器を決めるのも難しい。出土位置の明らかな「土器群1」の157はVI様式前半に比定できる。その他の土器は、破片が主体であり、D11に関連したものか、埋土に含まれただけでこの遺構とは直接の関わりを持たないものか判然としないが、概ねⅢ-2から3様式に比定できる。いわば時期の異なる2群の土器があるわけだが、「土器群1」に属する157は、時期はD3のそれに近く、出土地点としてもD3の一部であってもおかしくない位置である。D11の北辺とD3の南辺の関わりを示唆する所見は何もないが、土器の時期からみると「土器群1」はD3に関わるものであり、その他の土器が本来のD11のものであるという可能性があらう。

D12

S W区の南東端で検出された浅い遺構である。溝として記録が残るが、調査区内で検出されたのは方形の土坑状の部分であり、本来の形状は不明である。深さが10cmほどの浅い遺構である。この遺構の主たる埋土は、黒褐色砂シルトで、1～3cmの地山土粒を含んでいる。S12軸の断面では、包含層の黒褐色土との境界が不明瞭であった。

なお、この遺構は北に位置するD9と切り合いを持つ。遺物から判断するとD12が弥生時代後期に対してD9は古墳時代のものであるが、残された断面図では、D12がD9を切るかと判断されている。これは遺物の示す時期と矛盾している。切り合いの判断の難しさを考えると遺物の時期を優先したほうがよいと判断した。

遺物は埋土中からまともに出ていないが、破片が多く全形が復元できるものは僅かであった(第41図)。器種としては、甕、壺、高杯、器台などがある(第43図)。167は無文の甕である。口縁部は単純に外反し、端部はやや凸面を呈している。168、169は壺の底部である。168はあまり突出しない平底、169は突出する平底である。ともに外面は縦方向のヘラミガキを行っている。170は短頸壺である。口縁は短く外反し、端部は揃み上げるように上方に突出する。胴部の下位が張る器形である。口縁部内面と胴部外面を赤彩している。171の甕は、貝殻によるものと思われる粗い条痕によって調整されている。なお、概ね「畿内第V様式に似た叩き目の施された台付甕」とされているのはこの土器のことと思われるが、器面を観察するとタタキによる粘土の潰れた様子は観察されず、条痕による調整であることがわかる。172の



第41図 D12土器出土状況

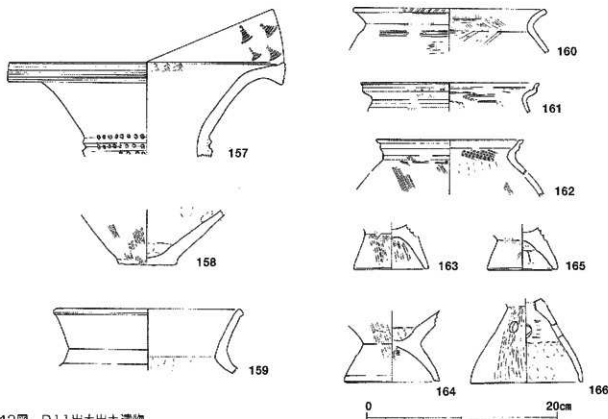
甕は直線的でやや長い口縁部を持つ。端部は僅かに上方に突出している。173は甕の台。やや法量が小さい。174は鉢である。ほとんど締まらない頸部から横に開く口縁部は僅かに受口状を呈している。175、176は高杯杯部である。175は杯の底部がまだやや大きめで縮小していない。杯の端部は、四角くなり外傾する面をなしている。176の口縁端部は僅かに内傾する面をなすように見えるが、明瞭な面ではない。177、178は直口甕の口縁部である。177は内湾した長い口縁部を持ち、頸部は細くしまっている。178の端部には直線文が施される。180は器台の脚として図化した。傾きからみて受部の可能性もある。

遺構は僅かな部分が見つかったのみであり、その埋土も上位の包含層や切り合いを持つD9との区別が困難であったため、遺物も混入があることが推測され評価が難しいが、時期がわかる高杯などはⅧ-2様式頃と見て良いものであり、それが遺構の時期を示していると考えられる。

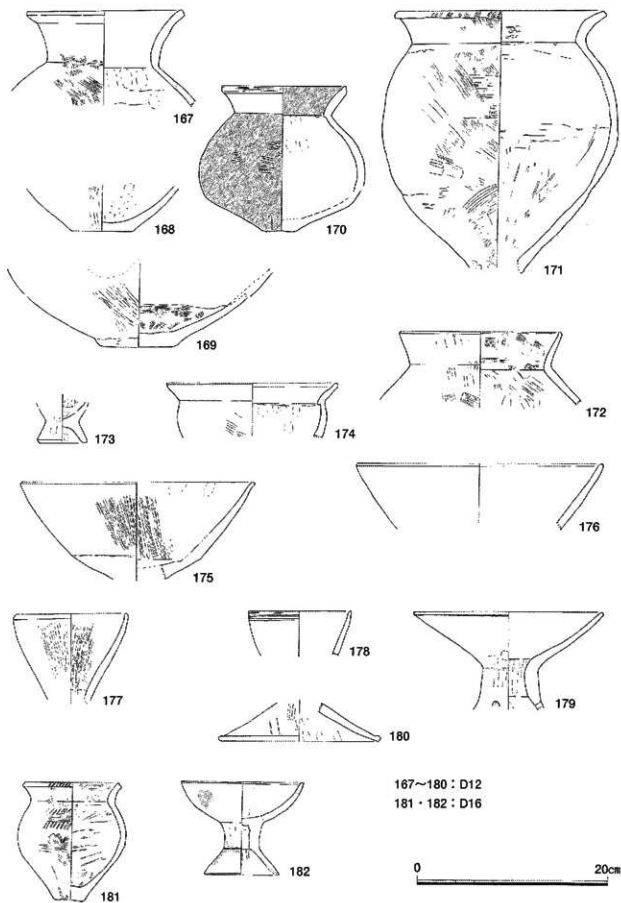
D16 (水道)

D16と名付けられた遺構は3つあり、N8 E16グリッドの調査区東端付近に一つ、W12S0グリッドの調査区西壁沿いにもあり、残りの一つは水道部分にある。前二者については、記録も遺物もほとんどなく、報告できない。ここで報告するのは水道部で検出したものである。遺構名が重複しているが、遺物などに注記もされており変更することも避けるので、D16 (水道)と表現する。東西に細長い調査区に直交するような方向のため、溝であるか否かは不明といわざるを得ない。幅2m、深さ0.7mをはかり、断面は緩いU字形を呈する。埋土は、上層から下層まで黒褐色砂シルトであるが、下位にいくほど大きな地山土塊を含んでいる。

遺物では、甕と高杯がそれぞれ1点出土している(第43図)。181の甕は法量の小さなもので平底である。



第42図 D11出土土遺物



第43图 透模出土弥生土器

口縁は単純に外反し、端部には面を持ち構による刺突が施される。胴部には構による刺突、直線文、波状文が施されている。胴部の文様などは近江との関連をうかがわせる資料である。182の高杯は小法量のもので、椀状の杯部を持つ。脚部には柱状部がある。全体に磨滅が進んでいるが、杯部には僅かに赤彩の痕跡が残っている。形態や赤彩から見て、D3の高杯に近い時期と見て良いだろう。土器は2個体しかないが、弥生時代後期初頭の可能性が高く、V-1様式頃に比定しておきたい。

D17 (水道)

D17という遺構もD16と同様に3つあるが、水道以外のものは遺物も詳細な記録もない。ここで報告するのは水道部のD17である。D16と同様細長い水道部の調査区を横切るように検出されているため、遺構の形状ははっきりしない。幅1.5m、深さは地山面から0.4mである。埋土は、有機質の強い黒褐色砂シルトである。中位の層がもっとも有機質が強い。下層には地山土壌を含んでいる。

遺物は、弥生時代前期の破片が目立つものの、弥生土器ではあるが時期が特定できないものもある。そのため、時期は確定できないが、埋土の特徴、遺物からみて、弥生時代の遺構であろう。

発掘番号	遺物	出土地の位置	形状	口径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	外装文様・特徴	内面文様	彫刻・制作技術	色調	胎子	出所	備考
47	D3	下層・北道	赤土土器			7.2	外縁は直線状、口縁はフタナガ。口縁はタテナガ。	上縁部にハケメ、口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
98	D3	下層・北道	赤土土器	14.4	31.4	9.2	縦長上縁部のみ、下部は方向にナガ、口縁はタテナガにより一色に施される。口縁は波状ハケメ。	縦長上縁部のみ、下部は方向にナガ、口縁はタテナガにより一色に施される。口縁は波状ハケメ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
109	D3	下層・北道	赤土土器	16.6	31.3	7.4	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
110	D3	下層・北道	赤土土器	13.4	23.6	7.5	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
111	D3	下層・北道	赤土土器	12.7	30.6	7.2	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
112	D3	下層・北道	赤土土器	10.9	22.9	7	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
113	D3	下層・北道	赤土土器	16.9	13	11.3	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
114	D3	下層・北道	赤土土器	11.4	42.0	6.4	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
115	D3	下層・北道	赤土土器	15.0	21.0	6.7	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
116	D3	下層・北道	赤土土器			10.5	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
117	D3	下層・北道	赤土土器	11.6	33.9	10.5	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
118	D3	下層・北道	赤土土器	11.3	10.2	8.6	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
119	D3	S4W4 (北道・北道)	赤土土器			7.8	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
120	D3	赤土土器					口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
121	D3	S4W4 (北道・北道)	赤土土器	11.5	8.7	6.0	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
122	D3	S4W4 (北道・北道)	赤土土器	6.4	7.1	5	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	
123	D3	S4W4 (北道・北道)	赤土土器			3.1	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。	口縁は波状ハケメ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。口縁はタテナガ。		赤褐色、内面は赤褐色。	やや粗	区の内5.6	

表3 弥生土器観察表(1)

古墳時代以降の遺構

D 8 (第44図)

N4W4からSN00W8グリッドで検出された、僅かに弧状に曲がる溝である。長さは6mほどで、両端は途切れている。幅は、1.5mほど、深さは最大で0.8mを測る。断面はU字形を呈している。黒褐色砂シルトを埋土とし、上位には炭化物粒、焼土粒が含まれている。最下層には黄色砂の地山土を多く含んでいる。D3と交わっており、断面図では、それぞれの埋土の最上層の切り合いが示されていないが、それ以下ではD3の埋土を切っている。北側では、土坑であるK7とも重なっている。

遺物としては、弥生後期の壺の口縁部183のほかには須恵器杯身184も出土しており評価が難しい。壺の口縁部は、D3と重なった部分に近い地点からの出土であるが、遺構台帳ではD3の範囲からははずれていると判断されている。ここでは須恵器の存在を重視して古墳時代の遺構として報告する。溝の性格は不明である。

K 7 (第44図)

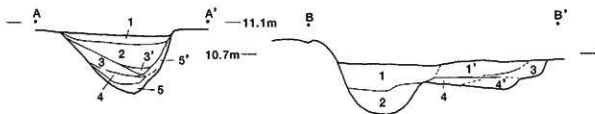
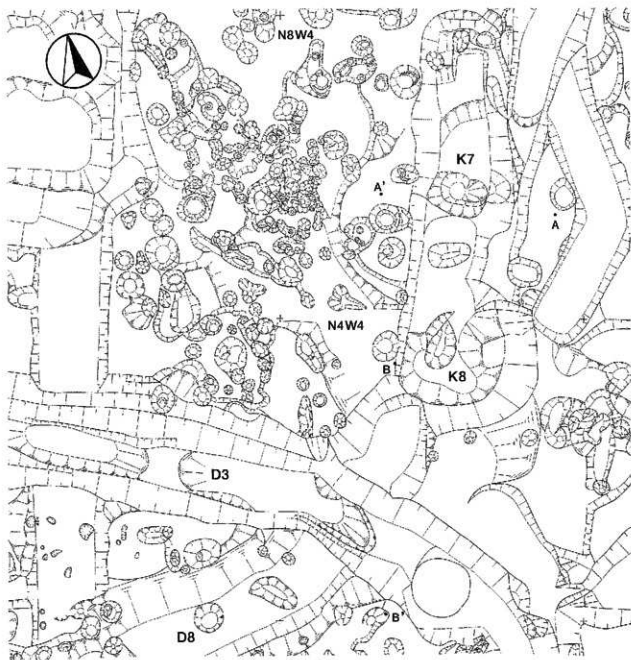
N8W4グリッドで検出された、長軸5m、短軸1.2mほどの溝状の土坑である。ほぼ重なってK6という土坑が検出されたという記録があり、掘削中はK6と区別できなかったようで、K7・6と注記された遺物も多い。南側ではK8と重なっている。

埋土は、色調によって大きく上下に分けられる。上位は、黒褐色を呈し、下位は淡い灰褐色を呈する。

遺物は、K6との区別ができていないため、K7・6出土の遺物もここであわせて述べる。K7と明記された遺物の中に全体が復元できる須恵器の大型の甕187がある。やや直立気味の口縁部の外面には波状文が施されている。胴部には間隔をおいて3条の沈線が施されている。その他では、弥生土器の甕の口縁部が多く見られる。191はK7・6出土とされているが、S字壺の中でも古い特徴を示すものである。口縁の下位は長く、屈曲はあまり強くない。胴部上位は左上がりのハケメが施されている。K7の遺物と特定できるものには須恵器が含まれているので、古墳時代以降の時期を想定する。

D 9

S8W4グリッドで検出された溝の一部と考えられた遺構である。幅は3m、深さは0.6～1mほどを測る。検出されたのは4mほどであるが、東側は調査区外に伸びており、形状は不明である。傾斜の緩い台形状の断面形である。埋土は、黒褐色砂シルトを中心としており、地山土の量、砂の量などで細分されている。埋土の上位には、黄褐色の地山土を大量に含む土が堆積している。D12と切り合いを持ち、D12に切られると記録されているが、D9上層からは須恵器杯身193が出土しており、遺物の時期はこの道になっている。遺物の出土もあまり多くはなく、遺構の性格は不明である。

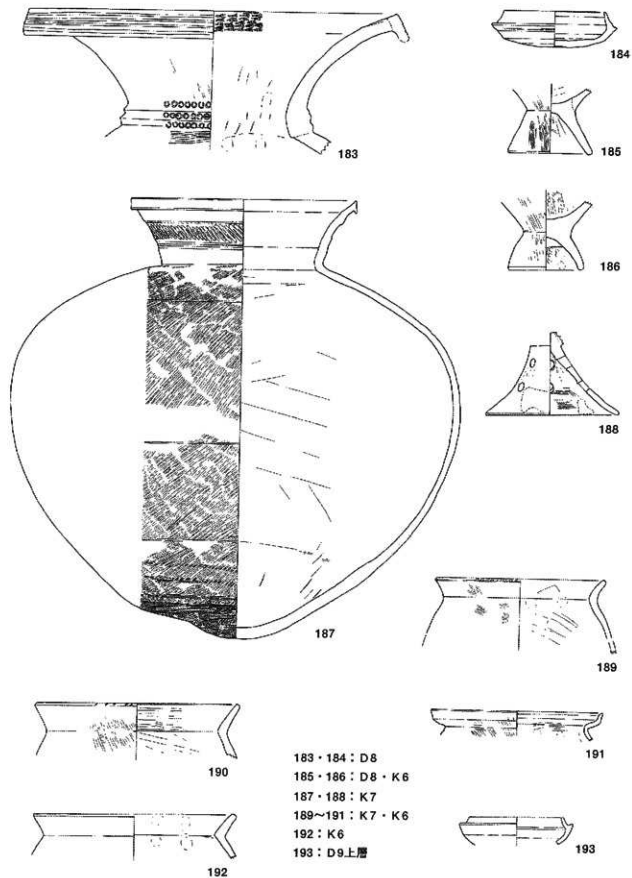


- 1、黒褐色シルト…粗砂見立つ。
- 2、黒褐色シルト…1よりシルトがもて有機質多い。
- 3、黒褐色シルト…2より更にシルトがもて、1cmの地山土粒まばら。
- 3'、黒褐色シルト…3と同じだが、地山土の量少ない。
- 4、淡灰 褐色シルト…団粒が弱い。
- 5、淡灰 褐色シルト…4よりも地山土が多い。
- 5'、淡灰 褐色シルト…4よりも地山土多く、5よりは団粒が強い。

- 1、黒褐色シルト…淡褐色を呈する。粗砂がやや目立つ。
- 1'、注記なし。
- 2、黒褐色シルト…淡褐色を呈する。3~5cmの地山土がわずかに混入。
- 3、黄褐色土…0.5cmの地山土粒が大量に混入。
- 4、黒褐色シルト…淡褐色を呈する。シルトがもて、1~2cmの地山土まばらに含む。
- 4'、黒褐色シルト…0.5~3cmの地山土を含み、黄褐色を呈する。(1,2はD3, 1',3,4,4'はD8)

第44図 K7・D8





0 20cm

第45図 古墳時代以降の遺構出土遺物

平安時代の竪穴住居など

B 1 (第46図)

NE区の、N8E8グリッドで検出された竪穴住居である。B 2の北側に位置し、B 2と一部重なるが、断面図ではB 2に切られている(第12図E12軸)。プランとして確実なのは、D 2の西側で北東から南西方向にのびる10cmほどの段差が、竪穴住居の南辺であるということのみで、残りの辺はわからず、規模も不明である。1cm程度の地山土粒を含む黒褐色砂シルトを埋土としている。この土は、あまり黒味が強くなかったらしく、日誌ではD 2の埋土と区別して、「茶褐色砂シルト」とも記述されている。この埋土は、断面でも、掘りこまれた面である黒褐色土を識別が困難であった。このB 1の埋土がD 2上にも広がっていた。住居範囲内では幾つかのピットが見つかったが、この住居に伴うものは特定できていない。竈などの施設も不明である。確実にこの住居出土とされた遺物で図化できたのは須恵器杯の高台部分の破片194であるが、時期の特定は難しい。その他、緑釉陶器の微小な破片もある(第50図)。

なおD 2上層からの出土として須恵器などが見つかったが、本来B 1に属していたものも含まれているだろう。

B 2・B 2' (第46図・第48図)

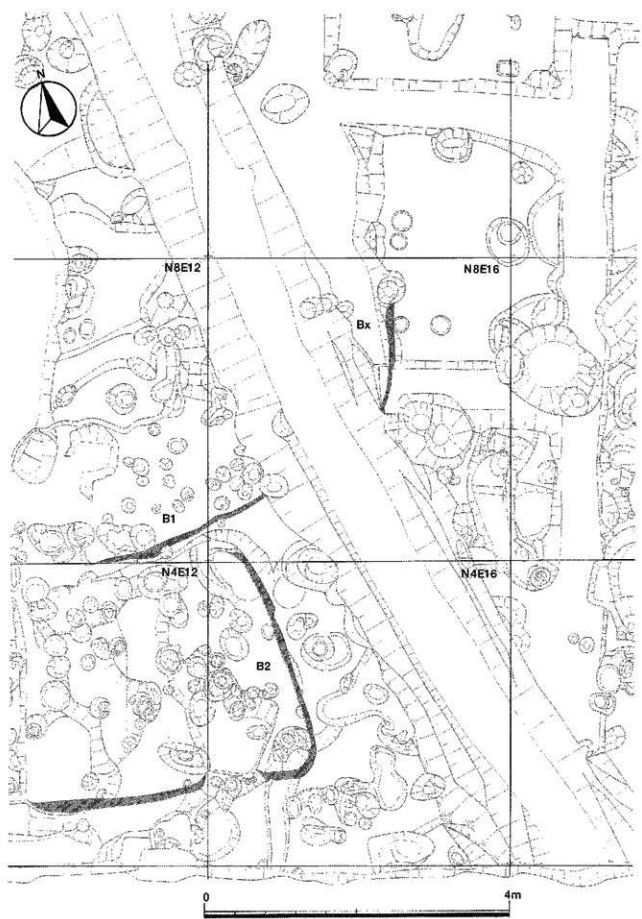
NE区のN4E12、N4F8グリッドで検出された竪穴住居である。平面図では今一つ明らかではないが、この地点には2基の竪穴住居の存在が認められている。遺構台帳などを見ると、B 2'はB 2と東辺はほぼ共通し、南辺の傾きが僅かに異なったプランと認識されていたようである。概報では、前後関係は不明瞭とされている。断面図(第12図N4軸)では、土の色や注記などでほとんど区別されていないが、B 2→B 2'と表現されている。埋土は共に黒褐色砂シルトである。

B 2とされた住居は、一辺が3.3~3.9mとされ、壁の立ち上がりは10cmから27cmほど残っていた。この住居の南東のコーナーでは土師器甕、須恵器杯、盤、灰釉陶器などがまとめて出土した(第50図)。

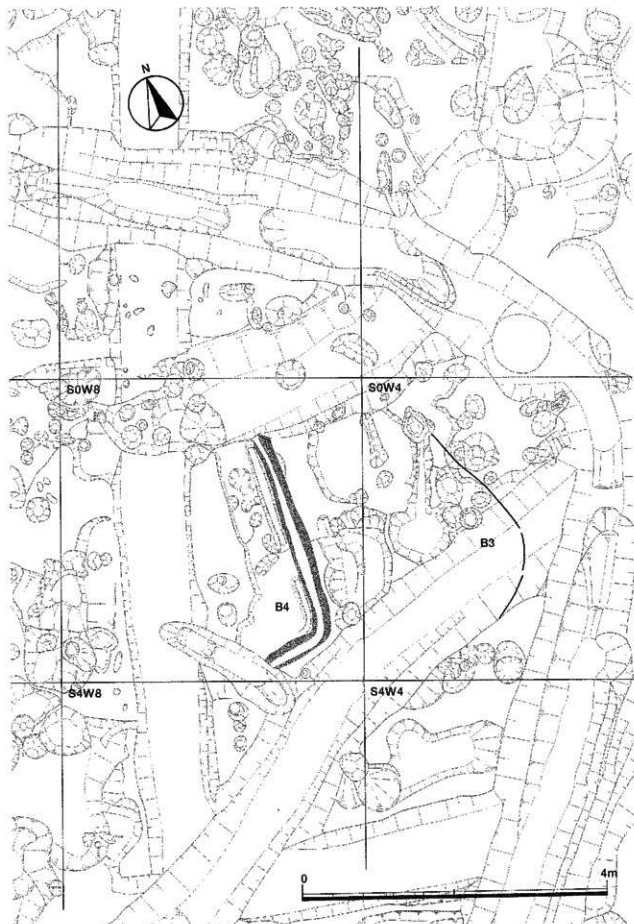
土師器の甕は2個体分(195・196)ある。ともに口縁部で器壁が厚くなり、横に開いている。195は口の1/3程度が残っているが、口径は18.2cmほどに復元される。口縁部内面にはきわめて粗いハケメが施される。肩部はわずかではあるが下方に突出するような形態である。胴部外面は左上がりの粗いハケメが施されている。196の甕は口の1/4程度が残り、口径は16.8cmほどに復元される。195と同様口縁部内面には粗い横ハケメが施され、胴部外面は左上がりのハケメである。須恵器の無台の杯197は口径12.4cmを、深さ3.8cmを測る。上げ底状になる底部の接地部から横に開き、稜をもって折れ、口縁部に至る。蓋198は頂部が平坦な面をもつ。口縁部はやや内側に向かって折れている。灰釉陶器の碗199は、断面が台形に近い高台をもっている。口縁部付近で外側に屈折している。ほぼ全体の1/2が残っており、口径は16.8cm、高台径は7.6cm、器高は5.1cmほどに復元される。須恵器は、尾野氏の福年によるVI期古段階の特徴に近いものと思われる。灰釉陶器も黒登14号窯式期に見られる器形と思われる〔斎藤1989〕、時期は大きく異なるまいと思われる。

B 3 (第47図・第49図)

SN00W4グリッドで検出された住居跡であるが、断面図にはそれと判断されるプランはない。D 10の埋



第46图 B1·B2

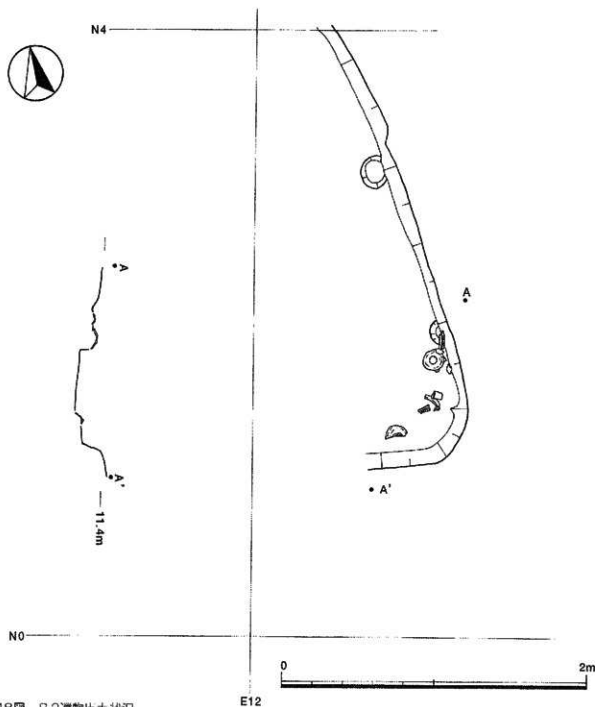


第47図 B3・B4

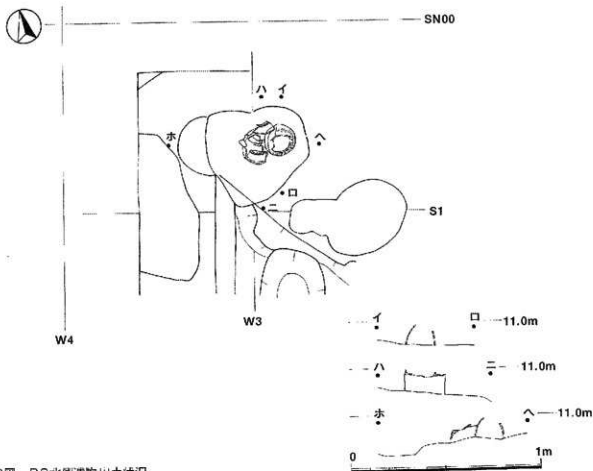
土上面を、地山土塊を含んだ黒褐色砂シルトで埋め、整地した面を床面としているらしく、この面の上には焼土の分布が認められた。

この住居の壁に接した東北側では、土師器甕の底部が天地逆に拵え付けられ、その周辺には炭化物や焼土塊が見られた。この住居との直接の関連は不明であるが、竈状の施設であったと思われる。

この住居から出土した遺物の内、前述の倒立していた甕については破片が接合できなかったため、図化できなかった。そのほかに須恵器壺と緑釉陶器素地の可能性が高い陶器が出土している（第50図）。須恵器壺200は、口縁端部まで直線的にのび、端部は上方に突出させている。緑釉陶器素地と思われるもの201は、緻密な胎土で器面にはヘラミガキが施されている。図化した部分の1/5程度が残るが、高台の径は8.0cm



第48図 B2遺物出土状況



第49図 B3北側遺物出土状況

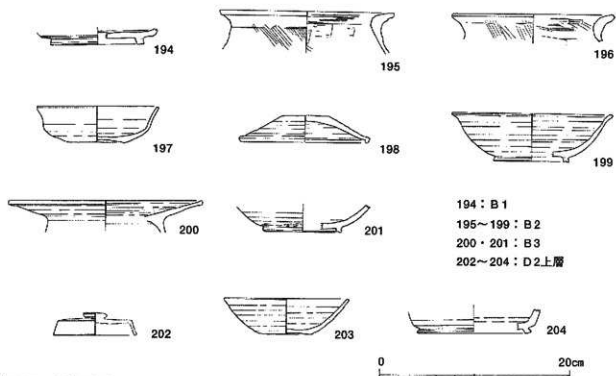
ほどに復元される。高台は台形を呈し、体部は丸みを帯びている。これらの陶器は、尾野氏の編年というⅤ期新段階からⅤ期に比定できるものと思われ、9世紀前半の住居と言えよう。

B x (第46図)

N8E12グリッドのD2の東側にB xという遺構(概観ではK xとされる)が検出されている。遺構台帳ではBが冠されているから、住居の可能性のあるものと考えられたのであろう。茶褐色土を埋土とし、その中に堯の底部(212)が倒立して据えられていた。堯は包含層出土扱いとなっている。

D2上層遺物

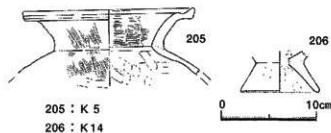
弥生時代前期の溝であるD2の上面から比較的遺存度の高い須恵器が出土している。B1に関連して述べたが、D2の埋土上に何らかの遺構が築かれていたことによるのであろう。遺存度の高い須恵器3点を図化した。なお、202および204にはN4E8というグリッド名が注記されているが、このグリッドにD2はわからない。遺構名よりはグリッド名を誤る可能性が高いと考え、これらもD2上面出土のものとして扱う。202はD2埋土上面茶褐色砂から出土したつまみの付く甕である。体部から口縁部へは明瞭に屈折する。口径は8.7cm、器高は2.3cmをはかる。203はN12E12グリッド出土の須恵器碗。こちらはB xとされた遺構に近い。口径13.0cm、器高は3.7cmをはかる。底径は5.7cmで、全体の1/2が残っている。D2埋土上面から出土した須恵器の杯の底部である。底径は11.0cmをはかる。底部付近の破片で全体の1/4が残っている。



第50図 古代の遺物

その他の遺構

以上で報告した以外にも、土坑などが数多く検出されている。これらは、現在では位置の特定が困難なものも少なくない上、性格が不明で出土遺物も少ない。遺物については小片が大半で、時期を特定することもできない。これらについては、検出地点、埋上について一覧表(表6)にまとめたのでそちらを参照して頂きたい。こうした遺構から出土している遺物を2点図化した(第51図)。205は、K5出土の壺である。外反する口縁部の端部付近で受け口状になっている。口縁部外面には面をもっている。あまり類例を知らないが、端部のつくりなどから見て、弥生時代後期のものでよいと思われる。なおK5はN16W4グリッドで検出されているが、平面図上では不明であり、この他に須恵器片も出土している。206はK14から出土した台付甕の台である。図の1/3程度が残り、台端部の径は8.1cmに復元される。K14はS12W4グリッドで検出されているが、平面図上では不明。弥生土器片が出土している。



第51図 その他の遺構出土遺物

遺構	グリッド	出土遺物	埋土
B1	N8E12	須恵器、後期弥生土器小片、須恵器	黒褐色(茶褐色)
B2	N4E8・N4E12	須恵器、土師器	黒褐色
B3	SNOW4	須恵器	
B4	SNOW8	土師質小片、(庄前納骨)須恵器小片	
B5	砂場	須恵器小片	茶褐色、黒褐色
B6	砂場	土師質小片	
B2'	N4E8・N4E12		黒褐色
K1			
K2	N12E4		
K3	N12W4	須恵器、弥生土器小片	
K4	N12W4	土師質土器小片	
K5	N16W4	弥生前期土器・須恵器片	黒褐色
K6	N12W4	弥生後期土器	
K7	N8W4		黒褐色
K8	N4W4	須恵器小片、弥生後期土器小片	
K9	N4E0	弥生土器、前期多いが、後期もある	
K10	N5W4	弥生土器、須恵器小片	黒褐色(色淡)
K11	S4W4	弥生土器小片、前期後期?	
K12	S0W4	古代須恵器小片	
K13	N4W12	前期小片、古代?小片	
K14	S12W4	弥生土器小片	
K15	S0W8	弥生土器、資料多く見附らしものほとんどなし	
K16	S12W12	中世陶器	
K17		中世陶器、弥生土器	
K18			
K19	N4E16		黒褐色
K20(NE)	N4E12		地山土混黒褐色
K20(水道)	水道	弥生土器、須恵器小片	
K21(NE)	N4E8		地山土混黒褐色
K21	水道	弥生土器、須恵器小片	
K22	N16・12W12		灰褐色
K23	N16・12W12		灰褐色
K24	S0W12	須恵器、弥生土器片	
K25	S0W8	弥生土器小片	地山土混黒褐色
K26	S0W8	須恵器、弥生土器小片	地山土混黒褐色
K27	門	弥生小片、前期、中期?	黒褐色
K28	門	弥生小片、前期多い、後期ない	黒褐色

遺構	グリッド	出土遺物	埋土
K20	N4E12	弥生土器小片	
K22	N4E12	須恵器、土師器小片	地山土混黒褐色
土坑1		中世陶器、古代須恵器、弥生土器小片	
D1	N20E12/ N16E12	弥生前期、中期片	
D2	N20E8~ N4E16	弥生前期土器	黒褐色
D3	N4W12~ S4W4	弥生後期土器、須恵器1片	黒褐色
D4			
D5	N16EW0~ N4E4	弥生前期土器	黒褐色
D6(鏡)	N12W4		
D7	N8W4	弥生後期中心、須恵器数点	
D8	N4W4	須恵器片、弥生後期土器片	黒褐色
D9	S4W4	須恵器、弥生土器片	黒褐色
D10	N4EW0~ S8W12	弥生前期土器	黒褐色
D11	S8W8~ S12W8	弥生後期土器、須恵器1片	黒褐色
D12	S12W4	弥生後期土器、須恵器小片	黒褐色
D13	S16W12	土師質土器片、弥生土器片	
D14	S16W12	弥生土器小片	
D15			
D16(水道)	水道	弥生後期土器、須恵器1片	黒褐色
D17(水道)	水道	弥生土器小片、前期多いが不明もある	
D18(水道)	水道	須恵器、石器小片	
D16(SW)	S0W12	古代須恵器片、弥生土器片	地山土混黒褐色
D17(SW)	S0W12	須恵器、弥生土器小片	地山土混黒褐色
D16(NE)	N8E16	弥生土器小片	地山土混黒褐色
D17(NE)	N8E16	弥生土器小片	黒褐色
D18(NE)	N8E12	弥生前期中心	黒褐色
柱列1-3a1	N16W4	山茶碗小片	
柱列1-3a2	N12W4	山茶碗小片	
柱列1-3a3	N12W4	いぶし瓦片	
柱列1-3a4		須恵器片	
溝	S4W4・S4W8	近世陶器	

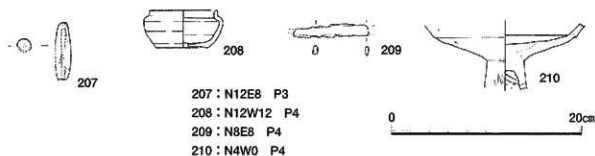
表6 遺構一覧

ビット

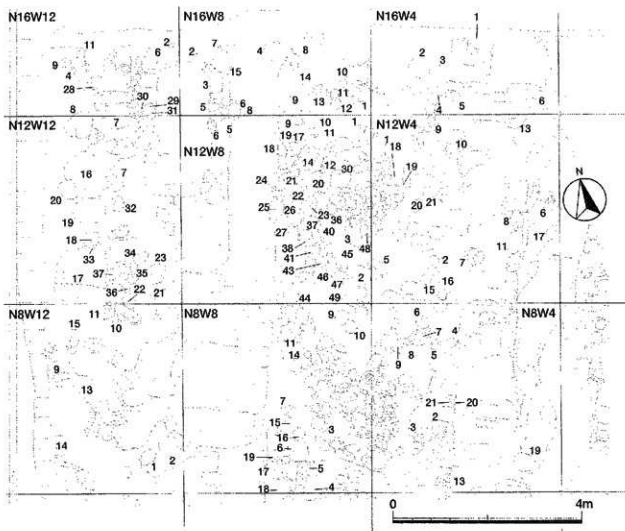
調査区内では数百に及ぶビットが検出されている。これらの多くは遺物も豊富とは言えず、時期を決定するのは困難である。ビットについては、時期区分ができないため、地区ごとにまとめて一覧にして示す。検出層位、埋土の特徴などは遺構台帳をそのまま転記し、水準については検出水準は上場の最高値を、底水準については下場の最低値を示した。一つのビットと認定された範囲が不明なものについては、平面図の表現からそれぞれについて最適と判断した数値を記した。その他に、遺構台帳と平面図の対応が不明なものが相当数あり、一覧表に水準の値のないものは平面図で位置が特定できなかったものである。出土遺物については、出土した遺物の時期がわかるように一覧表に示した。

ビットからはあまり遺物が出せず、時期を確実に特定できたものはほとんどない。これらの中には、壁の立ち上がりが確認できない堅穴住居の柱穴や掘立柱建物などが存在する可能性もあると思われるが、図上だけの認定は困難であり、見出せなかった。

ビットの遺物で図化したものは4点である。207はN12E8のP3から出土した土鏝である。全長は6.1cm、最大径は1.6cmをはかる。208はN12W12のP4から出土した須恵器の短頭の壺である。口径は7.0cm、器高は4.0cmほどである。底部外面には回転糸切りの痕跡が残る。209はN8E8のP4から出土した刀子と思われる鉄製品である。これは概報では弥生時代前期のものとして報告され、その後も資料館の展示図録などで前期の可能性のあるものとして紹介されてきた。しかし今回改めて同じビットから出土した遺物を検討したところ、確かに弥生時代前期の土器破片もあったが、別に収納されていた中に須恵器の破片も含まれていることが確認された。そのためこれは古墳時代以降のものとするべきである。210は弥生土器高杯の破片である。N4E0のP5から出土している。



第52図 ビット出土遺物

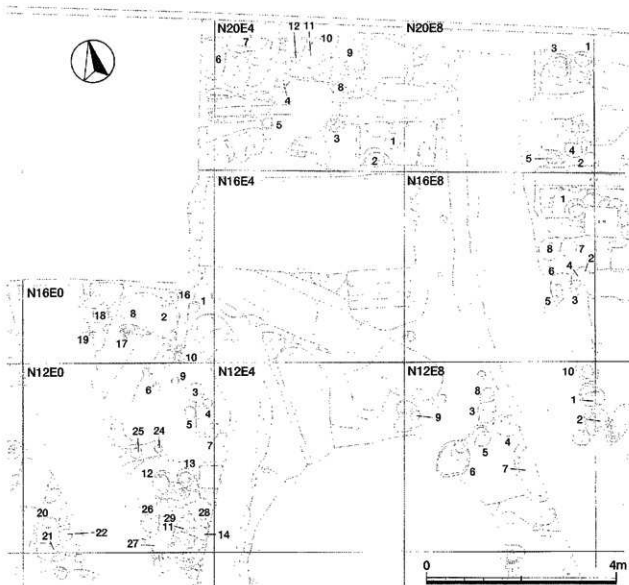


第53図 NW区ビット

グリッド	並行線	横断線	断面	調査	電圧	電圧差
N8W4	P1	北北	黒褐色			
N8W1	P2	北北	黒褐色	1線溝、粘土層	10.98	10.00
N8W4	P3	北北	黒褐色		11.02	10.42
N8W4	P4	北北	黒褐色	粘土層、粘土層	10.95	10.32
N8W4	P5	北北	黒褐色		10.95	10.31
N8W4	P6	北北	黒褐色		10.48	
N8W4	P7	北北	黒褐色		10.93	10.79
N8W4	P8	北北	黒褐色	粘土層	10.23	10.44
N8W4	P9	北北	黒褐色		10.88	10.43
N8W4	P10	北北	黒褐色			
N8W4	P11	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P12	北北	灰褐色			
N8W4	P13	北北	黒山+泥炭層		10.42	10.57
N8W4	P14	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P15	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P16	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P17	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P18	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P19	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P20	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P21	北北	黒山+泥炭層			
N8W4	P22	北北	黒山+泥炭層			
N8W8	P1	北北	黒褐色	溝、粘土層		
N8W8	P2	北北	黒褐色	粘土層		
N8W8	P3	北北	黒褐色	溝、粘土層	10.76	10.26

表7 NW区ビット (1)

グリッド	並行線	横断線	断面	調査	電圧	電圧差
N8W8	P4	北北	黒山+泥炭層	粘土層、粘土層	10.85	10.71
N8W8	P5	北北	黒褐色	粘土層	10.86	10.48
N8W8	P6	北北	黒褐色	粘土層	10.83	10.57
N8W8	P7	北北	黒褐色	粘土層	10.74	10.20
N8W8	P8	北北	黒褐色			
N8W8	P9	北北	黒褐色		10.80	10.64
N8W8	P10	北北	黒褐色		10.92	10.73
N8W8	P11	北北	黒褐色		10.82	10.42
N8W8	P12	北北	黒褐色			
N8W8	P13	北北	黒褐色			
N8W8	P14	北北	黒褐色		10.83	10.84
N8W8	P15	北北	黒褐色		10.79	10.76
N8W8	P16	北北	黒山+泥炭層		10.79	10.72
N8W8	P17	北北	黒山+泥炭層		10.75	10.62
N8W8	P18	北北	黒山+泥炭層		10.89	10.79
N8W8	P19	北北	黒山+泥炭層		10.71	10.73
N8W12	P1	北北	黒山+泥炭層	黒褐色	10.70	10.57
N8W12	P2	北北	黒山+泥炭層	黒褐色	10.71	10.79
N8W12	P3	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P4	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P5	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P6	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P7	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P8	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P9	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P10	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P11	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P12	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P13	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P14	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P15	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P16	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P17	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P18	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P19	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P20	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P21	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P22	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P23	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P24	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P25	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P26	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P27	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P28	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P29	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P30	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P31	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P32	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P33	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P34	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P35	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P36	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P37	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P38	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P39	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P40	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P41	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P42	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P43	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P44	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P45	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P46	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P47	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P48	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P49	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P50	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P51	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P52	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P53	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P54	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P55	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P56	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P57	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P58	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P59	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P60	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P61	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P62	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P63	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P64	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P65	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P66	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P67	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P68	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P69	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P70	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P71	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P72	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P73	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P74	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P75	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P76	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P77	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P78	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P79	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P80	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P81	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P82	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P83	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P84	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P85	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P86	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P87	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P88	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P89	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P90	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P91	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P92	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P93	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P94	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P95	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P96	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P97	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P98	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P99	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		
N8W12	P100	北北	黒山+泥炭層	黒褐色		



第54図 NE区ビット (1)

グリッド	標高帯	抽出区	地土	遺物	発見数	見本数
N18E4	P1	池山	黒褐色		11,519	11,427
N18E4	P2	池山	黒褐色		11,428	11,247
N18E4	P3	池山	黒褐色		11,414	11,138
N18E4	P4	池山	黒褐色		11,414	10,121
N18E4	P5	池山	黒褐色		10,915	10,824
N18E4	P6	池山	黒褐色		11,569	11,282
N18E4	P7	池山	黒褐色	特殊土層小片	11,527	11,200
N18E4	P8	池山	黒褐色		11,397	11,134
N18E4	P9	池山	黒褐色		11,308	11,270
N18E4	P10	池山	黒褐色	特殊土層小片(浮)	11,235	10,969
N18E4	P11	池山	黒褐色		11,288	11,077
N18E4	P12	池山	黒褐色		11,370	11,307
N20E8	P1	池山	黒褐色	特殊土層小片	11,523	11,127
N20E8	P2	池山	黒褐色		11,471	11,250
N20E8	P3	池山	黒褐色		11,580	11,230
N20E8	P4	池山	黒褐色		11,529	11,258
N20E8	P5	池山	黒褐色	特殊土層小片	11,286	11,112
N16E8	P1	池山	黒褐色	池山土層黒褐色、黒褐色、特殊土層小片	11,445	10,715
N16E8	P2	池山	黒褐色			

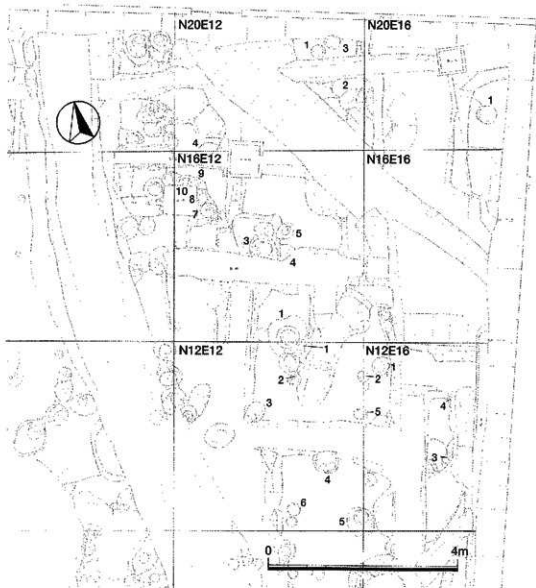
表9 NE区ビット (1)-1

グリッド	標高帯	抽出区	地土	遺物	発見数	見本数
N16E8	P3	池山	黒褐色		11,015	10,720
N16E8	P4	池山	黒褐色			
N16E8	P5	池山	黒褐色		10,420	10,468
N16E8	P6	池山	黒褐色		11,000	10,547
N16E8	P7	池山	黒褐色		11,215	10,917
N16E8	P8	池山	黒褐色		11,205	10,881
N16E8	P9	池山	黒褐色			
N16E8	P10	池山	黒褐色			
N20E0E0	P1	池山	黒褐色		11,220	11,010
N20E0E0	P2	池山	池山土層黒褐色	特殊土層小片(浮)		
N20E0E0	P3	池山	黒褐色	特殊土層小片	11,275	11,020
N20E0E0	P4	池山	黒褐色		11,280	11,155
N20E0E0	P5	池山	黒褐色		11,251	11,015
N20E0E0	P6	池山	黒褐色		11,263	11,117
N20E0E0	P7	池山	黒褐色	特殊土層小片	11,280	11,028
N20E0E0	P8	池山	黒褐色	池山土層黒褐色、池山土層小片	11,261	11,120
N20E0E0	P9	池山	黒褐色		11,255	11,080
N20E0E0	P10	池山	黒褐色	特殊土層小片	11,127	10,966
N20E0E0	P11	池山	黒褐色			
N20E0E0	P12	池山	黒褐色	特殊土層小片	11,262	10,784

グリッド	遺跡名	出土物	遺跡	面積㎡	遺構
N16E08	P13	埴山	弥生前期土器、土城	11,272	10,916
N12E04E	P14	埴山	弥生色		11,019
N12E04E	P15	埴山	弥生色		
N12E04E	P16	埴山	弥生色	弥生土器、石	11,020
N12E05	P17	埴山	弥生色		11,202
N12E05	P18	埴山	弥生色		11,066
N12E05	P19	埴山	弥生色		9,008
N12E08	P20	埴山	弥生色	弥生土器小片	11,140
N12E08	P21	埴山	弥生色	弥生土器、弥生土器小片	10,823
N12E08	P22	埴山	弥生色	弥生土器小片	11,107
N12E08	P23	埴山	弥生色		
N12E08	P24	埴山	?	弥生土器、弥生土器小片	11,024
N12E08	P25	埴山	弥生色	弥生土器小片	10,997
N12E08	P26	埴山	弥生色	弥生土器小片	11,211

グリッド	遺跡名	出土物	遺跡	面積㎡	遺構
N12E08	P27	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,106	10,970
N12E08	P28	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,008	10,961
N12E08	P29	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,132	10,900
N12E8	T1	埴山	弥生色		弥生土器小片
N12E8	P2	埴山	弥生色		
N12E8	P3	埴山	弥生土器、弥生土器小片、土城	11,213	11,083
N12E8	P4	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,105	10,944
N12E8	P5	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,231	11,027
N12E8	P6	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,205	10,775
N12E8	P7	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,262	11,083
N12E8	P8	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,202	
N12E8	P9	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,126	10,745
N12E8	P10	埴山	弥生土器、弥生土器小片	11,113	10,883

表10 NE区ビット (1)-2

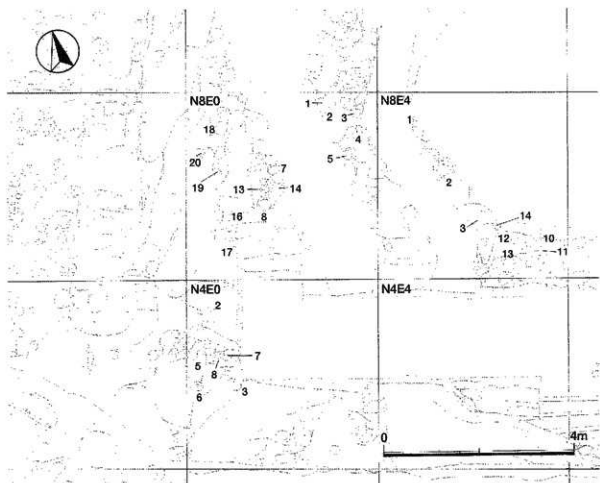


第55図 NE区ビット (2)

グリッド	植群号	林相記	樹上	遺物	樹高計	伐木率
N08018	P1	山	常緑色	樹上土器小片	11.406	11.348
N08019	P2	山	常緑色		11.274	11.075
N08020	P3	山	常緑色		11.053	11.209
N08021	P4	山	常緑色	樹上土器小片		
N08026	P1	山	常緑色		11.662	11.202
N108012	P1	山	常緑色		11.537	11.057
N108013	P2	山	常緑色			
N108014	P3	山	常緑色		11.326	11.073
N108015	P4	山	常緑色		11.532	11.262
N108016	P5	山	常緑色		11.513	11.167
N108017	P6	山	常緑色			
N108018	P7	山	常緑色	樹上土器小片	11.507	11.084
N108019	P8	山	常緑色		11.484	11.323
N108020	P9	山	常緑色		11.531	11.346
N108021	P10	山	常緑色		11.499	10.936

グリッド	植群号	林相記	樹上	遺物	樹高計	伐木率
N108022	P1	山	常緑色			
N108026	P1	山	常緑色			
N120012	P1	山	常緑色			
N120013	P2	山	常緑色	樹上土器小片		
N120014	P3	山	常緑色		11.487	11.010
N120015	P4	山	常緑色		11.537	11.247
N120016	P5	山	常緑色		11.297	11.062
N120017	P6	山	常緑色		11.509	11.256
N120018	P7	山	常緑色			
N120019	P8	山	常緑色		11.543	11.084
N120020	P9	山	常緑色	樹上土器小片	11.534	11.364
N120021	P10	山	常緑色		11.483	11.241
N120022	P11	山	常緑色		11.463	11.201
N120023	P12	山	常緑色		11.055	11.033

表11 NE区ビット (2)



第56図 NE区ビット (3)

グリッド	植群号	林相記	樹上	遺物	樹高計	伐木率
N800	P1	山	常緑色		11.100	
N800	P2	山	常緑色		11.065	10.857
N800	P3	山	常緑色		11.185	
N800	P4	山	常緑色		11.268	11.188
N800	P5	山	常緑色			11.139
N800	P6	山	常緑色		11.234	
N800	P7	山	常緑色		11.190	10.988
N800	P8	山	常緑色		11.182	10.982

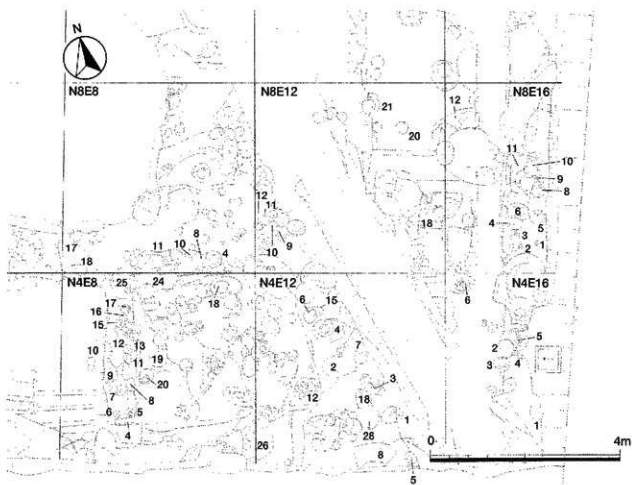
グリッド	植群号	林相記	樹上	遺物	樹高計	伐木率
N800	P9	山	常緑色			
N800	P10	山	常緑色	樹上土器小片		
N800	P11	山	常緑色			
N800	P12	山	常緑色			
N800	P13	山	常緑色		11.211	10.922
N800	P14	山	常緑色	樹上土器小片	11.181	11.025
N800	P15	山	常緑色			
N800	P16	山	常緑色			

表12 NE区ビット (3)-1

グリッド	区画番号	地目	地質	用途	地積㎡	延床積
N8E8	P17	畑地	黒褐色		11,150	11,000
N8E9	P18	畑地	黒褐色		11,495	11,595
N8E9	P19	畑地	畑地土壌腐植色		11,146	10,904
N8E9	P20	畑地	畑地土壌腐植色		11,255	11,101
N8E9	P21	畑地	畑地土壌腐植色			
N8E9	P22	畑地	畑地土壌腐植色			
N8E1	P1	畑地	畑地土壌腐植色		11,232	11,168
N8E4	P5	畑地	畑地土壌腐植色		11,390	11,071
N8E4	P3	畑地	畑地土壌腐植色	住宅用地、商業地	11,552	10,700
N8E4	P4	畑地	畑地土壌腐植色	住宅用地、商業地		
N8E1	P5					
N8E4	P5	畑地	畑地土壌腐植色	住宅用地		
N8E4	P7	畑地				
N8E4	P8	畑地土壌腐植色	黒褐色	住宅用地		

グリッド	区画番号	地目	地質	用途	地積㎡	延床積
N8E4	P2	畑地土壌腐植色	黒褐色			
N8E4	P23	畑地	畑地土壌腐植色		11,496	11,666
N8E4	P11	畑地土壌腐植色	黒褐色		11,270	11,149
N8E4	P12	畑地土壌腐植色	黒褐色		10,997	10,897
N8E4	P13	畑地土壌腐植色	黒褐色		11,187	11,009
N8E4	P14	畑地土壌腐植色	黒褐色		11,196	11,107
N4E9	P1	畑地	黒褐色	住宅用地		
N4E9	P2	畑地	黒褐色		11,141	10,931
N4E9	P3	畑地	黒褐色		11,057	10,830
N4E9	P4	畑地	畑地土壌腐植色	住宅用地		
N4E9	P5	畑地	畑地土壌腐植色	住宅用地	10,925	10,824
N4E9	P6	畑地	畑地土壌腐植色	住宅用地	10,927	10,649
N4E9	P7	畑地	畑地土壌腐植色		11,066	10,609
N4E9	P8	畑地	畑地土壌腐植色		10,666	10,416

表13 NE区ビット (3)-2



第57図 NE区ビット (4)

グリッド	区画番号	地目	地質	用途	地積㎡	延床積
N8E8	P1	畑地	黒褐色	住宅用地		
N8E9	P2	畑地	赤褐色、黒褐色	住宅用地、商業地		
N8E9	P3	畑地	赤褐色、黒褐色	住宅用地、商業地		
N8E9	P4	畑地	畑地土壌腐植色		11,393	11,001
N8E9	P5	畑地	赤褐色、黒褐色			
N8E9	P6	畑地	赤褐色、黒褐色			

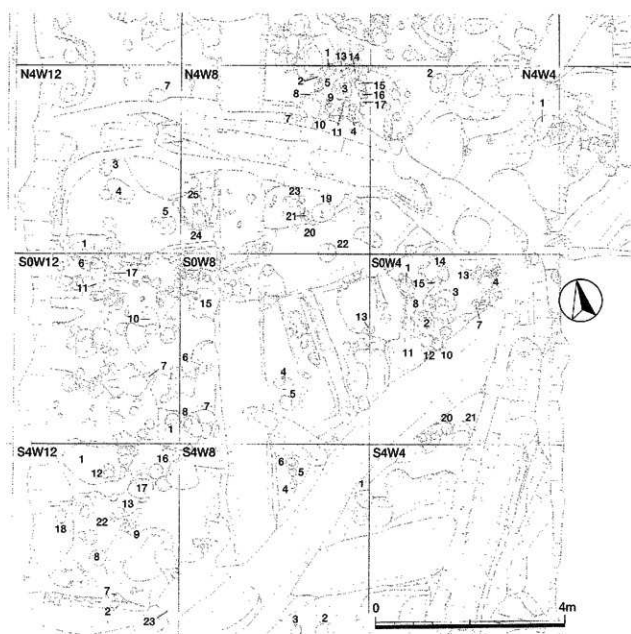
グリッド	区画番号	地目	地質	用途	地積㎡	延床積
N8E9	P7	畑地	赤褐色、黒褐色			
N8E9	P8	畑地	赤褐色、黒褐色		11,405	11,140
N8E9	P9	畑地	畑地土壌腐植色			
N8E9	P10	畑地	畑地土壌腐植色		11,289	11,168
N8E9	P11	畑地	畑地土壌腐植色		11,217	10,700
N8E9	P12	畑地				

表14 NE区ビット (4)-1

グロット	2500円	原産地	葉上	濃香	650円	650円
N8E8	P12	株上	茶褐色			
N8E9	P4	株上	茶褐色			
N8E7	P15	株上	茶褐色			
N8E5	P16	株上	赤山土混染褐色	赤山土混小片		
N8E6	P17	株上	赤山土混染褐色		11,992	11,121
N8E2	P18	株上	赤山土混染褐色		11,224	11,067
N8E12	P1	株上	茶褐色			
N8E13	P2	株上	茶褐色	赤山土混小片		
N8E12	P3	株上	赤山土混染褐色			
N8E12	P4	株上	茶褐色			
N8E12	P5	株上	茶褐色			
N8E12	P6	株上	茶褐色			
N8E12	P7	株上	茶褐色			
N8E12	P8	株上	茶褐色			
N8E12	P9	株上	茶褐色		11,206	11,150
N8E12	P10	株上	茶褐色		11,212	11,264
N8E12	P11	株上	茶褐色		11,212	10,603
N8E12	P12	株上	茶褐色		11,187	11,148
N8E12	P13	株上	茶褐色			
N8E12	P14	株上	茶褐色			
N8E12	P15	株上	茶褐色	赤山土混小片		
N8E12	P16	株上	茶褐色			
N8E12	P17	株上	茶褐色			
N8E12	P18	株上	茶褐色		11,205	10,806
N8E12	P19	株上	茶褐色	赤山土混小片		
N8E12	P20	株上	茶褐色		11,003	11,358
N8E12	P21	株上	茶褐色		11,030	11,225
N8E16	P1	株上	茶褐色		11,561	11,504
N8E16	P2	株上	茶褐色		11,514	11,428
N8E16	P3	株上	茶褐色		11,525	11,485
N8E16	P4	株上	茶褐色		11,477	11,371
N8E16	P5	株上	茶褐色		11,375	11,421
N8E16	P6	株上	茶褐色		11,509	11,321
N8E16	P7	株上	茶褐色			
N8E16	P8	株上	茶褐色		11,314	11,206
N8E16	P9	株上	茶褐色		11,443	11,264
N8E16	P10	株上	茶褐色	赤山土混小片	11,579	11,051
N8E16	P11	株上	茶褐色	赤山土混小片	11,515	11,412
N8E16	P12	株上	茶褐色	赤山土混小片	11,587	11,300
N8E1	P1	株上	茶褐色		11,205	11,249
N8E1	P2	株上	茶褐色		11,283	11,162
N8E1	P3	株上	茶褐色		11,205	11,270
N8E1	P4	株上	茶褐色		11,201	11,227
N8E1	P5	株上	茶褐色		11,281	11,289
N8E1	P6	株上	茶褐色		11,207	11,258
N8E1	P7	株上	茶褐色		11,206	11,209
N8E1	P8	株上	茶褐色		11,251	11,368
N8E1	P9	株上	茶褐色		11,207	11,258
N8E1	P10	株上	茶褐色		11,206	11,209
N8E1	P11	株上	茶褐色		11,251	11,368
N8E1	P12	株上	茶褐色		11,218	11,088
N8E1	P13	株上	茶褐色		11,287	11,363

表15 NE区ビット(4)-2

グロット	2500円	原産地	葉上	濃香	650円	650円
N8E8	P11	株上	茶褐色			
N8E8	P15	株上	茶褐色		11,212	11,337
N8E8	P16	株上	茶褐色		11,209	
N8E8	P17	株上	茶褐色		11,292	11,150
N8E8	P18	株上	茶褐色		11,258	10,917
N8E8	P19	株上	茶褐色		11,123	11,077
N8E8	P20	株上	茶褐色		11,123	10,915
N8E8	P21	株上	茶褐色			
N8E8	P22	株上	茶褐色			
N8E8	P23	株上	茶褐色			
N8E8	P24	株上	茶褐色		11,254	11,046
N8E8	P25	株上	茶褐色		11,244	11,055
N8E8	P26	株上	茶褐色			
N8E8	P27	株上	茶褐色			
N8E8	P28	株上	茶褐色			
N8E8	P29	株上	茶褐色			
N8E8	P30	株上	茶褐色			
N8E8	P31	株上	茶褐色			
N8E8	P32	株上	茶褐色			
N8E8	P33	株上	茶褐色			
N8E8	P34	株上	茶褐色			
N8E8	P35	株上	茶褐色			
N8E8	P36	株上	茶褐色			
N8E8	P37	株上	茶褐色			
N8E8	P38	株上	茶褐色			
N8E8	P39	株上	茶褐色			
N8E8	P40	株上	茶褐色			
N8E8	P41	株上	茶褐色			
N8E8	P42	株上	茶褐色			
N8E8	P43	株上	茶褐色			
N8E8	P44	株上	茶褐色			
N8E8	P45	株上	茶褐色			
N8E8	P46	株上	茶褐色			
N8E8	P47	株上	茶褐色			
N8E8	P48	株上	茶褐色			
N8E8	P49	株上	茶褐色			
N8E8	P50	株上	茶褐色			
N8E8	P51	株上	茶褐色			
N8E8	P52	株上	茶褐色			
N8E8	P53	株上	茶褐色			
N8E8	P54	株上	茶褐色			
N8E8	P55	株上	茶褐色			
N8E8	P56	株上	茶褐色			
N8E8	P57	株上	茶褐色			
N8E8	P58	株上	茶褐色			
N8E8	P59	株上	茶褐色			
N8E8	P60	株上	茶褐色			
N8E8	P61	株上	茶褐色			
N8E8	P62	株上	茶褐色			
N8E8	P63	株上	茶褐色			
N8E8	P64	株上	茶褐色			
N8E8	P65	株上	茶褐色			
N8E8	P66	株上	茶褐色			
N8E8	P67	株上	茶褐色			
N8E8	P68	株上	茶褐色			
N8E8	P69	株上	茶褐色			
N8E8	P70	株上	茶褐色			
N8E8	P71	株上	茶褐色			
N8E8	P72	株上	茶褐色			
N8E8	P73	株上	茶褐色			
N8E8	P74	株上	茶褐色			
N8E8	P75	株上	茶褐色			
N8E8	P76	株上	茶褐色			



第58図 NW～SW区ビット

グリッド	番地区分	地位置	地種	建物	面積㎡	延床坪
N4W12	P1	畑地	茶畑地	宗子土器小戸	10469	12249
N4W12	P2	畑地	畑地(茶畑地)			
N4W12	P3	畑地	畑地		10765	10563
N4W12	P4	畑地	畑地(茶畑地)		12723	10005
N4W12	P5	畑地	畑地(茶畑地)		10877	10492
N4W12	P6	畑地	畑地			
N4W12	P7	畑地	畑地(茶畑地)		10568	0403
N4W8	P1	畑地	畑地(茶畑地)		10879	10609
N4W8	P2	畑地	畑地	宗子土器小戸	10879	10726
N4W8	P3	畑地	畑地		10672	10661
N4W8	P4	畑地	畑地		10842	10817
N4W8	P5	畑地	畑地(茶畑地)	宗子土器小戸	10871	10787
N4W8	P6	畑地	畑地(茶畑地)			
N4W8	P7	畑地	畑地	宗子土器小戸	10879	10299
N4W8	P8	畑地	畑地		10888	10749

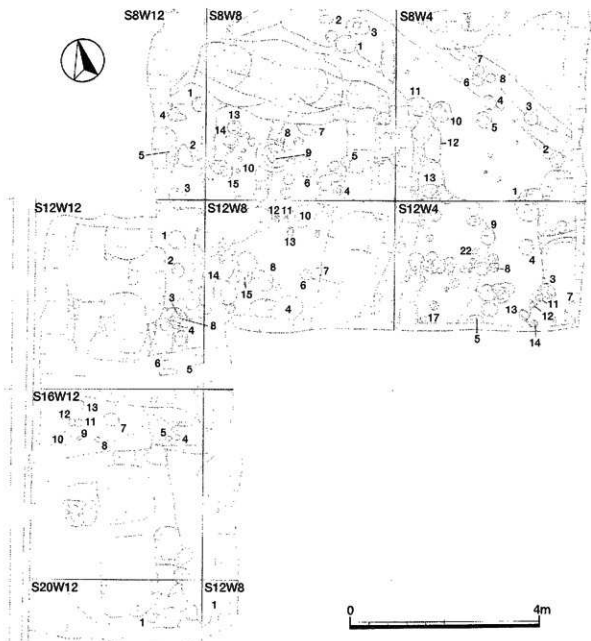
グリッド	番地区分	地位置	地種	建物	面積㎡	延床坪
N4W8	P9	畑地	畑地		10829	10661
N4W8	P10	畑地	畑地		10799	10666
N4W8	P11	畑地	畑地		10862	10663
N4W8	P12	畑地	畑地			
N4W8	P13	畑地	畑地		10855	10822
N4W8	P14	畑地	畑地(茶畑地)		10818	10780
N4W8	P15	畑地	畑地(茶畑地)		10818	10797
N4W8	P16	畑地	畑地(茶畑地)		10844	10811
N4W8	P17	畑地	畑地(茶畑地)	宗子土器小戸	10862	10797
N4W8	P18	畑地	畑地			
N4W8	P19	畑地	畑地		10672	10384
N4W8	P20	畑地	畑地(茶畑地)		10806	10325
N4W8	P21	畑地	畑地(茶畑地)		10667	10267
N4W8	P22	畑地	畑地		10911	10869
N4W8	P23	畑地	畑地		10720	10648
N4W8	P24	畑地	畑地		10716	10619

表16 NW～SW区ビット(1)

グループ	銘柄	販売店	原料	産物	販売日	販売量
NW8	P25	池田	京都産物			生肉類
NW4	P1	池田	池田上級黒豚		10.05	10.761
NW4	P2	池田	黒豚	赤牛黒豚生肉小片	10.07	10.410
SW12	P1	池田アソコ	黒豚	赤牛黒豚生肉小片	10.29	10.204
SW12	P2	池田	黒豚			
SW12	P3	池田	黒豚	赤牛黒豚生肉小片		
SW12	P4	池田アソコ	池田一匹黒豚			
SW12	P5	池田アソコ	池田一匹黒豚			
SW12	P6	池田	池田一匹黒豚		10.30	10.260
SW12	P7	池田	池田一匹黒豚		10.00	
SW12	P8	池田	黒豚			
SW12	P9	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片		
SW12	P10	池田	黒豚		10.03	10.303
SW12	P11	池田	池田一匹黒豚		10.30	10.320
SW12	P12	池田	黒豚			
SW12	P13	池田	黒豚			
SW12	P14	池田	池田一匹黒豚			
SW12	P15	池田	赤牛黒豚	赤牛黒豚小片		
SW12	P16	池田	黒豚			
SW12	P17	池田	黒豚		10.00	10.400
SW12	P18	池田	黒豚			
SW12	P19	池田	黒豚			
SW12	P20	池田	黒豚			
SW12	P21	池田	黒豚			
SW12	P22	池田	黒豚	赤牛黒豚小片		
SW8	P1	池田アソコ	池田一匹黒豚			
SW8	P2	池田アソコ	池田一匹黒豚			
SW8	P3	池田アソコ	池田一匹黒豚			
SW8	P4	池田アソコ	池田一匹黒豚		10.03	10.310
SW8	P5	池田アソコ	池田一匹黒豚		10.00	10.470
SW8	P6	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW8	P7	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.220
SW8	P8	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.400
SW8	P9	池田	池田一匹黒豚			
SW8	P10	池田	池田一匹黒豚			
SW8	P11	池田	池田一匹黒豚			
SW8	P12	池田	池田一匹黒豚			
SW8	P13	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.000
SW8	P14	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片		
SW8	P15	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW4	P1	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW4	P2	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.300
SW4	P3	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW4	P4	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.700
SW4	P5	池田	池田一匹黒豚			

表17 NW～SW区ビット (2)

グループ	銘柄	販売店	原料	産物	販売日	販売量
SW4	P6	池田	池田一匹黒豚			
SW4	P7	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.270
SW4	P8	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.000
SW4	P9	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.400
SW4	P10	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.000
SW4	P11	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.000
SW4	P12	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.000
SW4	P13	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.000
SW4	P14	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW4	P15	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW4	P16	池田	池田一匹黒豚			
SW4	P17	池田	池田一匹黒豚			
SW4	P18	池田	池田一匹黒豚			
SW4	P19	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片		
SW4	P20	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.400
SW4	P21	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.000
SW4	P22	池田	池田一匹黒豚			
SW4	P23	池田	池田一匹黒豚			
SW12	P1	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.200
SW12	P2	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.214
SW12	P3	池田	池田一匹黒豚			
SW12	P4	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片		
SW12	P5	池田	池田一匹黒豚			
SW12	P6	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW12	P7	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW12	P8	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.30	10.200
SW12	P9	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW12	P10	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片		
SW12	P11	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片		
SW12	P12	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW12	P13	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW12	P14	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW12	P15	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW12	P16	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.200
SW12	P17	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.000
SW12	P18	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.000
SW12	P19	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.000
SW12	P20	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.000
SW12	P21	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW12	P22	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.200
SW8	P1	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.300
SW8	P2	池田	池田一匹黒豚	赤牛黒豚小片	10.00	10.414
SW8	P3	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.000
SW8	P4	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P5	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P6	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P7	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P8	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P9	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P10	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P11	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P12	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P13	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P14	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P15	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P16	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P17	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P18	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P19	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P20	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P21	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P22	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P23	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P24	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P25	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P26	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P27	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P28	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P29	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P30	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P31	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P32	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P33	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P34	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P35	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200
SW8	P36	池田	池田一匹黒豚		10.00	10.200



第59図 SW区ビット

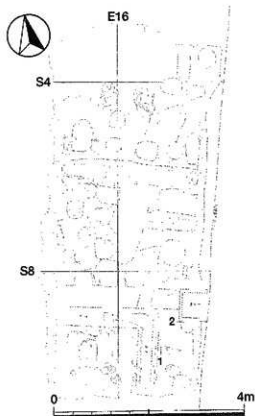
グリッド	番号	区画名	地種	用途	北2004	北2009
S8W4	P1	池山	緑地色	池山土器小P	10973	10330
S8W4	P2	池山	緑地色		10810	10365
S8W4	P3	池山	池山土器埋め色		10640	10307
S8W4	P4	池山	池山色		10309	10748
S8W4	P5	池山	池山色	池山土器小P	10805	10618
S8W4	P6	池山	池山土器埋め色		10721	10564
S8W4	P7	池山	池山土器埋め色		10570	10403
S8W4	P8	池山	池山土器埋め色		10606	10481
S8W4	P9	池山	池山土器埋め色			
S8W4	P10	池山	池山色		10901	10691
S8W4	P11	池山	池山色		10857	10603
S8W4	P12	池山	池山土器埋め色		10876	
S8W4	P13	池山	池山土器埋め色	池山土器小P	10867	10509
S8W4	P14	池山	池山土器埋め色			
S8W8	P1	池山	池山土器埋め色			
S8W8	P2	池山	池山土器埋め色			

グリッド	番号	区画名	地種	用途	北2004	北2009
S8W4	P15	池山	池山土器埋め色		10740	10581
S8W8	P16	池山	池山土器埋め色		10747	10698
S8W8	P17	池山	池山色		10896	10643
S8W8	P18	池山	池山土器埋め色		10725	10703
S8W8	P19	池山	池山色		10788	
S8W8	P20	池山	池山色		10616	10552
S8W8	P21	池山	池山土器埋め色		10755	10531
S8W8	P22	池山	池山色			
S8W8	P23	池山	池山土器埋め色		10751	10501
S8W8	P24	池山	池山色		10727	10417
S8W8	P25	池山	池山色		10589	10366
S8W8	P26	池山	池山色			
S8W12	P1	池山	池山土器埋め色		10596	10407
S8W12	P2	池山	池山土器埋め色		10691	10363

表18 SW区ビット(1)

グリッド	道路名	幅員(m)	種土	用途	55%以下	65%以下
SWW17	P3	池田	灰褐色・黒褐色		10.480	10.452
SWW12	P1	山崎(池田深谷ノボリ)	灰褐色		10.560	10.480
SWW12	P8				10.597	10.598
SWW4	P1	池田	黒褐色	池田土留小片		
SWW1	P2	池田	黒褐色			
S-WW1	P3	池田	黒褐色	池田土留小片	10.620	10.630
SWW4	P4	池田	黒褐色	池田土留小片	10.637	10.638
SWW1	P5	池田	黒褐色	池田土留小片	10.685	10.686
SWW4	P6	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
SWW4	P7	池田	池田土留門前色		10.699	10.695
S-WW4	P8	池田	黒褐色	池田土留小片	10.781	10.849
SWW4	P9	池田	黒褐色		10.902	10.930
SWW4	P10	池田	黒褐色	池田土留小片		
SWW4	P11	池田	黒褐色		10.997	
SWW4	P12	池田	黒褐色		10.961	
SWW4	P13	池田	黒褐色		10.958	10.992
SWW4	P14	池田	黒褐色		10.956	10.997
SWW4	P15	池田	黒褐色			
SWW12	P16	池田	池田土留門前色			
SWW4	P17	池田	池田土留門前色		10.771	10.921
SWW4	P18	池田	池田土留門前色			
SWW4	P19	池田	池田土留門前色			
SWW4	P20	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
SWW4	P21	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
SWW4	P22	池田	池田土留門前色		10.892	10.961
SWW4	P23	池田	池田土留門前色			
SWW4	P24	池田	池田土留門前色			
SWW4	P25	池田	池田土留門前色			
SWW8	P1	池田	黒褐色			
SWW8	P2	池田	黒褐色			
SWW8	P3	池田	黒褐色			
SWW8	P4	池田	黒褐色	池田土留小片	10.703	10.956
SWW8	P5	池田	黒褐色			
SWW8	P6	池田	黒褐色		10.718	10.859

表18 SW区ビット(2)



第60図 門部ビット

グリッド	道路名	幅員(m)	種土	用途	55%以下	65%以下
SWW8	P7	池田	黒褐色		10.721	10.697
SWW8	P8	池田土留門前色	黒褐色		10.707	10.620
SWW8	P9	池田	黒褐色			
SWW8	P10	池田	黒褐色		10.754	10.657
SWW8	P11	池田	黒褐色		10.735	
SWW8	P12	池田	黒褐色		10.732	
SWW8	P13	池田	黒褐色		10.733	
SWW8	P14	池田	池田土留門前色	池田土留小片	10.884	10.901
SWW8	P15	池田	池田土留門前色	池田土留小片	10.701	10.871
SWW12	P1	池田	灰褐色・黒褐色		10.474	10.484
SWW12	P2	池田	灰褐色・黒褐色		13.273	10.319
SWW12	P3	池田	池田		10.481	10.514
SWW12	P4	池田	池田		10.378	
SWW12	P5	池田	池田		10.577	10.475
SWW12	P6	池田	池田		10.289	10.218
SWW12	P7	池田	池田土留門前色			
SWW12	P8	池田	池田		10.963	
SWW12	P9	池田	池田		10.113	10.863
SWW12	P10	池田	池田		10.337	10.697
SWW12	P11	池田	池田		10.958	10.706
SWW12	P12	池田	池田		10.770	10.936
SWW12	P13	池田	池田		10.181	10.917
SWW12	P14	池田	池田		10.306	10.110
SWW12	P15	池田	池田		10.964	
SWW12	P16	池田	池田		10.951	
SWW12	P17	池田	池田		10.979	10.936
SWW8	P1	池田	池田		10.562	10.325
SWW12	P1	池田	池田		10.375	10.128

グリッド	道路名	幅員(m)	種土	用途	55%以下	65%以下
門	P1	池田	池田土留門前色			
門	P2	池田	池田			
砂場	P1	池田(池田深谷ノボリ)	池田土留小片			
砂場	P2	池田	池田土留門前色			
砂場	P3	池田	池田土留門前色			
砂場	P4	池田	池田土留門前色			
砂場	P5	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
砂場	P6	池田	池田土留門前色			
砂場	P7	池田	池田土留門前色			
砂場	P8	池田	池田土留門前色			
砂場	P9	池田	池田土留門前色			
砂場	P10	池田	池田土留門前色			
砂場	P11	池田	池田土留門前色			
砂場	P12	池田	池田土留門前色			
砂場	P13	池田	池田土留門前色			
砂場	P14	池田	池田土留門前色			
砂場	P15	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
砂場	P16	池田	池田土留門前色			
砂場	P17	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
砂場	P18	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
砂場	P19	池田	池田土留門前色	池田土留小片		
水道	P1			池田土留小片		

表20 門部・砂場部・水道部ビット
(砂場部第14区、水道部第13区)

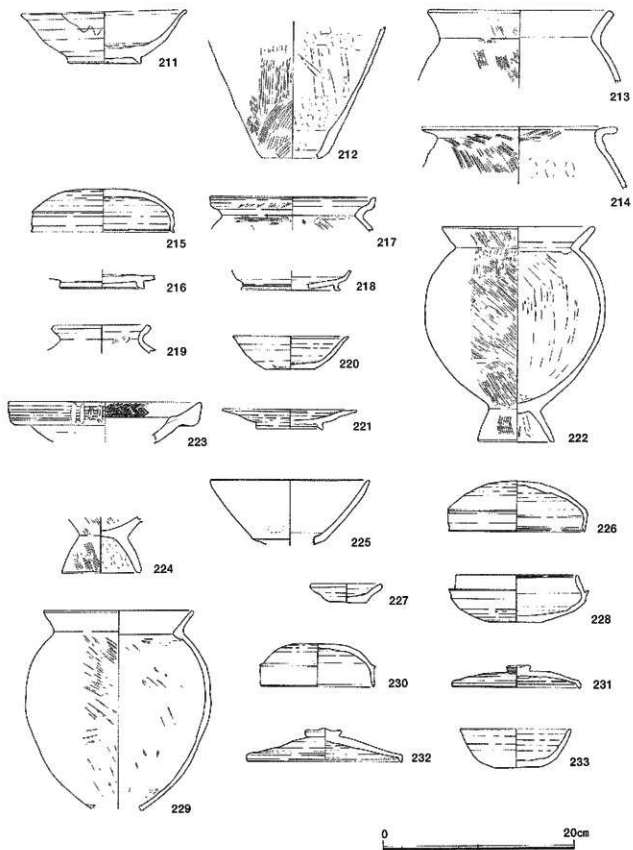
包含層出土の遺物

基本層序で述べた通り、この調査では遺構を検出した地山の上面に茶褐色、黒褐色の包含層が堆積していた。包含層とした土の中には、検出できなかった遺構の埋土等も含まれているはずであり、そのせいか、比較的残りの良い土器等が少なくない。

211から214は、包含層の中では上層にあたる、茶褐色土および褐色土と黒褐色土が混じった土から出土したものである。211はN16W4グリッド出土の山茶碗である。比較的高い高台を持ち、体部もややふくらみを持っている。茶褐色土は山茶碗までの遺物を包含している。212はN12E12グリッドから出土した古代の甕。Bx出土のものと思われるが、注記に従い包含層出土とした。213はN4E00グリッドから出土した甕の口縁。214はSN00W4から出土した古代の甕である。口縁部はほぼ水平に近く開いている。

215～225は、褐色土の下位の包含層である黒褐色土からの出土である。215はN8W4グリッド出土の須恵器杯蓋である。216はN8W8グリッド出土の高台をもつ須恵器杯の底部である。217はN4W4グリッド出土の受口状口縁甕である。口縁部の外面には歯による刺突が施されている。218、219はN4W8グリッド出土。218は高台をもつ須恵器杯の底部である。219は須恵器の甕口縁部である。220～222はSN00W4出土である。220は須恵器の碗である。口径12.1cm、器高3.4cmをはかる。内面の底部に×印のヘラ記号がつけられている。221は灰釉陶器段皿である。黒褐色土のなかでも最上層にあたる「色淡」からの出土である。内面には自然釉が厚く付着する。台形に近い高台で、外側で接合している。折戸53号窯式期の中でも後出のものと思われる〔前川1984〕。222は弥生土器の甕である。胴部の一部を欠くが、かなり遺存度が高い。胴部は粗い条痕のような調整である。このグリッドには方形周溝墓D3の一部があり、その埋土上面から弥生時代終末期の土器が多く出土している。222も遺存度と土器の特徴から見て、本来その一つであった可能性が高い。223～225はS14W4出土である。223はパレススタイル壺の口縁部で、口縁の造面に棒状浮文の痕跡がある。224は甕の台部である。225は法量の小さな高杯の杯部である。これらの土器も、このグリッドで検出されたD3上面土器群と近い時期のものであり、本来D3上面土器群の一部の可能性が高い。黒褐色土は弥生時代から古墳時代までの遺物が多いが、その最上位の「色淡」には灰釉陶器が含まれている。

226～228は包含層という注記がなされているが、出土した層位は不明である。226、227はN12E00グリッド出土。226は須恵器杯蓋である。227は山茶碗の小皿。228は須恵器の杯身であるが、N8W4グリッドの包含層上層出土である。口径は12.7cmとやや人型で、底部外面に×印のヘラ記号が付けられている。229～233については出土地、出土遺構不明のものをまとめた。いずれも残りが良いものばかりであるが、土器に注記がない。229は弥生土器の甕である。円化部の大半が残っている。口縁端部は薄くなり、丸く終わっている。S12W12の遺物と同じ箱に収められていたが、土器自体に注記がなく、この箱にはそれ以外のグリッドの遺物も若干あったため、確実にS12W12出土とはできない。230は須恵器の杯蓋。1次調査で出土したものの中では口径が小さく、体部も丸みを帯びており、やや古い特徴を示している。231、232は須恵器の蓋である。231は全体の1/5ほど残り、口径13.4cm、器高は2.3cmほどである。232はほぼ全体が残り、口径は13.4cm、器高は3.4cmである。233は須恵器の碗である。ほぼ全体が残り、口径は11.4cm、器高は4.1cmをはかる。



第61图 包舍厝出土遗物

5. まとめ

5-1. 弥生前期について

1 遺物

第1次調査では、D2・D5・D10の3条の溝からまとまって、また他の遺構からも弥生時代前期の遺物が出土している。特に土器は、溝内からの出土資料は一括性が高いこともあり、すでにこの地方の弥生時代編年のなかで、前期後半古相の指標資料として扱われてきている。

詳細な分析は別稿にゆずり、ここでは第1次調査で出土した資料の全体的な特徴を、簡単にまとめておきたい。

まず、土器について。特にまとまって出土した溝3条の資料を中心に、気付いた点をあげておく。

土器の時期についてだが、D2・D10出土資料は先に触れたように、弥生時代前期後半古相の一括資料として既に扱われてきており、そのあいだに大きな時期差はないと認識されている。今回新たに紹介したD5については、型式学的に古い特徴が残る資料がやや目立つようである。一方で竈における沈線文の多條化なども確認できる資料もあることから、新旧の要素が混在しているということになる。この傾向は既に永井宏幸氏によって指摘されており【永井・村木2002】、それを追認する資料といえよう。基本的に、D2・D5・D10の3条の溝から出土した資料は多少の時間幅をもつにせよ、ほぼ同様の時期、すなわち、石黒編年のI-3期、また永井編年のI-5様式に、およそあてはまると考えておきたい。

尾張地方では、弥生時代前期の土器を4系統5分類に区分しているが、第1次調査ではそのうち、遠賀川系A類（いわゆる正統遠賀川とよばれた一群）・遠賀川系B類（いわゆる垂流遠賀川とよばれた一群）・条痕文系の3系統にほとんどの土器が分けられ、削痕文系がごくわずかに入る状況である。さらに、3系統のうち量的に多いのは遠賀川系A類であり、ついで条痕文系、遠賀川系B類は少ない傾向にある。

土器製作の面では、胎土の使い分けが曖昧な印象をうけた。ふつう系統ごとに特徴的な胎土を使用するが、遠賀川系A類の胎土で作られた遠賀川系B類や条痕文系の上器がある。また、尾張平野では刷毛目など器面調整に原則のようなものがある程度感じられるのだが（例えば堯と鉢の刷毛目の方向の違いなど）、そのあたりにも曖昧さを感じられた。

土器以外の遺物は、比較して出土量がとても少ない。

石器もわずかな出土量である。本来的に保有量が少なかったのか、廃棄が少なかったのかは判断できない。種類も少ないようである。磨製石斧・スクレイパー・石鏃などが出土しているが、石包丁はない。使用している石材は特に共通するものはなく、さまざまである。産地がわかりやすい例としては、石鏃の下呂石とスクレイパーのチャートで、特にチャートは江戸時代に養老産火打石として良く知られているものと同じ石材と考えられ、そちらから選ばれてきたものと推定される。

他の遺物には、土鍾や加工円板などの土製品や貝殻などの自然遺物がある。

土鍾はD2から数点出土しており、大きく太く重量もあるものから小さく細い軽量型まで、形状・重さともバラエティに富んでいる。

自然遺物については、炭化米が数粒であるが出土していることに注目したい。底面に刷痕がみられる土器18・34もあることから米の存在はあきらかだが、石包丁をはじめ稲作農耕に関連する道具類は見あたらなかった。遺物の面からは、稲作農耕をおこなっていたと推定できる資料は、現在のところ確認できて

いないことになる。

木製品・金属製品は明確な前期資料は出土していない。

土器の出土量に対して他の遺物の量が少ない点については、廃棄の場所や状況の違いもあると思われるが、1985年夜楽町地区調査会が実施した発掘調査でも弥生時代前期の溝（SD03・SD105）から他の遺物がほとんど出土していないので、高蔵遺跡の弥生時代前期における、一つの特徴といえるのかもしれない。

また包含層中などから、弥生時代前期末～中期初頭に比定される土器が見えてきた。これまで高蔵遺跡では中期初頭が存在していないと認識されてきたが、再検討が必要と思われる。

2 遺構

弥生時代前期の資料が出土している遺構としては、D2・D5・D10と、D18やK19、いくつかのピットがあげられるが、明確な前期遺構という点ではD2・D5・D10の3条の溝といえよう。

このうち、D2とD5は規模や断面などが良く似ていることや、並行して掘削されていることから、対になる溝と判断されている。緩やかに弧を描くようにして掘削されているこの2条の溝は、形状から環濠と考えられており、それは妥当な位置づけだと考えられる。埋土や出土土器の時期から、2条の溝はほぼ同時期に掘削され、廃絶されたと思われるが、D5の資料にやや古相の特徴が色濃いことに注目すれば、若干D5のほうが早く埋没し始めた可能性も考えられる。先述したように出土土器に大きな時期差は感じられず、2条の溝の機能期間に時間差はあまりないと考えてさしつかえないと思われる。

この2条の環濠の北方に、東京大学などが調査し前期資料が出土した「C地点」と呼ばれた地点が位置する。おそらく、このC地点が2条の環濠の続いていく先ではないかと推定される。

一方D10は、さきの2条と並行せず、D5から分岐するようにして掘削されている溝である。南西方向に直線的に延びており、調査区外へと続いていくため、どのようなラインを描いているのかはわからない。しかし、形状やD5との位置関係、出土土器の時期などを考えると、2条の環濠と全く無関係とは考えにくい。環濠かもしくはそれに類する溝（例えば区画溝）であろう。

またD10は、調査区外で湾曲していく可能性があり、その場合、市教委第2次調査で検出されている溝（D.A.）や夜楽町地区調査会調査の環濠（SD03など）との繋がりが視野に入れ検討すべきである。現状ではこの空白域を調査する事は難しく、D10の全体の形状や性格、D2やD5との時期差を確認し判断するのは今後の課題としたい。

第1次調査では、これらの溝が調査区中におおきく展開していて、溝の内側に当たる部分までは調査範囲がおよんでいない。弥生時代前期の集落跡は、環濠の内側にひろがっているはずであるから、第1次調査の調査範囲は前期集落の西側の端にあたる部分と考えられる。明確な前期遺構がほかに検出されなかったのは、この位置的な制限によるものと思われる。

3 高蔵遺跡の弥生時代前期集落

高蔵遺跡では、市教委による第1次調査以前に、遺跡範囲の南東部分にある「C地点」で弥生時代前期の遺物が出土することが知られており、東京大学などが調査をおこなっている。しかし、弥生時代前期の遺構が初めて検出されたのは、この第1次調査である。しかもそれが環濠と考えられる溝であったことから、高蔵遺跡に弥生時代前期集落が存在したことがあきらかとなった。第1次調査の弥生時代前期に関する部分で、なにより大きな成果はこの点である。

その後、1985年の夜寮町地区調査会による発掘調査で環濠と思われる溝がさらに2条発見され、高蔵遺跡の前期集落がかなり規模があるとわかった。だが、以後近辺での調査例はなく、集落の全容を把握する状況までには至っていない。

ここでは、現状でわかっている高蔵遺跡の前期集落の内容と、不明な点をまとめておく。

【集落の位置】

前期集落の位置は、遺跡範囲でいえば南東部分の、大きく北へ挟りこんだ部分の周辺である。半島状にのびる名古屋台地西端（熱田台地）の伊勢湾側ではなく、反対側の当時は入り江になっていたと推定される部分に面した、台地縁辺である。周囲に低地はみあたらない。環濠の掘削方向は、どうやらこの台地縁辺に向かっていているようである。

【集落の規模と形態】

調査で確認されているのは、集落西端にあたる環濠の一部のみなので、実際の規模は推定できない。

形態は環濠集落である。2条一対で内側環濠（市教委第1次調査のD2・D5）と外側環濠（夜寮町地区調査会調査のSD03・SD105）を備えた、多重環濠集落である。ただし、内側環濠と外側環濠は出土土器に時期差があるため、この4条の環濠がある一定の期間同時に機能していたかどうかの判断は難しい。外側環濠は、集落域の拡大に伴ってつくられた可能性も考えられる。尾張平野の弥生時代前期集落は一重の環濠が多いのとは様相を異にしており、また環濠を全周させるのではなく台地縁辺を利用して半円形に巡らせていたと推定されることなどから、集落の形態については三重県大谷遺跡や永井遺跡との類似性が以前から指摘されている。

高蔵遺跡では、弥生時代前期後半より古い時期の遺構・遺物がほとんど確認されていないため、もともとあった集落が環濠集落化したとは考えにくく、当初より環濠集落としてつくられた集落であったと思われる。

居住域の位置は、環濠の東側の台地縁辺と推定されるが、その部分は1907～1908年の大津通開鑿以降に大きく削り取られており、すでに消滅している可能性が高い。しかし、2002年大津通を挟んだ東側の高台で実施された市教委第37次調査で、後世の遺物に混ざって弥生時代前期土器の破片がわずかに出土していることから、その付近までは集落が展開していたのではないかと考えている（第62図）。

居住域のほか、集落の構成要素である墓域や水田跡などの生産域、集落内の具体的な構成は、現状では全くの不確認である。環濠以外の遺構は検出されていない。ただ、水田跡については周囲に適当な土地がないことや伴う遺物が確認できていないことを考えると、もともと存在しないことも考慮に入れる必要があるだろう。

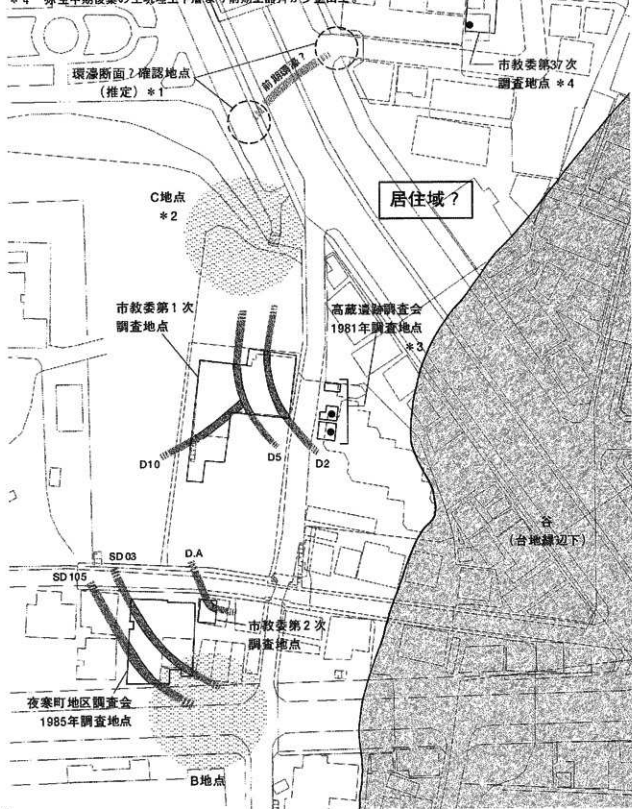
*1 鎌谷徳三郎 1908 「尾張熱田高倉貝塚調査」『考古界』7-2

による。前期土器も出土したようである。

*2 田中稔 1954 「高蔵貝塚」による。前期土器出土。

*3 包含層から前期土器片が数点出土。

*4 弥生中期後葉の土坑埋土下層より前期土器片が少量出土。



第62図 高蔵遺跡弥生時代前期出土地点 (S = 1 : 800)

【高蔵前期集落の特質】

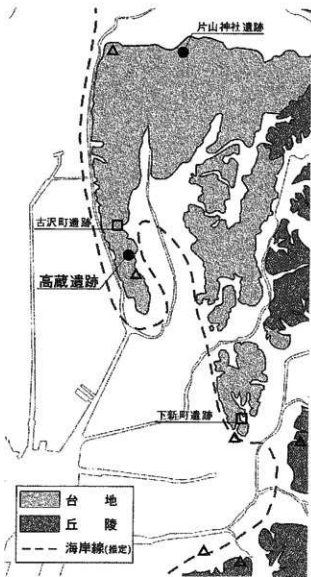
まず、その立地である。台地上の遠賀川系主体の遺跡はこの地域では高蔵遺跡と片山神社遺跡があげられる程度であり、集落跡となると、高蔵遺跡しか確認されていない。しかも周辺には、弥生時代前期に属する遺跡は伝聞を含めてもとても少なく、台地上は規模の小さい遺跡が主である。

そんな中において高蔵前期集落は、形態といい規模といい、出土遺物といい、突出して弥生的要素を持っており、特異な存在に目につく。名古屋台地上において、高蔵前期集落は弥生時代前期後半頃に突如として現れる、大規模集落と位置づけられよう。

かといって、典型的な前期集落である尾張平野に展開する各遺跡と共通する点が多いかといえば、そうとも言えない。環濠をはじめ集落形態や、出土遺物（土器系統の組成など）に異なる点が見受けられるからだ。

また、生産活動の痕跡がほとんど確認されていない点も注意したい。今後の調査の積み重ねでわかってくる部分もあるだろうが、現時点の状況では、農耕を主体としたムラという性格は感じられない。特殊な性格を持つ集落だった可能性も視野に入れておくべきかと考える。

とはいえ、高蔵遺跡の弥生時代前期の様相を把握するには、調査事例の増加を待たねばならない点が多々ある。今後の調査に期待したい。



第63図 名古屋台地の弥生時代前期遺跡

- 遠賀川系土器出土遺跡
- 築縄文系土器出土遺跡
- △ 伝聞・前期資料出土遺跡

<参考文献>

石黒立人 1992 「尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相―遠賀川系土器」『山中遺跡。(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集

永井宏幸・村本誠 2002 「3. 尾張!」『弥生土器の根柢と編年 東海編-1』

愛知考古学協会編 1988 「<築縄文系土器>文化をめぐる諸問題」資料編1

5-2 弥生後期について

1 遺構について

1次調査で検出された弥生時代後期の遺構は、方形周溝墓の一部と思われる溝(D3、D11)と、D12、D16(水道)といった性格不明の溝状の落込みである。現在でこそ高蔵遺跡では数多くの方形周溝墓が知られているが、調査の時点では、この2基は名古屋市内で初めてそれと認められた方形周溝墓であったようである。D3の方は、周溝墓のかんりの部分が調査され、豊富な遺物が出土した。遺物については後述するが、時期としては後期初頭に位置づけられよう。D3は、極めて残りが良く、調査された溝の規模もかなり大きい。D11は、D3のすぐ南に位置しており、報告でも述べたように溝の一部を共有している可能性もある。遺物は必ずしも多くはない。時期の判断が難しいが、遺物の量から見ると後期後半(VI-2または3様式)と見られる。本調査区で見つかった周溝墓は、確実なものは調査区の南よりに位置するこの2基だけであるが、すぐ南に位置する夜寒地区調査会の調査地点でも、後期前半(VI-3様式)の周溝墓が見ついている事からすれば、本調査域から南にかけては墓域であったと見て良いだろう。また、D3の埋土上面からは、弥生時代終末期あるいは古墳時代初頭と見られる土器もまとめて出土しており、これを、D3という周溝墓に対して後の時代に行った何らかの行為の痕跡と考えると、少なくともこの時期までは自らと関連のある墓として意識されていたとみなせよう。かなり時間的に隔たっているにも関わらず、墓に対する行為が行われたことを考えると、その墓の性格、あるいは墓に葬られた人の性格は興味深い。ただし、この間の遺物はほとんど出土しておらず、D11などの存在から見て墓域として継続して利用されているが、D3という特定の周溝墓に対して継続的に何らかの行為を行い続けたわけではない。

さて、方形周溝墓を、弥生時代の集落を構成する要素の一つとしてみると、この方形周溝墓を築いた人たちの居住域が問題となろう。高蔵遺跡は、竈穴住居などの検出例が少なく、居住域については不明なことが多い。1次調査地点の南にあたる34次調査地点では、VI様式前半の竈穴住居に重なってVII様式末からその直後の生活の痕跡が見つかっており、今回報告した周溝墓D3の遺物の時期と符合していることは注目しておいて良いだろう。

2 出土土器について

D3から出土した土器のうち遺存度の高いものは、いずれも本来この方形周溝墓に関連した土器であることは間違いない。方形周溝墓から出土する土器は、必ずしもすべて同時期とは限らず、単純に一括資料ということはできない。D3については、出土状況から同時性を読み取ることはできない。特に、下位から出土した土器は、まとめては出土しているとはいえ、出土した高さもまちまちである。しかし、形態的に見たとき、下位、上面土器群のそれぞれにおいて、明らかに時期の違いと判断されるものはないので、ひとまず同時期の資料とみなしたい。

その他にD12からも弥生時代後期の土器がまとめて出土している。こちらは破片が多く、遺構の性格も不明であるが、溝内でも同じレベルでまとめて出土しているから同時期の資料とみなしても良いだろう。これらの土器を中心に若干の検討をしておこう。

D3出土のものは後期初頭のVI-1様式に属する。一般に使われている土器様式名で言えば、高蔵式と山中式の間時期にあたる。この遺構で多く出土した壺には、形態、文様等の点で高蔵式の太須壺に近い

ものがあるが、高蔵式の特徴である凹線文系の上器、すなわちタタキの痕跡を残す甕、口縁部に凹線文が施された細頸壺などは見られない。甕は、胴部にタタキは持たず、凹線文系の甕の特徴は失われているが、山中式の甕の特徴とも異なり、外面はナデ調整されている。壺についても、赤彩という新しい特徴はあるものの、典型的なバレススタイル壺は見られない。また、ブランドグラス形の祖形と思われる高杯や法量の小さな高杯はあるが、外反口縁を持つ山中式に特徴的な高杯は見られない。高杯や台付鉢には、文様部を除いた全面赤彩と、円形の赤彩が施されているものがあり、定型化した塗り分けは達成されていない。並や甕の過渡的と言える特徴、小さな高杯などの供膳器の存在、定型的な塗り分けではない赤彩といった特徴は、高蔵式に後続し、かつ典型的な山中式よりは先行する特徴と言って良いだろう。名古屋台地上では、こうした高蔵式と山中式の間の土器は、「仮称見晴台式」とも言われてきたが、その基準資料である見晴台遺跡の資料〔村木2001〕が高蔵式に後続するという性格が強いのに対し、D3の資料は、器種の構成や赤彩といった特徴から山中式に先行するという性格が強い。また、小法量の供膳器を含むといった器種構成の特徴は、本資料を「仮称見晴台式」に含めることに否定的である。であるからこの資料を、典型的な資料が山中式と通称される弥生時代後期の土器様式の最初期に位置付けたい。

水道部分のD16から出土した上器は、甕と高杯の2点に過ぎないが、高杯はD3下層のものに類似した特徴を示しており近い時期を想定して良いだろう。また、甕は、外反口縁で胴部に柵による文様が施され、底部は平底である。平底であることや胴部への施文など、近江地域との関連を想定できよう。尾張平野の八王子遺跡では、D16に近い時期に近江との関わりが強い受口状口縁の甕が比較的多く出土している〔榎上2001〕。高蔵遺跡ではそうした状況ではないものの、近江との関連を示す甕が出土していることは注意しておいてよいだろう。

D12の土器群に含まれる甕は、複製でタタキを残すものとされているが、すでに述べたとおりタタキではなく、おそらく貝殻を原体とする粗い条痕である。名古屋市内では、その他にも同じ頃にタタキを残すと報告されている資料が幾つかある〔村木1995〕。その内の一つである桜田貝塚・貝塚町遺跡出土のものもよく観察すると、タタキではなく高蔵遺跡のものと同様、粗い条痕とみたほうが良いと思われる。この個体は平底に復元されているが、台の有無については根拠がなく、現状では、これをタタキにより作られた甕とするのに肯定的な材料はない。高蔵遺跡では、D3上層にも粗い条痕で調整した甕があり、一見タタキに見えるような粗い条痕が、Ⅶ様式の甕にかなり普遍的に見られる特徴であったとも思われる。Ⅶ様式期からその後の時期にかけて、名古屋台地の京の西三河ではタタキを残す甕がまとまって出土する遺跡があり〔加藤1998〕、こうした遺跡の評価に際して隣接する名古屋台地におけるタタキを持つ甕の存否は重要になると思われるだけに、慎重な観察が必要である。

D3上層の資料はこれに続く時期である。この上層群は、Ⅶ-3様式直後の弥生時代終末の上器群である。S字壺A類〔赤塚1990〕、鋸歯文バレススタイル壺等を含み、Ⅶ-3様式に近い特徴を示すが、小型器台も含まれており次の時期と見たほうが良いだろう。甕ではS字壺が2点存在する。名古屋台地では数少ないA類である。この資料における甕の主体は受口状口縁になるもので、くの字に外反する口縁の甕はほとんどない。受口状口縁の甕の中にも、D12の甕と同様な、胴部調整が粗い条痕のものがある。高杯も杯部が浅く、脚は短くなっており、Ⅶ-3様式より新しい特徴を示している。小型器台は、この地域にあった器台を小型にしたものであり、小型化は他地域からの影響かもしれないが、器形は在来のものである。

この土器群は、D3という周溝墓に対して行った何らかの行為に伴うものであると思われるが、器種の構成としてはこの時期に存在すると思われるものをほぼ網羅しており、偏りは見られない。

このD3の上層には名古屋台地ではあまり数の多くないS字甕が含まれているが、この1次調査ではこれ以外にもD11やK7・6出土道物の中にもS字甕が見られる。特にK7・6の191は口縁部下が長く、S字甕の中でも古い特徴を示している。甕の主体は受口になるものや単純外反口縁のものであり、甕の中で占める位置は僅かなものではあるが、名古屋市内の他の遺跡ではほとんど見られない点を考えると重要である。

5-3 古墳時代から平安時代

古墳時代については、わずかに須恵器が出土しているのみである。包含層を中心に遺存度の高い蓋杯が出土している他、K7から出土した須恵器の甕も古墳時代のもと思われる。何等かの遺構が存在したことは確かであろうが、詳細は不明といわざるを得ない。

その後では9世紀代の竪穴住居が4基検出されている。何れもプランが不明確で、住居に伴う施設もほとんどわからない。時期を推定できたB2、B3については共に9世紀前半頃のものと考えている。

B2のコーナー付近では焼土があり、その付近で、須恵器、灰軸陶器が出土している。焼土は、袖や支脚といった明らかに竈と判断できるような痕跡を伴っていない。しかし、名古屋台地で私たちが調査する住居の多くでは、明らかに竈と呼べるような明確な形態をとどめず、単に焼土が広がっているだけに過ぎない事例が多いことを考えると、住居の火処であった事はほぼ確実で、それが住居のコーナー付近にあったことが明らかとなった。高蔵遺跡内でも39次調査地点において竈が住居のコーナーに近い位置に築かれている例がある。

更に、B3の外側では甕の底部が倒立していた。これはB3の外側に位置し、果たしてB3と関わるものであるかどうかかわからないが、名古屋台地の古代の集落ではしばしば見かける遺構である。Bxにもあるほか、高蔵遺跡では39次調査でも見つかっている。39次調査の例では、数十cm離れて支脚のような石が立てられていたが、本来どのような形状のもので、どのように用いられたかは不明である。この事例でも竪穴住居との関連がよくわからなかった。

さて、前述したように、この地点の古代の集落は9世紀代のものであると思われる。すぐ南で行われた夜来地区の調査では、今回よりやや古い7、8世紀の竪穴住居などがまとまって見つかったほか、その南に位置する第39次調査地点でも8世紀から9世紀代の竪穴住居が数多く見つかった。両地点とも、竪穴住居だけではなく、大規模な溝の跡などもある。7世紀以降、調査地点ごとに少しずつ時間のずれはあるが、高蔵結御子神社一带にその頃の集落が広く営まれていた様子が明らかになりつつある。高蔵結御子神社は、『続日本後期』承和二年(852年)の記事にその名が見えている。何らかの関わりのある集落を想定することもできよう。

その後については、包含層から山茶碗が出土しており、何等かの形でこの地が利用されたことが推測できる程度である。

参 考 文 献

<高蔵遺跡の調査報告等>

- 徳屋徳三郎 1908 「尾張熱田高倉貝塚實査」『東京人類学会誌』第23巻266号
- 徳屋徳三郎 1908 「尾張熱田高倉貝塚實査」『考古界』第7巻第2号
- 清野録次 1925 「尾張國名古屋熱田貝塚」『日本原人の研究』岡倉院
- 澄田正一 1955 「愛知県名古屋市高蔵貝塚」『年報26年度』
- 清野録次 1969 「名古屋市熱田高蔵神社北方貝塚」『日本貝塚の研究』
- 熊田敦子 1979 「高蔵貝塚Ⅰ-1953年D地点第1次発掘調査」 南山大学人類学博物館
- 名古屋市教育委員会 1982 「高蔵遺跡発掘調査概要報告書」
- 杉浦仁美穂 1982 「高蔵貝塚-春日荘跡地区発掘調査報告書」 高蔵遺跡調査会
- 名古屋市教育委員会 1983 「高蔵遺跡発掘調査概要報告書」『埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
- 水口富夫 1985 「高蔵貝塚Ⅱ-1956年D地点第2次発掘調査」 南山大学人類学博物館
- 荒木実徳 1986 「高蔵遺跡五本松町発掘調査概要報告書」 五人産業株式会社
- 荒木実徳 1987 「高蔵遺跡五本松町第2, 3次発掘調査概要報告書」 国際興建開発コンサルタント株式会社
- 塚松和男他編 1987 「熱田区夜寒町・高蔵遺跡発掘調査報告書」 名古屋市教育委員会
- 夜寒町遺跡調査会 1988 「高蔵(夜寒町102番地)遺跡調査報告」
- 水野裕之 1988 「高蔵遺跡第3次発掘調査報告書」 名古屋市教育委員会
- 荒木実徳 1989 「高蔵遺跡 沢上二丁目501発掘調査報告書」 川島商事株式会社
- 竹内宇智 1990 「高蔵遺跡-第4次調査の概要-」 名古屋市教育委員会
- 荒木実徳 1991 「高蔵遺跡五本松町11第4, 5, 6, 7次発掘調査報告書」 株式会社ユニオン
- 野口泰子 1994 「高蔵遺跡 第5次調査の概要」 名古屋市教育委員会
- 中橋理忠・尾野善吉 1994 「高蔵遺跡(花町地区)発掘調査報告書」 高蔵遺跡(花町地区)調査会
- 野口泰子・伊藤厚史 1995 「高蔵遺跡 第6次調査の概要」 名古屋市教育委員会
- 加藤真琴等 1995 「高蔵遺跡(第7次)発掘調査報告」『石神遺跡 玉ノ井遺跡 高蔵遺跡(第7次)発掘調査報告書』
名古屋市教育委員会
- 平出紀男・伊藤厚史 1996 「高蔵遺跡(第8次・第9次)」『埋蔵文化財調査報告書25』 名古屋市文化財調査報告32 名
古原市教育委員会
- 野口泰子 1996 「高蔵遺跡 第10次調査の概要」 名古屋市教育委員会
- 服部哲也 1996 「高蔵遺跡-第11次発掘調査の概要-」 名古屋市教育委員会
- 山原和美穂 1997 「埋蔵文化財調査報告書26」 名古屋市文化財調査報告34 名古屋市教育委員会
- 野澤則幸 1998 「高蔵遺跡第17次発掘調査報告書」 名古屋市教育委員会
- 山田敏一 1998 「高蔵遺跡第18次発掘調査報告書」 名古屋市教育委員会
- 山田敏一・野口泰子 1999a 「高蔵遺跡第19次発掘調査報告書」 名古屋市教育委員会
- 服部哲也 1999 「高蔵遺跡第20次発掘調査報告書」 名古屋市教育委員会
- 山田敏一・野口泰子 1999b 「高蔵遺跡第21次発掘調査報告書」『東邦ガス工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 東古渡町遺
跡第6次発掘調査報告書 高蔵遺跡第21次発掘調査報告書』東邦ガス株式会社
- 杉山仁 2000 「高蔵遺跡(五本松町1202番地)発掘調査報告書」アイシン閉鎖株式会社 アイシン情報株式会社
- 伊藤厚史編 2000 「埋蔵文化財調査報告書33」 名古屋市文化財調査報告45
- 伊藤厚史・村木誠 「高蔵遺跡(第24次・第25次)」『埋蔵文化財調査報告書34』 名古屋市文化財調査報告46 名古屋市教
育委員会

- 森威史 2001 『高蔵遺跡』 株式会社静岡人類史研究所
- 磯鶴茂福 2001 『高蔵遺跡第26次～30次発掘調査』『埋蔵文化財調査報告書37』 名古屋市文化財調査報告50 名古屋市教育委員会
- 伊藤厚史編 埋蔵文化財調査報告書42 高蔵遺跡（第31次・32次・33次・立倉 駒海城跡（立倉）） 名古屋市文化財調査報告55 名古屋市教育委員会
- 村木誠編 2003 『埋蔵文化財調査報告書46 高蔵遺跡（第34次・第39次）』 名古屋市文化財調査報告60 名古屋市教育委員会
- 藤井康隆編 2003 『埋蔵文化財調査報告書47 高蔵遺跡（第35次～38次・第40次・第41次）』 名古屋市文化財調査報告61 名古屋市教育委員会

その他の引用・参考文献

- 伊藤正人・川合剛 1993 『特別展 名古屋の縄文時代 資料集』 名古屋市見晴台考古資料館
- 尾野善裕 2000 『猿投窯（系）須恵器産年の再調査―須恵器生産の出現から消滅』第1分冊 東海土器研究会
- 尾野善裕他 2000 『猿投窯』『須恵器生産の出現から消滅』第2分冊 東海土器研究会
- 加藤安徳 1998 『伊勢湾地域の叩き甕』『橋崎彰一先生古希記念論文集』 橋崎彰一先生古希記念論文集刊行会編 泉陽社
- 木村有作 1995 『あゆら高の考古学』名古屋市博物館
- 磯鶴茂 2003 『埋蔵文化財調査報告書44 玉ノ井遺跡（第3・4次）』 名古屋市文化財調査報告58 名古屋市教育委員会
- 斎藤孝正 1989 『灰輪陶器の研究Ⅱ―猿投窯第Ⅴ期焼・Ⅲ期の型式編年―』『名古屋大学文学部研究論集』104 史学35 名古屋大学文学部
- 永井安幸・村木誠 2002 『尾張地域』『弥生土器の標式と編年』東海編 木耳社
- 樋上昇 2001 『八三子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 藤井康隆 2002 『古墳時代中期における尾張の首長墳と小古墳』『古墳時代中期の大型墳と小型墳-初期群集墳の出現とその背景-』発表要旨編 東海考古学フォーラム・静岡県考古学会
- 前川要 1984 『猿投窯における灰輪陶器生産最末期の諸様相』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 水野裕之 2001 『玉ノ井遺跡第2次発掘調査』『埋蔵文化財調査報告書37』 名古屋市文化財調査報告50 名古屋市教育委員会
- 村木誠 1998 『よみがえる環濠集落』 名古屋市見晴台考古資料館
- 村木誠 2001 『「似赤見晴台式」を考える（1）』『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第3号 名古屋市見晴台考古資料館

付論1 高蔵遺跡出土の自然遺物

渡辺 誠

1. 資料の概要 (第1・2表)

本稿で報告する資料は、昭和56年度に名古屋市教育局によって発掘された弥生時代集落としての高蔵遺跡の、2本の溝(D2・D10)内に採掘した小貝層中よりブロック・サンプリングされた自然遺物である。なおサンプリング個所については、4-3(29-36頁)を参照された。

ブロック・サンプリング資料は6件で、D2より4件、D10より2件である。これらの時期は、弥生時代前期後半西志賀期に含まれるI-5様式期である。ブロック・サンプリングのサイズなどは第1表に示すとおりである。またそれぞれに含まれていた遺物は、第2表に示すとおりである。

2. 大型貝類 (第3・4表、写真1)

貝層の主体となる食用大型貝類は第3表に示すように、腹足綱(巻貝)11種、斧足綱(二枚貝)14種が検出されている。種名において前者は後者よりやや少ない程度であるが、数量的には後者の二枚貝が79-100%を占めている(第4表)。

それらのうちではマガキが圧倒的に多く、資料1・2・6では88-98%を占めている。資料3-5では29-47%と比重が下がるが、第1位であることには変わりはない。これらのなかでマガキに次ぐのは、資料3ではハマグリとアカニシ、資料4ではオキシジミ・ハマグリ、そして資料5ではオキシジミ・シオフキである。いずれの種も20%を超えることはない。これらはいずれも遠浅砂底の海岸に棲む種類であり、採集地として下潮時には遠浅の砂浜が広がる海岸が復元されてくる。これらマガキ・ハマグリなどの比重が高いのは、朝日遺跡(渡辺・久保1988, 2000)、西志賀貝塚(渡辺他2002)など、伊勢湾奥部の弥生時代貝塚の特徴である。

3. 微小貝類 (第5~7表、写真2)

非食用貝類の微小貝は19種検出された(第5表)。

それらは鹹水産微小貝3種、鹹水産微小貝5種、汽水産微小貝2種、陸産微小貝9種である。これのうち貝層形成後に侵入してきた陸産微小貝以外の種類は、大型貝類、あるいは海藻などの採集に付随して運ばれたものとみられる。

第1表 ブロックサンプル一覧表

番号	地区	サイズ (cm)	
		タテ×ヨコ×厚さ	体積 (cm ³)
1	D10	30×30×10	9,000
2	◇	30×30×20	18,000
3	D2	40×30×25	30,000
4	◇	40×40×20	32,000
5	◇	40×40×10	16,000
6	◇	30×30×10	9,000

第2表 ブロック・サンプル別遺物名一覧表 (単位: g)

種類	人工遺物										自然遺物									
	番号	土器片	土器片(点数)	貝類	微小貝	フジツボ類	カニ類(点数)	ウニ類(殻)	ウニ類(種)	魚骨	魚鱗	カエル骨	ヘビ類(骨)	鳥・獣骨	炭化米(点数)	不明炭化物(点数)	炭化材			
1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1.10			
2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2.15			
3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3.51			
4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3.43			
5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3.10			
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0.13			

それらの量的構成は第6表に示すとおりである。資料1・2では汽水産微小貝が多いが、資料3～6では陸産微小貝がやや多く、他はきわめて少数である。前者のなかでもオカチョウジガイとヒメコハクガイが多い。オカチョウジガイは人家周囲の地表、ヒメベッコウガイは小石混じりの腐植土で杉や他の落葉の堆積する緩やかな低い山地の斜面によく生息している種類であり、貝層形成時の環境復元に示唆的である。次にそれら陸産微小貝類の含有率を示したのが第7表である。検出数は一見多いようにみられるが、含有率は低く、すべて6%以下である。かつて朝日遺跡において、含有率が10～32%を示すサンプルとそれ以下のサンプルとに大別され、それぞれ非水中堆積と水中堆積との差を示している指摘したことがあるが(渡辺・久保1988)、これに比べると本貝塚の場合は水中堆積と判断される。換言すれば、貝層形成期における2木の溝は、湛水状態であったと復元される。

4. 魚類 (第8・9表、写真3)

魚類は19種が検出された(第8表)。その数量は第9表に示すとおりで、出現頻度の高いのは、マイワシ、カタクチイワシ、ウナギ、キス科、マアジ属、カマス、サハ属、カレイ科などの種類である。突出して頻度の高いのはマイワシであるが、内湾性貝塚に一般的なスズキヤクロダイなどはきわめて少ない。またフナ属もわずかながらみられ、河川の流入する湾奥部や水田における漁労活動が復元される。

5. 哺乳類

哺乳類はきわめて少ない。種不明のげっ歯類とニホンジカがごく少量検出されているにすぎない。ニホンジカは、下顎右第1門歯1点、同犬歯小破片1点、および第5頸椎1点が検出されている。

6. その他 (第2表)

動物遺体はこれらの他にごく少量ではあるが、フジツボ類、カニ類、ウニ類およびカエル類、ヘビ類、鳥類などがみられる。植物遺体としては炭化米もみられるが、第2表に数量を示すにとどめる。

7. おわりに

弥生時代の貝塚は、稲作などの陰に隠れてやや軽視される傾向がある。しかし同時代の他貝塚や縄文時代貝塚との比較を行うために、客観的な資料を蓄積していかなければならない。この小報告もそうした傾向をすこしでも促進することの一助になれば幸いである。

引用文献目録

- 渡辺 誠・久保 慎子, 1988: 朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告。愛知県歴史文化財センター年報, 昭和62年度。
- , 2000: 朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告。朝日遺跡VI。愛知県歴史文化財センター調査報告書, 83。
- , 岡田 賢・幸 浩基・森瀬 幸延, 2002: 百舌谷貝塚(平手町地区)の自然遺物。愛知県歴史文化財センター調査報告書, 101。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、見晴台考古資料館の木村有作・野沢剛幸・村木 誠の各氏、名古屋大学大学院文学研究科後期課程学生の長田友也氏、同農学研究科大学院研究生の岡田 賢氏より、多くのご教示とご協力を仰いだ。末尾ながら銘記して深謝の意を表する次第である。

第3表 大型貝類種名一覧

A. 腹足綱 GASTROPODA		
1. リュウテン科スガイ	<i>Umbonium (Suchium) costatum</i> KIENER	
2. ウミナナ科フトヘナタリ	<i>Cerithideu rhizophorum</i> A.ADAMS	
3. ウミナナ科ワファイ	<i>Cerithidea djadjaricensis</i> K.MARTIN	
4. ウミナナ科イウミナナ	<i>Batillaria multiformis</i> LISCHKE	
5. ウミナナ科イボウミナナ	<i>Batillaria zonalis</i> BRUGUIÈRE	
6. ウミナナ科ホソウミナナ	<i>Batillaria cumingii</i> CROSSE	
7. アクキガイ科アカニシ	<i>Rapana thomasiensis</i> CROSSE	
8. アクキガイ科イボニシ	<i>Thais clavigera</i> KÖSTER	
9. アクキガイ科カゴメガイ	<i>Bedequina birileffi</i> LISCHKE	
10. オリレヨウバイ科アラムシロ	<i>Triria (Hinia) festiva</i> POWYS	
B. 斧足綱 PELECYPODA		
1. フネガイ科サルボウ	<i>Anadara (Scapharca) subcrenata</i> LISCHKE	
2. イガイ科キサガイモドキ	<i>Solamna spectabilis</i> A.ADAMS	
3. ナミマガシロガイ科ナミマガシロ	<i>Anomia chinensis</i> PHILIPPI	
3. イタボガイ科マガキ	<i>Grassostrea gigas</i> THUNBERG	
4. フナガシロガイ科ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium (Ncotrapezium) japonicum</i> PILSBRY	
5. シジミ科ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> PRIME	
6. マルスダレガイ科ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> RÖDING	
7. マルスダレガイ科カガミガイ	<i>Dosinia (Phacosoma) japonica</i> REEVE	
8. マルスダレガイ科オキシジミ	<i>Cyclina orientalis</i> SOWERBY	
9. マルスダレガイ科アサリ	<i>Tapes (Amygdala) japonica</i> DESHAYES	
10. ハカガイ科シオフキ	<i>Macra veneriformis</i> REEVE	
11. シオサザナミガイ科ムラサキガイ	<i>Solcathina diplos</i> LINNÉ	
12. マテガイ科マテガイ	<i>Solen strictus</i> GOULD	
13. エゾオノノガイ科オノノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria osanagai</i> MAKIYAMA	

第4表 大型貝類構成比一覧表

種名	1		2		3		4		5		6		
	種数	%	種数	%	種数	%	種数	%	種数	%	種数	%	
スガイ			1	0.11	18	1.66	8	0.81	1	0.12	1	0.32	
フトヘナタリ					2	0.16							
ワファイ					29	2.36	7	0.68	4	0.40			
イウミナナ			1	0.11	34	4.39	15	2.17	8	1.78	1	0.32	
イボウミナナ							1	0.11					
ホソウミナナ					130	12.19	19	2.38	37	8.24	2	0.65	
アカニシ							1	0.11					
イボニシ							1	0.11					
カゴメガイ									3	0.67			
アラムシロ									2	0.67			
小計			2	0.47	2	0.25	261	21.20	51	6.94	38	12.92	
オノノガイ					17/10	16	1.30	1/2	2	0.27	3/3	3	0.87
ナミマガシロ					1/9	1	0.08						
イタボガイ					9/7	9	0.75						
マガキ	410/28	410	35.70	857/208	857	97.51	451/164	451	36.64	240/197	240	17.38	
ウネナシトマヤガイ					1/5	1	0.14	1/2/3	3/7	0.62	0/2	2	0.45
ヤマトシジミ							2/2	2	0.18				
ハマグリ					183/153	153	12.13	82/90	80	12.21	23/24	24	5.35
カガミガイ					1/6	1	0.08	3/3	3	0.41	1/1	1	0.22
オキシジミ					38/99	39	3.04	38/96	36	11.03	84/78	84	18.71
アサリ	0/1	1	0.23	2/3	3	0.34	38/99	39	3.04	38/96	36	11.03	
シオフキ					4/5	5	0.41	2/1	2	0.27	1/1	1	0.22
ムラサキガイ					45/46	46	3.74	12/11	12	1.53	5/56	56	12.47
マテガイ							1/1	1	0.11				
オノノガイ	9/12	12	2.80	1/6	5	0.65	18/19	18	1.36	1/0	1	0.22	
小計			45	99.53	379	96.77	952	78.81	66	11.40	79/78	79	19.82
計			105	100.00	379	100.00	1231	100.00	727	100.00	449	100.00	

第5表 微小貝類種名一覧表

A. 鹹水産幼貝		
1. ユキノカサガイ科ヒメコザラガイ	<i>Patelloida (Chizacmea) pygmaea</i> DUNKER	
2. ウミニナ科ヘナタリ	<i>Cerithidopsis cingulata</i> GMELIN	
3. ウミニナ科イボウミニナ	<i>Botillaria zonalis</i> BRUGUIERE	
B. 鹹水産		
1. イソマイマイ科シラギク	<i>Pseudolitia pulchella</i> DUNKER	
2. カワザンショウ科ヘソコダガイ	<i>Paludinella japonica</i> PILSBRY	
3. アマオブネガイ科ウヒメカノコ	<i>Smaragdia souverbiana</i> MONTROUZIER	
4. ニツノガイ科シマハマツボ	<i>Difflaba picta</i> A. ADAMS	
5. タケノコガイ科	Family Terebridae	
C. 汽水産		
1. ミズゴマツボ科ミズゴマツボ	<i>Stenothyra glabra</i> A. ADAMS	
2. カリザンショウガイ科	Family Assimineidae	
D. 陸産		
1. キセルガイモドネ科キセルガイモドネ	<i>Mirus gracilispira</i> KAJIYAMA & HARE	
2. オカクチキレガイ科マルカチョウジガイ	<i>Allopens brevispira</i> PILSBRY & HIRASE	
3. オカクチキレガイ科オカチョウジガイ	<i>Allopens claviumum kyoutoense</i> PILSBRY & HIRASE	
4. コハクガイ科ヒメコハクガイ	<i>Hawaii minuscula</i> BINNEY	
5. コハクガイ科コハクガイ	<i>Zonitoides arboreus</i> SAY	
6. ベッコウマイマイ科キビガイ	<i>Gastrodontella stenogyra</i> A. ADAMS	
7. ベッコウマイマイ科ヒメベッコウガイ	<i>Discoconulus snapiidum</i> REINHARDT	
8. ベッコウマイマイ科ウラジロベッコウ	<i>Urazirochlamys doenitzii</i> REINHARDT	
9. オナジマイマイ科	Family Bradybaenidae	

第6表 微小貝類構成比一覧表

種名	1		2		3		4		5		6		計		
	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%			
短貝	ヒメコザラガイ	0	0.00	0	0.00	7	0.51	0	0.00	0	0.00	0	600	7	0.19
	イボウミニナ	0	0.00	0	0.00	5	0.36	4	0.31	11	1.16	0	600	20	0.51
	ヘナタリ	0	0.00	0	0.00	1	0.07	0	0.00	0	0.00	0	600	1	0.03
	小計	0	0.00	0	0.00	13	0.94	4	0.31	11	1.16	0	600	28	0.75
	小計	1	1.69	0	0.00	7	0.51	1	0.10	0	0.00	0	600	9	0.21
鹹水産	ヘソコダガイ	0	0.00	0	0.00	3	0.22	1	0.10	0	0.00	0	600	4	0.11
	ウヒメカノコ	0	0.00	0	0.00	1	0.07	0	0.00	0	0.00	0	600	1	0.03
	シマハマツボ	0	0.00	0	0.00	164	11.83	18	1.53	0	0.00	10	355	192	5.15
	シケノコガイ科	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.11	0	600	1	0.03
	小計	1	1.69	0	0.00	175	12.63	20	2.03	1	0.11	10	355	207	5.35
汽水産	ミズゴマツボ	0	0.00	1	1.45	1	0.07	1	0.10	0	0.00	0	600	3	0.08
	カリザンショウガイ科	45	76.27	47	68.12	27	1.95	19	1.93	18	1.89	10	355	160	4.45
	小計	45	76.27	48	69.57	28	2.02	20	2.03	18	1.89	10	355	160	4.52
陸産	キセルガイモドネ	0	0.00	0	0.00	23	1.66	18	1.83	50	5.26	0	600	91	2.41
	マルカチョウジガイ	2	3.39	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	600	2	0.06
	オカチョウジガイ	0	0.00	12	17.39	637	45.96	612	62.30	612	64.42	92	32.62	1965	52.68
	ヒメコハクガイ	0	0.00	0	0.00	31	2.45	35	3.56	49	5.16	11	3.90	129	3.46
	コハクガイ	3	5.08	3	4.35	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	600	6	0.16
	キビガイ	0	0.00	0	0.00	24	1.73	34	3.46	46	4.84	18	6.38	122	3.27
	ヒメベッコウガイ	8	13.56	4	5.80	452	32.61	238	24.19	162	17.05	141	50.00	1005	28.94
	ウラジロベッコウ	0	0.00	2	2.90	0	0.00	1	0.10	0	0.00	0	600	3	0.08
	オナジマイマイ科	0	0.00	0	0.00	0	0.00	2	0.20	1	0.11	0	600	3	0.08
	小計	13	22.03	21	30.43	1170	84.42	940	95.53	920	96.24	262	92.91	3326	89.17
計	59	100.00	69	100.00	1386	100.00	964	100.00	950	100.00	282	100.00	5730	100.00	

第7表 陸産微小貝の含有率 (1000cm²当たりの個体数)

資料	体積 (cm ³)	個体数	含有率
1	9,000	13	0.14
2	18,000	21	0.12
3	30,000	1170	3.90
4	32,000	940	2.94
5	16,000	920	5.75
6	9,000	262	2.91

第8表 魚類種名一覧表

軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES	
1. サメ目	<i>Pleurotremata</i> sp.
硬骨魚綱 OSTEICHTHYES	
1. ニシン科マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i> TEMMINCK et SCHLEGEL
2. カタクチイワシ科カタクチイワシ	<i>Engraulis japonica</i> HUTTUYN
3. アユ科アユ	<i>Plecoglossus altivelis</i> TEMMINCK et SCHLEGEL
4. コイ科フナ属	<i>Carassius</i> sp.
5. コイ科	<i>Cyprinidae</i> sp.
6. ドジョウ科ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i> CANTOR
7. ウナギ科ウナギ	<i>Anguilla japonica</i> TEMMINCK et SCHLEGEL
8. スズキ科スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i> CUVIER
9. キス科	<i>Sillaginidae</i> sp.
10. アジ科ブリ	<i>Seriola quinqueradiata</i> TEMMINCK et SCHLEGEL
11. アジ科マアジ属	<i>Trachurus</i> sp.
12. タイ科クハタイ	<i>Acanthopagrus schlegelii</i> BLEEKER
13. タイ科	<i>Sparidae</i> sp.
14. ボラ科ボラ	<i>Mugil cephalus</i> LINNÉ
15. カマス科	<i>Sphyræna</i> sp.
16. ハゼ科マハゼ属	<i>Acanthogobius</i> sp.
17. サバ科サバ属	<i>Scomber</i> sp.
18. カレイ科	<i>Pleuronectidae</i> sp.

第9表 高蔵遺跡ブロック別魚骨数量表

種名	部位	地点						小計	計 (%)
		1	2	3	4	5	6		
軟骨魚類	脊椎骨			17	1	2		20	20 (2.3)
マイワシ	脊椎骨	1		12	97	274	5	389	389 (44.5)
カタクチイワシ	脊椎骨			11	33	2		46	46 (5.3)
アユ	脊椎骨		1					1	1 (0.1)
フナ属	脊椎骨			11		3		14	14 (1.6)
コイ科	眼眶骨					2		2	2 (0.2)
ドジョウ	脊椎骨		1					1	1 (0.1)
ウナギ	脊椎骨		1	29	1			31	32 (3.8)
	前上顎骨r			1		1		2	
スズキ	主髻蓋骨r						1	1	8 (0.9)
	脊椎骨	1	1	1	3		1	7	
キス科	脊椎骨	4	1		13	30		48	48 (5.5)
ブリ	前上顎骨l					1		1	3 (0.3)
	前上顎骨r					2		2	
マアジ属	脊椎骨			3		1		4	22 (2.5)
	鱗鱗		2	5	5	6		18	
クロダイ	前上顎骨l				1			1	1 (0.1)
タイ科	歯上骨				1			1	1 (0.1)
ボラ	脊椎骨				9	1		10	10 (1.1)
	尚骨l			1				1	
カマス	前上顎骨l			1				1	22 (2.5)
	前上顎骨r			1		1		2	
	脊椎骨				10	8		18	
マハゼ	脊椎骨		2		3	2		7	7 (0.8)
サバ属	前上顎骨l				2	2		4	31 (3.5)
	前上顎骨r					3		3	
	尚骨r				1			1	
	脊椎骨				7	16		23	
カレイ科	前上顎骨l					2		2	83 (9.5)
	前上顎骨r					2		2	
	歯骨l				1			1	
	眼眶骨					1		1	
不明	脊椎骨		4	6	18	47		77	133 (15.2)
	脊椎骨		11	10	112			133	
魚類小計		6	13	111	217	521	7	875	875 (99.9)

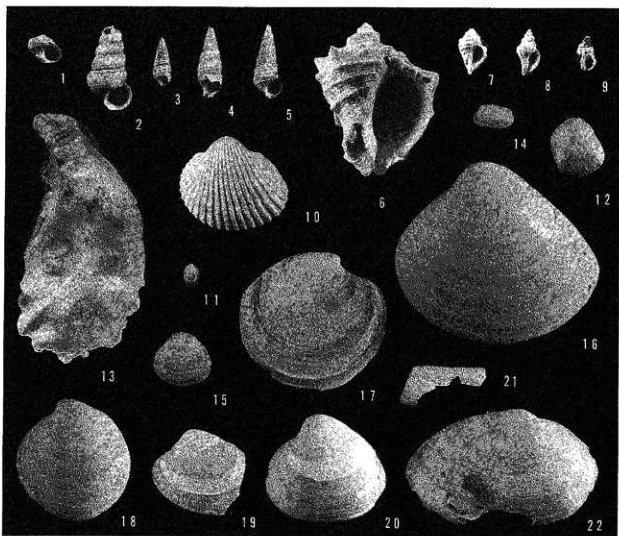


写真1 大型貝類 (実大)

1:スガイ, 2:フトヘナタリ, 3:カワアイ, 4:ウミニナ, 5:イボウミニナ, 6:アカニシ, 7:イボニシ, 8:カゴメガイ, 9:アラムシロ, 10:サルボウ1, 11:キサガイモドキ1, 12:ナミマガシワ1, 13:マガキ1, 14:ウネナシトマヤガイ1, 15:ヤマトシジミ1, 16:ハマグリ1, 17:カガミガイE, 18:オキシジミ1, 19:アサリ1, 20:シオフキ1, 21:マテガイ1, 22:オネノガイ1.

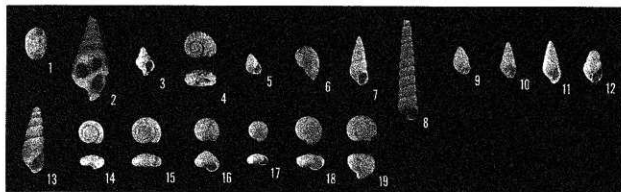


写真2 微小貝類 (3倍大)

1:ヒメコサラガイ, 2:ヘナタリ, 3:イボウミニナ, 4:シラギク, 5:ヘソカドガイ, 6:ウミヒメカノコ, 7:シマハマツボ, 8:タケノコガイ科, 9:ミズゴマツボ, 10:カリザンショウガイ科, 11:キセルガイモドキ, 12:マルネカチョウジガイ, 13:オカチョウジガイ, 14:ヒメコハクガイ, 15:コハクガイ, 16:キビガイ, 17:ヒメベッコウガイ, 18:ウラジロベッコウ, 19:オナジマイマイ科.

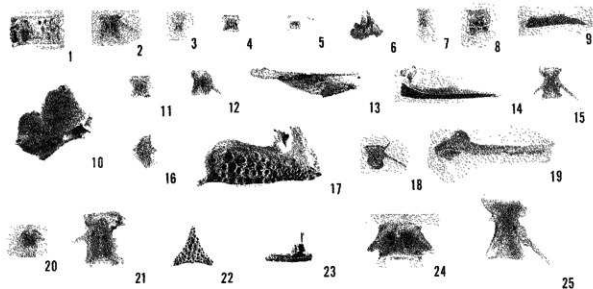


写真3 魚類 (10-13-14-23-24のみ実大, 他は2倍大)

- 1:軟骨魚頭骨椎骨, 2:マイワシ脊椎骨, 3:カタクナイワシ脊椎骨, 4:アユ骨椎骨, 5:フナ属骨椎骨,
 6:コイ科咽頭骨, 7:ドジョウ骨椎骨, 8:ウナギ骨椎骨, 9:同前上顎骨 r, 10:スズキ主軸莖骨 r, 11:同
 脊椎骨, 12:キス科骨椎骨, 13:ブリ属前上顎骨 1, 14:同歯骨 r, 15:マアジ骨椎骨, 16:同鰓鱗, 17:クロダ
 イ前上顎骨 r, 18:ボラ骨椎骨, 19:カマス前上顎骨 1, 20:同骨椎骨, 21:マハゼ骨椎骨, 22:カレイ科咽頭骨,
 23:同前上顎骨 1, 24:同骨椎骨, 25:サバ属骨椎骨

村木 誠

「尾張熱田貝塚の出土品や、最近近江滋賀村の大津宮址で発見せられたもの、如きは、かの希臘クリート土器中、クノッソスの遺品が特に精大で「バレス」式と呼ばれる、如く、弥生式土器中の「バレス」式と称し度い位の優品である。即ちその洒麗なる形態、豊富なる紋様の点などに於いて。」〔濱田1929〕濱田耕作が、弥生土器における「バレス」式について初めて言及したとき、その例とされたものの一つが高蔵遺跡（熱田貝塚）出土の壺であった。その後、赤彩のない大津宮址出土品は除かれ、この高蔵遺跡の壺に代表される赤彩、文様を持つもののみが「バレススタイル壺」と呼ばれることとなった。濱田が高蔵遺跡の資料を取り上げたこと自体は、高蔵遺跡の発見がこの地域の他の遺跡より古いということが理由であろう。しかし、その後増加した資料を見たとき、伊勢湾沿岸の遺跡で、この壺の誕生から消滅までがある程度連続的にたどれるのは、意外にも名古屋台地上の高蔵遺跡に限られること、高蔵遺跡では、数量的にも全期間にわたって多く出土していることに気付く。こうした点から、バレススタイル壺を考えるとときには、研究史的な意味だけでなく、高蔵遺跡の検討が不可欠であることが知られる。

ところで伊勢湾沿岸では、バレススタイル壺と同時期に、赤彩、文様で飾られた壺以外の土器がある。これらを「バレススタイル」と呼ぶか否かは議論がわかれるが、文様自体や文様と赤彩の組合わせという特徴はバレススタイル壺との共通性を十分想起させる。その土器とは、高杯をはじめとして、直口壺、器台といった器種であり、壺とは用途が異なる。しかし、赤彩、文様は、土器の実用的機能とは関わらない上、それぞれの器種において、同時期に、同じ器形で無文、無赤彩のものがある以上、文様、赤彩を取って施すには共通の意図があると考えることが必要だろう。また逆に、これらの赤彩と文様で飾られた土器群をまとまりとして考えることで、その意図や背景が明らかになるのであれば、それらをまとめることにためらう理由はない。こうした理由で、私は赤彩、文様によって飾られているという指標による分類が有効であると見え、器種を超えたこの土器群を「バレススタイル土器群」と呼ぶことにする。以下では、高蔵遺跡の資料を中心に、バレススタイル土器群の動向について若干の検討を行う。

1. 土器様式の変遷

バレススタイル土器群が存在する時間としては、弥生時代後期から古墳時代初め頃までである。この時期の土器様式の変化については概要〔永井・村木2000〕を示したことがあり、高蔵遺跡の資料についてもおおよそ同様なものとして理解することができる。ただし、汎用性を意図したため当然個別の遺跡での事例とは一致しない点がある。また、本稿ではバレススタイル土器群を中心に検討するが、非バレススタイル土器群との関係を検討することが不可欠であるから、土器様式全体の推移の理解が不可欠となる。そこで、高蔵遺跡の良好な資料を紹介しつつ、高蔵遺跡における土器様式のおおよその動向を示す。なお、バレススタイルの始まりを考えるために中期の後葉からはじめる。

Ⅲ様式

Ⅲ様式は、凹線文系土器群の出現から消滅までの土器様式であり、従来高蔵遺跡の資料をもとに設定された「外土層式」「高蔵式」という名称で呼ばれた土器様式である。公表されている資料では、前半の資料としてB地点溝1及び溝2、人類史研究所調査地点の1号溝、7号溝などがあり、後半については14次

SD2の資料がある。IV様式の前半は髷描文系主体でわずかに凹線文系が含まれ、後半は逆転して凹線文系主体となる。前半は、あまり関わらないので省略し、IV様式後半を見ておく。14次SD2では、壺も甕もすべてが凹線文系となっている。甕の口縁の端部や台の端部に対するヨコナデの有無や面の形成の仕方が、この様式からVI様式にかけての時間的指標になるものと思われるが、この資料ではヨコナデが施されたものは少ない。甕の口縁部は丸く終わっている。細頸甕は数量的に豊富である。太頸甕は個体数が少ないが、直線文と波状文で飾られているものがある。この資料中には無文の壺は存在しない。

V様式

この様式の土器群は遺跡ごとに異なる。広い範囲で斉一的な「様式」ではなく、IV様式とVI様式の間という消極的な意味合いが強い。指標としては、甕の製作技術が変化すること（ヨコナデによって面を持たせる口縁部のつくり、胴部タタキ痕の消滅など）、壺における凹線文系の減少、壺や台付鉢などへの赤彩の開始などを挙げることができる。こうした過渡期に遺跡の特徴が顕著になるが、高蔵遺跡では今のところ全く不明である。次のVI-1様式の資料とした1次D3の取り扱いが難しい。

VI様式

VI様式の始まりは、個人用の食器の可能性が高い、容量の小さな供膳器の出現を指標としている。前葉の資料として1次D3、34次SB17などがある。VI様式は「山中式」と重なるところが多いが、前葉はまだ外反口縁の高杯が普遍的にはみられないほか、後に検討するバレススタイルも、全面赤彩や凹形の斑点状の赤彩が壺や高杯に見られ、定型化した塗りわけは達成されていない。しかし、IV様式末に盛行した凹線文系の壺や細頸甕などはなくなるほか、高杯にも小型のものが出現しており、土器様式は一新されている。甕は胴部にタタキの痕跡がなく、口縁部にはヨコナデによる凹面が形成され、左上がりの刺突が施されている。しかし胴部外面はナデで整えられるなど、この様式の典型的なものとはやや異なる。34次調査で中国製の鏡と伴った土器は、端部がヨコナデはされているが、明瞭な外傾面を持たない甕の台部、外面全面赤彩の高杯脚部など、この時期の特徴を典型的に示している。D3よりは新しいと考えるが、VI-2様式とする明確な材料もない。VI様式の前葉は、西日本からの新たな土器を受容すると同時に、それに赤彩を施すといった在地化が生じている。こうした変化の様子を跡付けられる遺跡は限られると思われるが、高蔵遺跡はその中の一つである。

中葉になると、外反口縁高杯も一般化し、直口壺、定型的なバレススタイル壺なども見られ、典型的な「山中式」と言えるものになる。この様式の資料としては、沢上二丁目HSB5、夜寒地区SD04、5次SD01などがある。壺のほかに高杯、器台、直口壺にバレススタイルが認められる。VI様式の中葉はバレススタイルのもっとも多い時期である。後葉は現在のところ良好な資料はない。D地点の環濠らしい溝からの出土資料のうちにこの時期の資料が見られる。時間の指標としやすい高杯は、他の遺跡の事例ではVI-4様式頃から無文のものが増え、VI-5様式で外反から内湾へという変化を遂げるのであるが、高蔵遺跡ではこの様子を跡付けられる資料はほとんどない。これにはまだ資料不足であるという可能性のほかに、この遺跡ではそうした推移を終ずして急激に形式の交替のように生じた可能性が考えられる。高蔵遺跡のVI様式資料は、前葉から中葉が多く後葉が少ない。これは他の名古屋台地の遺跡の動向とは逆である。

VII様式

VI-1様式についてもD地点の溝資料に見られる。D区1層には口縁部が外折するバレススタイル壺と長

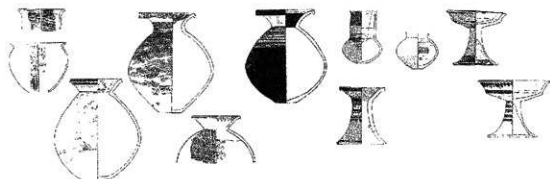
IV 15 様式



VI 様式前葉



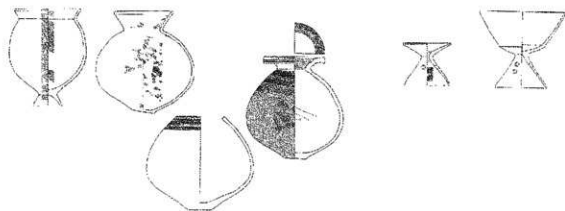
VI 様式中葉



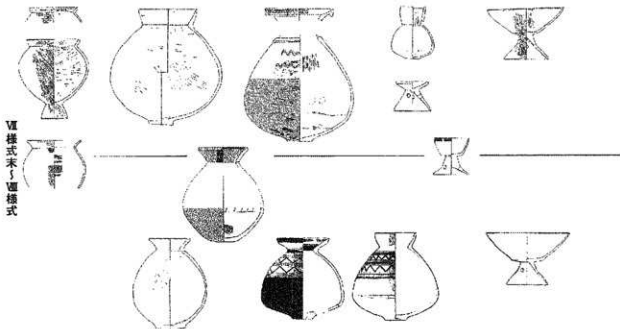
VI 様式後葉 / VII 様式初



VII 様式中頃



第1図 土器様式の動向(1)



第2図 土器様式の動向(2)

脚の内湾口縁高杯があり、Ⅴ-1様式の指標をみたす。高杯は文様、赤彩を失い、杯部と脚部が内湾するものに交替している。ただ、壺などはあまりはっきりせず、資料不足である。

Ⅴ-2様式になると資料は増加する。1次D12、4次SD04、31次方形周溝墓、D地点T、II A区南(部)拡張区第1層出土の資料が該当する。高杯は脚が短くなり、画一的な形態のものが多く出土している。時間的にはS字甕が存在するが、高森遺跡では確実な資料はない。

Ⅴ-3様式は次の様式(私は古墳時代とは考えないので、ここでは便宜的にⅥ様式と呼んでおく)との区別が難しいのでまとめて扱っておく。ここで言うⅥ様式は、S字甕B類の登場、小型器台等の出現以降で、S字甕B類新段階が登場し、壺のなかでのS字甕の比率が急激に高くなるまでの様式である。

Ⅴ-3様式からⅥ様式の資料としては、D3上面上器群、34次SB03上面上器群、D地点C区第2層などがやや時間的に溯る特徴を示し、五本松SZ10、SZ2、8次SD01などが後出の特徴を持っている。新しい一群はほとんどバレススタイル壺しかないが、前者では壺のなかにS字甕や受口口縁壺などが多い。この様式でも名古屋台地上の遺跡ではS字甕が出土することは多くないのであるが、高森遺跡においては相対的に多く見られることが特徴である。

2. バレススタイル土器群の動向

土器様式の大きな流れについて述べたので、次にそのなかでのバレススタイル土器群の動向を考えたい。数量的に豊富で、存在する時間も長い壺から行すが、その作業にあたって対象とする土器を定義しておく。バレススタイル土器群は、形態や赤彩と文様の関係など、特にその出現当初には極めて多様であり、これをすべて取り入れるための定義はできるだけ緩やかなものがよい。それはおそらく「赤彩と文様が施された土器」というものであろう。更に、後述するようにバレススタイル壺の出現を考える時には、文様を持たず赤彩だけの壺の存在も忘れることはできない。文様はそれ以前の壺と変わらないため、赤彩がな

されることを重視し、先の定義を更にゆるめて、「赤彩をもつ土器」としておく。それゆえ、バレススタイル壺の検討では、赤彩のある壺が対象となる。ここでは、その対象だけを取り出して分類するのではなく、この時期の壺全体を分類した上で、その内のどれがバレススタイルにあたるかという順序で記述する。

2-1 壺の動向

口縁部の形態と胴部文様を分類しておこう。

◎ 口縁形態

1. 頸部が緩く屈曲して外反する単純口縁。
2. 頸部ではっきり折れて外反する単純口縁。
3. 口縁部内面中位で外折したり、段になるもの。
4. 口縁部内面中位に稜を持ち、その上下位が内湾するもの。端面に棒状浮文を持つ。
5. 4が退化し直線的になるもの。

◎ 胴部文様

- A. 無文
B. 直線文+波状文（これに斜位刺突が加わることもあり）
C. 直線文+斜位刺突+最下段に扇形文又は円形刺突
D. 直線文+鋸歯文（+ヘラ刺突）

基本的な分類は、この二つの属性の組み合わせによって行うことができ、弥生時代後期から古墳時代初期の壺は、若干の例外を除けば次の6つのまとまりに分かつことができる。

- I. 口縁形態が1ないし2で、文様などを全く持たない（A）もの。
- II. 口縁形態が1ないし2で、胴部文様がBのもの。
- III. 口縁形態が1ないし2で、胴部文様がCのもの。
- IV. 口縁形態が3で、胴部文様がCのもの。
- V. 口縁形態が4で、胴部文様がDのもの。
- VI. 口縁形態が5で、胴部文様がDのもの。

これらの6つの群については、これまでの研究史 [大参1968] [浅井1986, 1987] [石黒1997] で論じられている通り、口縁形態の変化の方向（1から5へという方向）、胴部文様の変遷（B、C→Dという変化）から判断すると、文様を持たないIを別にすると、(II→III)→IV→V→VIという時間的な変化が予想される。以下では、それぞれのまとまりについてもう少し詳細な検討を行う。あわせて、高蔵遺跡での出土例における共伴状況も見ていきたい。なお、赤彩の有無に言及するので、赤彩の仕方を、 α ：全面赤彩、 β ：赤彩で文様を描いたものや、円形の斑点状など一見不規則的なもの、 γ ：一定の幅、特定の部位を単位として塗り分けるもの、と分類しておく。

Iは、中期に見られる円線文系の太頸壺が文様を失うことによって出現する。高蔵遺跡では今のところ中期の末に無文の壺は見られない。Iには赤彩が施されたものがあり、赤彩は α 又は β である。1次D3に見られる赤彩壺は、残り具合からみて無文であると判断している。赤彩 β の壺も鋸歯文様は持たない。他の壺との共伴状況は、IIからVIまですべてと共伴する。赤彩を持つものは、II、IIIと共伴するほか、V又はVIにも共伴するらしい。

Ⅱも中期の太瀬壺から系譜がたどれるものである。Ⅰ縁内面は無文、扇形文、波状文であり、羽状刺突は施されない。頸部突帯はないものが多いが、円形刺突を施した突帯をもつものがわずかにある。高瀬遺跡の瓦状の資料中には、Ⅱで赤彩されたものは存在しないことが注意される。Ⅰ、Ⅲを伴う。壺を多く含む1次D3の資料で見ると、波状文が施されるものは多いが、その中には赤彩されるものは全くない一方、赤彩をもつものには文様がない、という対照的なあり方を見て取ることができる。

Ⅲの胴部文様Cは中期には見られない。Ⅰ縁部の形状も中期以来の1ではなく、2が主体である。Ⅰ縁部内面は、無文のものも僅かにあるが、基本的に羽状文が施されている。頸部はほとんどのものが突帯を持たない。この中には台を持つものがある。Ⅲには赤彩を持つものと持たないものがあり、赤彩されるものは基本的にγである。赤彩を持つものの方が数的には多い。Ⅰ、Ⅱと伴うが、Ⅱと伴うものは口縁形態1、胴部に扇形文を持つ。赤彩を持つものは1とのみ共伴している。

Ⅳはすべて赤彩γを持つ。すなわち、口縁形態3のもので赤彩のないものはない。口縁部の形態は多様で、もう少し細分の余地があるようにも見える。Ⅰ縁部内面上位は羽状刺突ものが中心であるが、直線文のものもある。胴部の形態は、下胴部が張るもの他に球胴のものもある。また、斜位刺突の原体には、壺のほかには貝殻も用いられている。台を持つものも存在し、形態、文様などの点で多様さを残している。ただし、赤彩はすべて塗り分けられたγである。確実な例ではⅠとのみ共伴し、その他の文様壺とは伴わない。しかしD地点のT.Ⅱ A区南部拡張区第1層のようにⅣを含む資料と同時期壺の資料には文様壺が含まれるので、文様壺はわずかに残存するらしい。

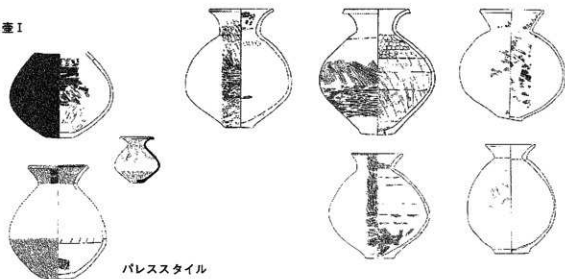
Vもすべて赤彩γである。口縁端面には何れも凹線ないしは擬凹線を持ち、棒状浮文が必ず施される。頸部には断面台形状で赤彩が施された突帯が必ずある。胴部の露出文は櫛又はへら描きであり、貝殻のものは見られない。口縁部内面上位はすべて羽状刺突であるが、段数や最下位の刺突の有無などに微妙な個体差を残している。Vに属するものはそれまでの壺とは異なって、形態、文様などが比較的斉一的ではあるが、それでもまだ口縁部文様や、胴部の文様や突帯の段数、胴部文様最下段の刺突文など、小さからぬ個体差が残っていることは認めなければならない。また、この中には、色調が白色を呈するものと褐色を呈するもの二者がある。今はこの二者が何に対応するかは不明であるが、前者がより斉一性が高く見える(注1)。この壺は、Ⅰとのみ共伴する事例と、Ⅰ及びⅥと共伴する事例があり、この二つの共伴の仕方時間差を表しているものと考えられる。

ⅥはVから退化したものであり、すべてが赤彩γを持つ。Ⅰ縁端部からは棒状浮文が見られなくなり、頸部の突帯も消失する。それ以外の点では一様でなく、Ⅰ縁形態も個体毎に異なる。Vが比較的斉一的なことと比べるとバラツキが大きい。Ⅰ、Vと共伴するほか、例外的な個体であるが、単純口縁の壺に文様Dを施したものとも伴っている。

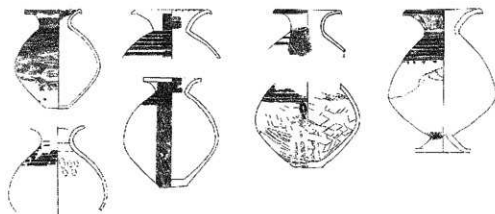
以上まで壺の各群について見てきたが、バレススタイル壺を、赤彩を主たる指標として定義すれば、上記のⅠ、Ⅲの一部とⅣ、V、Ⅵのすべてがバレススタイル壺である。以下ではそれぞれをバレススタイル壺(バレス壺)Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、V、Ⅵというように呼びたい。バレス壺と赤彩がないものもともに存在するⅠ～Ⅲについては、赤彩の有無に対応して細部の形態や調整方法などの違いはなく、赤彩の有無のみが異なるようである。

バレス壺の変化と共伴状況をもとに、弥生時代後期の壺の動向を整理しておこう。今述べた共伴状況

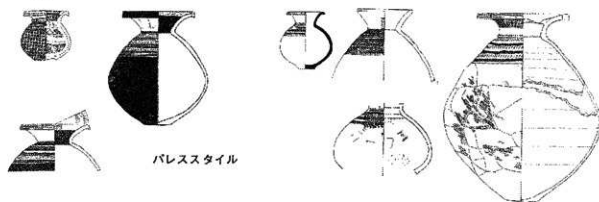
壺Ⅰ



壺Ⅱ

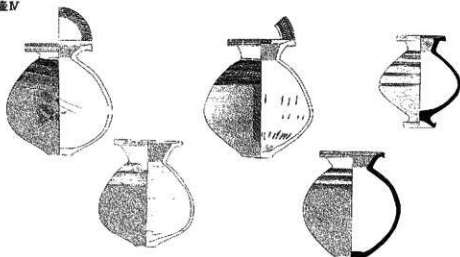


壺Ⅲ



第3図 弥生時代後期の壺(1)

壺M



壺V



壺VI



第4図 弥生時代後期の壺 (2)

型式 時期	I	II	III	IV	V	VI
	P	P	P	P	P	P
1期	■	■	■			
2期			■			
3期				■		
4期					■	
5期						■

第5図 壺の共存状況（P：バレススタイル）

から、表のようにまとめられる。そして、これをもとに壺の動向は5つの小期に分けて考えたいと思う。すなわち、バレス壺Ⅰと無赤彩のⅡ・Ⅲの時期、バレス壺Ⅲと無赤彩Ⅱ・Ⅲの時期、バレス壺Ⅳの時期、バレス壺Ⅴだけの時期、バレス壺ⅤとⅥが伴う時期である。これを順に1から5期とする。それぞれの時期の評価を行う前に、この壺を基軸としてその他の器種のバレススタイルの動向を見ておこう。

なお、壺の動向による区分は、1期がⅥ様式初め、2期がⅥ様式中頃、3期がⅥ様式後葉からⅦ様式中頃、4期がⅦ様式末からⅧ様式、5期がⅧ様式以降と比定できるだろう。5期まででバレス壺は消滅するが、高蔵遺跡では後続する資料がないため、5期の終りについては不明である。

2-2 その他の器種の動向

その他の器種のバレススタイルはそれほど数量的に多くないので、壺で設定した小期より細分することはできない。そこで、壺の小期にあわせて各時期の状況を整理しておく。

1期については、バレススタイルと呼んでよいのは、1次D3においてプランデーグラス形高杯の祖形のような形態のもの、同じ遺構から出土した台付鉢とでもいうようなものと法量の小さな高杯があるのみである。この台付鉢には、鉢の外面に節による波状文、直線文が描かれている。この個体のみ赤彩と文様が共存しているが、台の形状が壺の台に類似するなどやや特異な資料である。これらはいずれも供膳用の土器であるが、中期の高杯と比べると法量が小さく、いわゆる個人用の食器である可能性が高い。資料は少ないが、「個人用食器」と思われるものはすべて赤彩が施されていることに注意しておこう。バレススタイルとしては、赤彩 α 、 β であり、 γ がないのは壺と同様である。

次の2期はバレススタイルがもっとも多く見られる時期である。その器種は、高杯、器台、直口壺である。それぞれの器種で、赤彩されるものとされないものがある。そして、バレススタイルの多くは定型的な塗り分け γ であるが、無文全面赤彩ものもある。文様は、高杯の杯部に関しては波状文、高杯や器台の脚部、直口壺の口縁部については、斜位刺突と直線文からなり、文様も壺と共通している。また、それぞれの口縁や脚部部の形態は、壺のそれに近く、壺との共通性の高さを示している。

2期と3期の間にバレススタイル土器群には大きな画期がある。すなわち、2期に見られた高杯、器台などにおいてバレススタイルの個体が全く見られなくなる。これらの器種についてはバレススタイルがみられなくなるだけでなく、形態も変化を遂げている。高蔵遺跡においてはここに少し時間的な隔りがあり、詳細に跡付けることはできないが、2期までの口縁や脚が外反する形態から内湾するものへという変化である。これらは2期のバレススタイルのものと同様の組列上につながるわけではなく、途中で主流となる形式が交替した結果であるが、しかしバレススタイルの消滅をその形式の交替だけで説明するのは不十分である。これらの新しい形式の土器も赤彩を施す意図があればできるからであり、このバレススタイルの消滅には、形式が交替したからという以外に赤彩や文様を放棄した積極的な理由があるように見える。そしてこのバレススタイルのものを失った高杯や器台の口縁の端部には、2期に見たような面が形成されることはなく、壺との類似性を失う。内湾する脚部や口縁部の形態等を見ると、むしろ壺の台に近づいているように見える。もう一点注意しておきたい点は、Ⅵ-2様式の特徴で述べたとおり、D地点の資料で高杯、器台の数量が急増し、それぞれはバラツキが小さく、類似性も高いように見える点である。

4期・5期はほぼ3期と同様であり、バレススタイルは壺以外に基本的に存在しない。

壺で設定した1～5期は、単に壺の順序を示すだけでなく、バレススタイル土器群の動向の画期と対応させることが可能である。そこで、改めてそれぞれをバレススタイル1～5期として設定する。各時期の特徴を以上を要約すれば以下にならう。

【バレススタイル1期】

バレススタイル壺Ⅰ、ブランドーグラス形高杯、小型の高杯。高杯は数量少なく、無赤彩のものはない。

【バレススタイル2期】

バレススタイル壺Ⅲ、高杯、器台、直口壺。壺も含めて同一の器形を持つもので、バレススタイルとそうでないものがほぼ同程度存在する。高杯などの数は多くない。

【バレススタイル3期】

バレススタイル壺Ⅳ、高杯、器台、直口壺はバレススタイルがなくなる。以後は基本的にバレス壺のみ、非バレススタイルの高杯の数量増加。

【バレススタイル4期】

バレススタイル壺Ⅴの出現。

【バレススタイル5期】

バレススタイル壺の数量が増加。

3. 各小期の評価

以上によりバレススタイル土器群の動向を述べることができた。ではこの小期のそれぞれをどのように評価し、解釈すべきであろうか。以下では、それぞれにおけるバレススタイル土器群の出土状況などとあわせて若干の検討を行う。

最初に1期におけるバレススタイルの始まりについて考える。まずバレス壺の成立である。高蔵遺跡の資料を見る限り、壺に対する赤彩は文様壺ではなく、無文壺への赤彩 α 、 β によって始まるようである。1期には、ⅡやⅢも存在するがこれらには赤彩が施されていない。Ⅱは、他の遺跡の事例を見るとバレス

スタイルとなる個体があるはずであるが、高蔵遺跡には今のところ存在していない。赤彩の始まりが、Ⅰへの全面赤彩に始まるように見えるのは、この欠如による見かけ上の現象という可能性もあろう。しかし、仮に高蔵遺跡にバレス壺Ⅱが存在しても、Ⅰ期の一括資料中には無赤彩のⅡがあり、これと共伴してバレス壺Ⅰがある事からすると、バレス壺Ⅰに先行してバレス壺Ⅱが存在する可能性は低いと思われる。こうしたバレス壺出現の想定は、今後の資料の増加によって変わることもあり得るが、高蔵遺跡では既にⅡは赤彩出現以降のものが相当数出土しており、これに赤彩を施したものが無いのは単なる偶然とは考え難い。もちろん他の遺跡では存在するが、それは高蔵遺跡においてこの事象を無視して良い理由にはならない(注2)。このⅡに施された文様はⅣ様式以来の文様であるが、新たに登場する赤彩は、出現当初にはそれとは相容れないものであった可能性を考えてみなければならない。そう考えるならば、壺に対して赤彩が施されるようになるのは、文様を施すべき部分への、文様とは相容れないものの採用なのであり、文様の重要性の相対的な低下ということができよう(注3)。文様のない壺Ⅰがこの時期に出現することも同じ脈絡で理解できよう。文様と相容れない赤彩の出現と文様の欠落、これは同じ事、すなわち文様・文様壺の社会的な意味の低下に対する異なった対応であると見ることが出来る。

更にⅠ期のバレススタイルについて考えておかねばならないのは、この時期になって新たに出現した高杯などの供膳用の食器がほぼすべて赤彩されていることである。これらの出現の経緯は未だ明らかとは言えないが、多くが西日本から波及してきたことは間違いない。しかし、赤彩はこの地域で新たに加えられた変化とみなした方が良く、ここに赤彩を施すことの意味の一端が表れている。すなわち、この新出の個人用食器の実用的、非実用的機能と赤彩が密接な関係があったのではないかと予測される。

出土状況に目を転じると、Ⅰ期の資料が出土した方形周溝墓Ⅰ次D3は、中期末の14次SD2から時間的には大きく隔たっていないと思われるが、出土する土器の器種構成は著しく異なっている。すなわち、Ⅰ期では壺、高杯などバレススタイルを持つものが主体であるのに対し、中期末では甕と壺が相半ばしている。バレススタイルの出現との因果関係はここではおくとし、この時期には周溝墓で行われた行為そのものが変化したと考えることは許されよう。この器種構成はⅡ期以降にも継続していく。

Ⅰ期のバレス壺について上のように考えると、ではⅡ期になって何故バレス壺Ⅲが登場し、相容れないはずの赤彩と文様の組み合わせが成立するのかが問題となろう。ここでも他の器種の動向とあわせて考えてみよう。すなわちこの時期には、文様壺に赤彩が施されるようになったというだけでなく、高杯には杯部に波状文、胴部に斜め刺突などの壺と共通する文様が施されるようになる。つまり、バレススタイルについてみると、伝統的な文様壺に赤彩が施されるというだけでなく、新出の個人用食器が伝統的な文様を持つ、という伝統的なものと新出のものが相互に融合する動きがみられる。これは、新しい器種や赤彩といった新出の特徴が定着し、新来であるということとは別の意義付けがなされたと見ることが出来るのではないだろうか。それは次のⅢ期以降、無赤彩の文様壺が極めて少なくなり、文様は赤彩と結びついた個体においてのみ残存することからもうかがえよう。なお、この時期にバレススタイルが存在する甕、高杯、器台については口縁端部の処理の仕方など、製作に関する技術という面でも相互に共通性が高い。

このⅡ期のバレススタイルは、Ⅰ期と同様方形周溝墓から出土する例が多いが、住居跡から出土する事例も見られる。沢上二丁HSB5や34次SB15で少数のバレススタイルの高杯が出土している他、高蔵遺跡ではあまりよい事例に恵まれないが、たとえば同じ名古屋台地上の瑞穂遺跡などでは、バレス壺が堅穴住居

から出土する例が何例ある(注4)。こうした事例からは、バレススタイルを方形周溝墓や「祭祀」とのみ関連付けることの不十分さがうかがえるのであり、バレススタイルの果たした機能について、状況に応じた検討が必要であることを示している。

次の3期には高杯、器台、直口壺にバレススタイルが全く存在しなくなる。一方でバレス壺は資料が増加している。赤彩を施すことに意味を見出す立場からすれば、壺はそのまま赤彩されつづけるわけであるから、赤彩をすることの意味が変化したのではなく、高杯、器台、直口壺という器種の側に変化があったと考えてみる必要がある。これらの器種については、先述したように形式が交替しているものがあるが、法量に大きな違いはないから、実用的機能ではなく、非実用的機能や用途(使用方法)に変化があったのだろう。そういう目で見てみると、Ⅲ様式の資料として紹介したD地点で、器台、高杯が数多く出土していることが注意される。この資料の性格はわからないものの、高杯、器台の絶対量が増加したことを示している。これらの高杯、器台は、2期の高杯とは異なり、形態、文様の多様性が失われ、画一化していることも指摘した。すなわち、これらの器種におけるバレススタイルの消滅は、画一化の進展とともに数量の増加を伴っているのである。ここからは、バレススタイルは、数の増加と画一化とは反対の意味を持っていたのではないかと推測する事ができる。また、高杯、器台については2期とは異なり、端部の処理などに壺との共通性はなくなり、内溝する脚部の形態やその端部は、どちらかといえば壺に近くなっている。作り方からもこれらの器種の側に変化があったことがうかがうことができる。

一方、この時期に見られるバレス壺Ⅳについては、口縁形態が多様だけでなく、口縁内面上位の文様も直線文と羽状文がある等、個体差が残っている。口縁部の形態が外折するものと有段になるもの、口縁内面上位が直線文のものと羽状刺突のものなど多様であることが特徴であると考えた方がよいだろう。高杯、器台とは対照的な変化と言える。すなわち、多様なバレススタイル土器と画一的な非バレススタイルという対比が可能のように思われる。バレススタイル壺の出土状況としてはやはり方形周溝墓からの例が多いが、環濠からも出土している。

4期のバレス壺Ⅴは、口縁内面の文様は羽状刺突、端面には棒状浮文を必ず持ち、頸部外面には赤彩のある突帯を持つなど、この壺の組列の中では斉一性が高。しかし、鋳文の段数、胴部の突帯の有無等に違いを見せる。この時期に現れるS字窓が、ハケメの施し方まで斉一的なのは対照的であり、バレススタイル土器は本来個体差の大きいものであると見てよいだろう。出土状況はやはり周溝墓事例が多いが、34次調査では住居跡と思われる遺構からも出土している。

5期のバレス壺Ⅵは、前型が退化したものであるという性格が強い。棒状浮文、頸部の突帯、胴部下段の刺突などが欠落する。退化の方向にあまり共通性はなく、形態は極めて多様である。数は多いものの複雑で、これはもはやバレス壺を製作し、使用することの意義がなくなりつつあることを示している。出土状況でも、1基の方形周溝墓から複数のバレス壺が出土する例が多くなっていることが注目される。

4. バレススタイル土器群の意味(予察)

はじめに述べたように、バレススタイルである事は土器の実用的な機能には関係がない。バレススタイルしか存在しない壺Ⅴ、Ⅵを除けば、法量、形態、作り方などは非バレススタイルのものと変わるところがない。土器の実用的な機能としては異なるところが無いわけだから、敢えてバレススタイルの土器を用

いる理由は、その非実用的な機能に求められるはずである。いわばバレススタイルの土器を用いることで表現される何らかの意味があった、と考えられる。本論ではそれを理解するために、土器群の動向や出土のしかたを検討してきた。最後に、これまでの検討からバレススタイル土器群の意味することについてまとめておきたい。しかし、これは高蔵遺跡の事例だけをもちに論じられる問題ではなく、今述べた動向の普遍性の検証から行わねばならない。それは本稿の意図を越えているため別稿に譲るとして、高蔵遺跡の事例から推測されることを述べ、今後の更なる検討の材料としたい。

バレススタイルのもっとも重要な属性である赤彩は、壺では無文のものに対して行われるから、その出現当初は伝統的な壺の文様とは相容れないものであった可能性を指摘した。ところで中期の壺の文様が持つ意味について都州比呂志は次のように述べる【都出1982】。「中期の土器文様においては、(中略)地域単位の厳格な約束が存在する。おそらく製作者は(中略)その属する集団内の施文手法の規範を忠実に守っていたと考えられ、「土器の施文は共同体規制の一つの表現形態である。これはいわば文様が「共同体」の、集団としてのアイデンティティの表現であった可能性を指摘しているといえるだろう。都出が対象としたのは近畿地方の事例であり、高蔵遺跡を含むこの地域にも同じ説明が可能かどうかは検証が必要であるが、西日本から受容した凹線文系土器を用いたこの地域にも敷衍可能な説明と仮定しておこう。先に述べたように、赤彩がこうした文様の性格と相容れないものだったとすれば、それは「共同体」「集団」ではなく、いわば「個」のアイデンティティを表す個性の強調、あるいは集団内での示差的表现であったと思われる【Wiesner1988】。それはただでさえ個性を強調しやすいと見られる個人用食器に最初に赤彩がなされたことと矛盾がない。この個人用食器は、出土状況のみならず住居でも用いられているが、バレススタイルのものは数が限られ、すべての成員が用いたとは考え難い数量である。限られた人のみが用いたとすれば、この食器を使用する事が、個性を強調し、「序列」や「階層」についての示差的な機能を果たしたことを示している(注5)。こうした器種では、バレススタイルがなくなると同時に個性差が消失するとともに数が増えることもそれを支持する。2期以降バレススタイルの土器において赤彩と文様が共存するようになるのは、赤彩ではなく、文様の意味の変質であることは言うまでもない。出土状況の検討で見た通り、バレススタイルの出現と同時に方形周溝墓での土器の器種組成が一変するのも単なる偶然ではなく、赤彩の出現や土器の文様の意味の変容をもたらした変化は、周溝墓における行為の変化をも伴っていたと見るべきであろう【村木2003】。

最後に、きたる古墳時代に向けて、「序列」「階層」の差がより激しくなるはずのバレススタイル4期・5期で、壺を残してバレススタイルが消滅してしまう理由を考えておく必要がある。結論から言えば、それはバレススタイルによって示される差がなくなったことを意味しているのではなく、差が顕示されなくなった、と理解すべきである。ここで非バレススタイルの土器へと目を転じると、4・5期は多様な壺が存在し、特にS字壺といった実用性だけでは説明できないものも見られる。こうした壺は使用する単位(住居であるならばその成員)にその集団を意識させる働きがあったと私は考えており、S字壺などはその性格が特に強かったものと思う。こうした壺が用いられるのも、差異を強調するはずのバレススタイルが4期になって普遍的な特徴を持つようになり、5期には数量も増加し、意義を失っていく事もともに、「集団」や「共同体」が意識され、強調される時代を示しているものと思う。

おわりに

本稿では高蔵遺跡でのバレススタイル土器群の動向を考えた。壺だけを取り上げるのではなく、その他の器種も含めたバレススタイル土器群を単位とし、それを更に土器様式の中に位置づけることによってそのもつ意味を明らかにしようとしてみた。しかし、壺などのバレススタイルのない器種についてはほとんど触れることができなかった。個別の土器ではなく、土器の関係を問題とする以上、そうした器種についての検討が不可欠であり、今後の課題とした。

また、この時刻の土器については「地域」を単位とするのではなく、それを構成した当時の「集落」単位で考える必要を感じているため、今後は他の遺跡について同様な検討を行い、その動向をバレススタイルに関しては基準となり得ると思われる高蔵遺跡と比較したいと思う。

<注>

- (注1) 浅井1987) においてバレス壺の「白色」志向について述べられているが、これが該当するのはバレス壺の一部に過ぎない。
- (注2) 「大参1968」は、赤彩の開始が本論IV様式の壺に始まると述べる。おそらく【杉原・小林1989】に掲載されたもの(PL55-131)などが意識されていたと思われるが、その後増加した資料はその想定に否定的である。
- (注3) 基本的に文様部には赤彩しない赤彩も同じように評価できるのかもしれない。
- (注4) 瑞穂遺跡の2次4号住居や5次SB02・03等では1点ずつバレス壺が出土している。
名古屋市教育局委員会 1982 「瑞穂遺跡発掘調査報告書」
服部哲也 2000 「瑞穂遺跡(第5次)」『埋蔵文化財調査報告書34』名古屋市文化財調査報告46 名古屋市教育局委員会
- (注5) バレススタイルのものは、実用的な個人用の食器ではないとすることもできる。しかし、瑞穂遺跡2次4号住居のように、非バレススタイルのものとともに出土する例があるが、用途の違いを示す材料はない。

なお、各調査の報告については、本書報告を参照して頂きたい。また図の出典は各報告および【杉原・小林1989】である。

<参考文献>

- 濱田耕作 1929 「日本の古代土器」『史前学雑誌』第一巻第四号【濱田耕作著作集、第三巻 同朋舎 1989】に再録。
- 大参義 1968 「弥生式土器から土器へ—東海西部の場合」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』47
- 藤山比呂志 1982 「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
- 浅井和宏 1986 「<高尾式土器>について」『欠山式土器とその前後』第3回京海埋蔵文化財研究会
- 浅井和宏 1987 「『バレス・スタイル壺』小考」『マージナル』No7 愛知考古学談話会
- Polly Wiessner 1988 *Style and changing relations between the individual and society*
The Meanings of Things. Material Culture and Symbolic Expression LiIodder (ed.) Unwin Hyman
- 杉原莊介・小林行雄編 『弥生式土器集成・本編(合本)』1989 東京堂出版
- 石黒立人 1997 「尾張地方における弥生時代後期の土器編年」『第5回春日井シンポジウム資料集』
- 永井安幸・村木誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の編年と稲年』東海編 木月社
- 村木誠 2003 「弥生時代の高蔵遺跡」『埋蔵文化財調査報告書46』名古屋市文化財調査報告60 名古屋市教育局委員会

付論3 高蔵遺跡第1次調査出土の前期弥生土器について

—「類型」組成比率からの検討を主題として—

脇田 真也

はじめに

今回、1981・1982年に行われた名古屋市教育委員会による高蔵遺跡第1次調査出土の前期弥生土器（以下、1次調査資料と略す）を整理させていただく機会を得た。しかし実際に作業ができたのは短期間であり、土器の接合・復元および図化という作業についてはほとんど手をつけられなかったが、これまで不明な点が多かった1次調査資料の全体像が把握できた。本稿では、1次調査資料ならびに南山大学が調査した高蔵遺跡夜寒地区SD03出土資料（以下SD03資料と略す）もあわせて「類型」ごとに分類し、その比率からの検討を主題として1次調査資料を検討していきたい。

1. 分類について

尾張地域における前期弥生土器群は、器形や文様だけでなく、製作技術などの様々な点で多様性が確認できる。高蔵遺跡出土の前期弥生土器についても例外ではなく多様な土器群が混在しており、まずはそれらの分類が必要となる。

これまで採用されてきた分類方法は、紅村弘氏の「愛知県に於ける西志賀の前期土器の複雑な構成を、検出状況による一括複合認識とし、さらに「一つの標式（型式）」の中で「類別」する」（紅村2000より原文のまま引用）という認識のもとで行われた「類」という概念を用いた分類（紅村1956・1981・1983など）や、石黒立人氏の「土器の文様手法、製作技法、形態などの諸属性のうち、多くの個体を関係づけることができる要素に注目して、その時間的消長や空間分布によって他とは区別可能な単位を抽出する作業」（石黒2002より原文のまま引用）という土器の系統区分による分類（石黒1990・1994a・2002など）であった。

本稿でも、上記したような紅村氏や石黒氏の分類概念を踏まえ、出土した土器群を第Ⅰ類、第Ⅱ類、第Ⅲ類、第Ⅳ類、第Ⅴ類、第Ⅵ類という6つに分類した。なお「系統（系）」ではなく「類」としたのは、前期弥生土器のみを対象とする本稿の内容には、時間的・空間的に土器様式という枠組みを超越する「系統（系）」いう概念を採用するよりも、「類」という概念を採用するほうがより適切であると考えたためである。以下、各類型について説明を加えると、（器種名のみを表記する）

第Ⅰ類：いわゆる遠賀川式土器である。高蔵遺跡からは壺、甕、鉢、無頸壺、壺蓋、甕蓋という基本的なセットのうちの高杯以外の器種が出土している。

第Ⅱ類：「垂流遠賀川式土器」・「赤焼き遠賀川」・「垂流遠賀川系土器」・「遠賀川Ⅱ式」・「遠賀川B系統」・「只段山B類」などと呼ばれる土器群である。基本的な定義は鈴木1990および永井2000に準ずる。

高蔵遺跡からは壺と甕が出土している。なお、「変容壺系列」とされる型式の甕も1点出土しているが、鉢は出土していない。

第Ⅲ類：条痕土器群である。ほぼ二枚貝による条痕に限られるが、二又工具によるものも数点ある。現在までに高蔵遺跡から出土したもので、壺土式か水神平式かの判断をつけうるものはすべて水神平式にあたると思われる。壺・深鉢・甕・鉢および、条痕調整のものは出土していないが、中期初頭に成立する

条痕調整の厚口鉢の祖形となる内傾口縁土器もそのセットとして含める。なお、朝日式併行（中期初頭）の壺5点（口縁部内面に重弧文や波状文を施文するもの3点と口縁部外面の突帯が消失した口径の小さく器壁の薄いもの2点）・深鉢2点（口縁端部内面をつまみ出して突帯のようにし、刻目を入れるもの）・厚口鉢2点（厚口鉢以外は口縁部による点数）も出土しているが、これらは第Ⅲ類に含めず、中期初頭土器群として扱う。

第Ⅳ類：削痕土器、削痕系土器、「氷式系削痕深鉢形土器」（永井1999）などと呼称される外面をケズリおよびナデ、ミガキで調整する深鉢・壺を第Ⅳ類とおく。「口外帯ルジメント」・「頸部無文帯」をもつ、一宮市三ツ井遺跡などで出土したものと同様の器形を呈するもの（ただし口縁部の押圧はない）も存在する。

第Ⅳ'類：第Ⅳ類の器形・胎土・おそらく焼成の方法に起因すると思われる質感をもちながらも外面に二枚貝条痕調整が施される深鉢・壺を第Ⅳ'類とおく。甕形のものが多いが、「口外帯ルジメント」・「頸部無文帯」をもつ器形の深鉢もある。第Ⅲ類と第Ⅳ類それぞれの影響が見られるこの土器群を、独立した一つの類型として捉えることで高森遺跡の前期弥生土器の様相をより把握できると考えて設定した。

第Ⅴ類：遠賀川式土器と併行する浮線文土器、「沈線紋系土器」を第Ⅴ類とするが、1次調査資料にはみられず、SD03資料にいわゆる浮線渦巻文土器が1点あるのみである。なお、1次調査資料からはD10より朝日式併行と考えられる「沈線紋系土器」の口縁部片が出土しているが、第Ⅴ類には含めず中期初頭土器群として扱う。

以上のように6つの類型を設定した。ただ、本来ならばこの類型ごとに型式設定をしてこそより分類することの意義があると思うのだが、上記したような事情もあり、これ以上はより有意義な分類はでき得ないと判断した。本稿ではここで設定した6つの類型をもとに1次調査資料を検討していく。

なお、中期初頭土器群については、確認でき得たもののみであるが、先に挙げた条痕文土器群9点と「沈線紋系土器」1点、第Ⅰ類の系譜にあたる壺の口縁部片1点の計11点出土している。

2. 前期弥生土器の出土地点とその時期について

1次調査資料のほとんどは、D2、D5、D10（D3、D11出土分を含める）という環濠遺構より出土している。そのほかにも環濠周辺より出土したものや、小規模な土坑（K19）、ピット等（P18、D4、D18など）からの遺構出土資料もある。環濠周辺からの出土土器は、弥生後期における環濠の再掘削の際や、古代の混乱、現代の防空壕掘削の際に本来環濠内にあった土器が巻き上げられた可能性が高い。また、小規模な遺構から出土したものは、出土数が少ないので本稿では取り上げないが、ほぼD2ないしD10出土のものと同様の時期のものと考えられる。

また、D2、D5、D10といった、ある程度の資料出土数がある遺構からはどの遺構からも第Ⅴ類を除くすべての類型の土器群が出土している。またそれらの遺構からはすべて、第Ⅲ類の縦位羽状条痕文の施される破片が一定量出土している。さらに文様全体が残存しているものは少なかったが、時期を判断するのに有効な第Ⅰ類壺については、①D5出土資料に意匠の崩れかけた木の葉文と思われる文様が施文された破片が1点あったこと②どの遺構からも胴部が張り出さない丈高な器形のものとして若しくは胴部が横に張り出すものが出土していること③5条以上のいわゆる多条沈線ならびに貼り付け突帯の数、沈線と貼り付

け突帯が組み合わさる文様の割合がD10、D2、D5の順に高いという3点がいえる。

また、D10およびその周辺から中期初頭土器群が第Ⅰ類等に混ざって出土していることから、高蔵遺跡の集落の変遷は、現在のところ、D5出土資料の時期→D2出土資料の時期→D10出土資料の時期という3段階に区切ることができ、その期間は弥生前期中葉の後半（永井2002編年でいうところのⅠ-4とⅠ-5の間か？）から弥生前期末-中期初頭（永井2002編年でいうところのⅠ-6～Ⅱ-Ⅰにかけてか？）になるであろう⁶。ただし大枠では適切な位置付けではあるが、根拠をはっきりと提示できず、他遺跡との併行関係も示せないため、あくまで本稿の中での時間軸の設定ということでこの区分を用いたい。

3. 類型組成比率

上述したように、1次調査資料のほとんどはD2・D5・D10の環濠遺構より出土している。ここでは、D2・D5・D10の各遺構ごとに、出土した前期弥生土器を分類・カウント⁷してその類型組成比率を明らかにし、検討する。また、比較のために同じく多くの前期弥生土器が出土した環濠遺構である、南川大学調査のSD03についても同様の処理を行った。なお、分類・カウントの際にどの類型のものか判断がつかなかったものは、不明というカテゴリーにいれ、比率としては提示していない。

さらに、第Ⅳ類、第Ⅳ'類はすべて深鉢・甕であり、第Ⅲ類も85.4%が深鉢・甕である（D2、D5、D10、SD03出土の第Ⅲ類の口縁部123点中、深鉢・甕の合計数は105点）ために、対象を深鉢・甕に絞った類型比率についても検討する⁸。

【各類型の比率】（表1～10、グラフ1～12参照）

（1）D5出土資料（表1、6 グラフ1、7参照）

D5出土の口縁部および口縁部直下の破片は128点であった。それとは別に第Ⅰ類の壺蓋が8点あった。なお、すべて笠形のものである。内訳は第Ⅰ類：84点（66.7%）、第Ⅱ類：7点（5.6%）、第Ⅲ類：16点（12.7%）、第Ⅳ類：15点（11.9%）、第Ⅳ'類：4点（3.2%）、不明：2点である。

また、深鉢・甕の口縁部および口縁部直下の破片は70点であった。それとは別に類型不明のものが1点あった。内訳は第Ⅰ類：31点（44.3%）、第Ⅱ類：5点（7.1%）、第Ⅲ類：15点（21.4%）、第Ⅳ類：15点（21.4%）、第Ⅳ'類：4点（5.7%）である。

（2）D2出土資料（表2、7 グラフ2、8参照）

D2出土の口縁部および口縁部直下の破片は237点であった。それとは別に第Ⅰ類の壺蓋が11点、壺蓋が2点あり、壺蓋については10点がいわゆる笠形のものであり、1点がいわゆる盤状のものであった。内訳は第Ⅰ類：179点（77.2%）、第Ⅱ類：15点（6.5%）、第Ⅲ類：25点（10.8%）、第Ⅳ類：2点（0.9%）、第Ⅳ'類：11点（4.7%）、不明：5点である。

また、深鉢・甕の口縁部および口縁部直下の破片は85点であった。それとは別に類型不明のものが2点あった。内訳は第Ⅰ類：45点（52.9%）、第Ⅱ類：8点（9.4%）、第Ⅲ類：19点（22.4%）、第Ⅳ類：2点（2.4%）、第Ⅳ'類：11点（12.9%）である。

（3）D10出土資料（表3、グラフ3参照）（表8、グラフ9参照）

D10出土の口縁部および口縁部直下の破片は141点であった。それとは別に第Ⅰ類の壺蓋が8点あり、そのうち6点が笠形のものであり、2点が盤状のものであった。また、朝日式併行（中期初頭）の土器

の口縁部も別に2点出土している(いわゆる沈線紋系土器1点、条痕文上器群の深鉢片1点)。内訳は第Ⅰ類:92点(65.3%)、第Ⅱ類:3点(2.1%)、第Ⅲ類:40点(28.4%)、第Ⅳ類:3点(2.1%)、第Ⅳ'類:3点(2.1%)である。

また、深鉢・甕の口縁部および口縁部直下の破片は77点であった。内訳は第Ⅰ類:30点(39.0%)、第Ⅱ類:3点(3.9%)、第Ⅲ類:38点(49.4%)、第Ⅳ類:3点(3.9%)、第Ⅳ'類:3点(3.9%)である。

(4) SD03出土資料(表4、9 グラフ4、10参照)

SD03出土の口縁部および口縁部直下の破片は170点であった。それとは別に第Ⅰ類の甕蓋が5点あった。そのうち4点が笠形のものであり、1点が壺状のものであった。内訳は第Ⅰ類:120点(70.6%)、第Ⅱ類:4点(2.4%)、第Ⅲ類:42点(24.7%)、第Ⅳ類:3点(1.8%)、第Ⅴ類:1点(0.6%)であり、第Ⅳ'類の口縁部片は確認できなかった。

また、深鉢・甕の口縁部および口縁部直下の破片は71点であった。内訳は第Ⅰ類:31点(43.7%)、第Ⅱ類:2点(2.8%)、第Ⅲ類:35点(49.3%)、第Ⅳ類:3点(4.2%)であった。

(5) 各遺構の比較(表5、10 グラフ5、6、11、12参照)

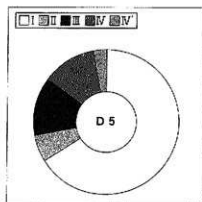
各遺構遺溝における類型組成比率は以上ようになった。これらの比率を比較した際に注目すべき点は、①D5における第Ⅳ類の比率の高さ②D10、SD03における第Ⅲ類の比率の高さ③D2における第Ⅳ'類の比率の高さ④類型全体での比率については第Ⅰ類が他の類型を凌駕しているものの、深鉢・甕における第Ⅰ類の比率はD2を除いて過半数を下回ること⑤D10とSD03の組成比率がほぼ同様なことの5点が挙げられる。

4. 類型組成比率からの考察

まず、時間的な問題としては、①尾張地域の土器様相の変遷から考えて、D5出土資料は他の遺構より出土した資料群よりも古い段階のものと考えられること②D10、SD03出土資料がおなじ段階に位置付けられる可能性が高いという2点がいえる。D2出土資料については類型組成比率から時間的な位置付けを行うことが難しいが、第Ⅲ類の比率がほぼD5と共通し、D10・SD03とは大きく異なることに注目すると、やはり先に述べたD5出土資料群→D2出土資料群→D10・SD03出土資料群という変遷が想定できる。とすると、①第Ⅳ類の激減と第Ⅳ'類・第Ⅰ類の増加(D5→D2)・第Ⅳ'類・第Ⅰ類の減少と第Ⅲ類の増加(D2→D10・SD03)という類型比率の対応関係がそれぞれ導かれる②第Ⅰ類の壺・鉢・甕と様々な類型の深鉢・甕が組成するという土器様式から、第Ⅰ類の甕・鉢・蓋に第Ⅰ類の甕と第Ⅲ類の深鉢・甕が組成するという土器様式に変化することがいえる。

より具体的に解釈すると、D5出土土器の段階では煮炊き具とされる器種である深鉢・甕は様々な類型のものが混在していたが、D10、SD03出土土器の段階にはほぼ第Ⅰ類と第Ⅲ類に集約された。D2出土土器の段階はその途中にあり、多様な煮炊き具が集約されていく過程にはいくつかの類型の特徴を持つ土器群が一時的に増加したことが確認できる。特にそのモデルとなったものは後のD10、SD03出土土器の段階ではほぼ類型組成の比率を二分する第Ⅰ類および第Ⅲ類であった。D2における甕形器形の煮炊き具の増加や、第Ⅳ'類の増加がそのことを端的に示している。

そのような深鉢・甕の型式変化の過程や第Ⅱ類の希少さなど、高蔵遺跡における類型組成は、朝日遺跡

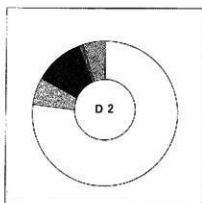


グラフ1 D5出土土器の類型比率

I	II	III	IV	V'	計
84	7	16	15	4	126
66.7%	5.6%	12.7%	11.9%	3.2%	100.1%

不明	壺蓋	甕蓋
2	8	0

表1 D5出土土器の類型別点数(口縁部計測)



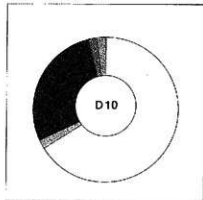
グラフ2 D2出土土器の類型比率

I	II	III	IV	V'	計
172	15	25	2	11	232
77.2%	6.5%	10.8%	0.9%	4.7%	100.1%

不明	壺蓋	甕蓋
5	11 (1)	2

※括弧内は壺状器形の壺蓋

表2 D2出土土器の類型別点数(口縁部計測)



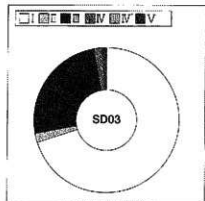
グラフ3 D10出土土器の類型比率

I	II	III	IV	V'	計
92	3	40	3	3	141
65.3%	2.1%	28.4%	2.1%	2.1%	100.0%

壺蓋	甕蓋	中初
8 (2)	0	2

※括弧内は壺状器形の壺蓋。中初は中期初頭の略

表3 D10出土土器の類型別点数(口縁部計測)



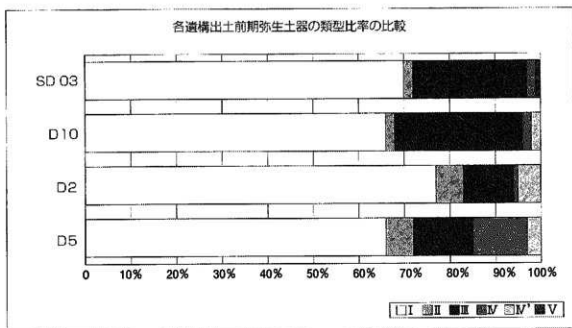
グラフ4 SD03出土土器の類型比率

I	II	III	IV	V'	V	計
120	4	42	3	0	1	170
70.6%	2.4%	24.7%	1.8%	0.0%	0.6%	100.1%

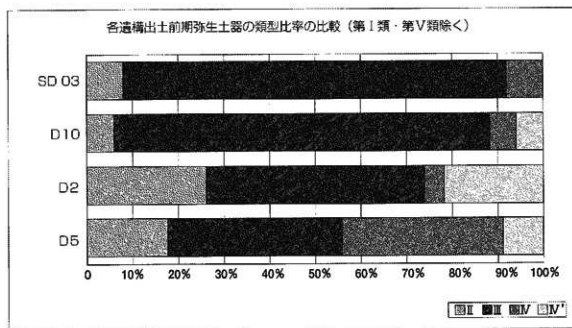
壺蓋	甕蓋
5 (1)	0

※括弧内は壺状器形の壺蓋

表4 SD03出土土器の類型別点数(口縁部計測)



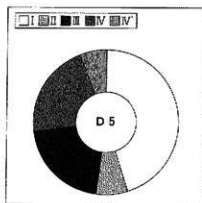
グラフ5 各遺構出土前期弥生土器の類型比率の比較 (全類型)



グラフ6 各遺構出土前期弥生土器の類型比率の比較 (第I類・第V類除く)

	I	II	III	IV	IV'	V	計
D 5	84	7	16	15	4	0	126
D 2	179	15	25	2	11	0	232
D 10	92	3	40	3	3	0	141
SD03	120	4	42	3	0	1	170

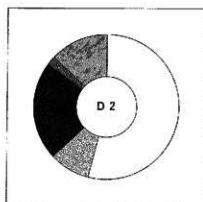
表5 各類型の出土点数一覧 (口縁部計測)



グラフ7 D5出土の深鉢・壺の類型比率

I	II	III	IV	IV'	計	不明
31	5	15	15	4	70	1
44.3%	7.1%	21.4%	21.4%	5.7%	99.9%	

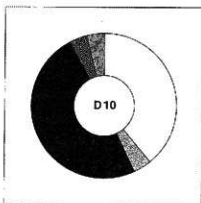
表6 D5出土深鉢・壺の類型別点数（口縁部計測）



グラフ8 D2出土の深鉢・壺の類型比率

I	II	III	IV	IV'	計	不明
45	8	19	2	11	85	2
52.9%	9.4%	22.4%	2.4%	12.9%	100.0%	

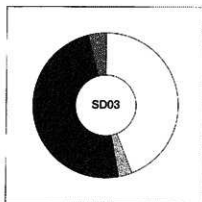
表7 D2出土深鉢・壺の類型別点数（口縁部計測）



グラフ9 D10出土の深鉢・壺の類型比率

I	II	III	IV	IV'	計
30	3	38	3	3	77
39.0%	3.9%	49.4%	3.9%	3.9%	100.0%

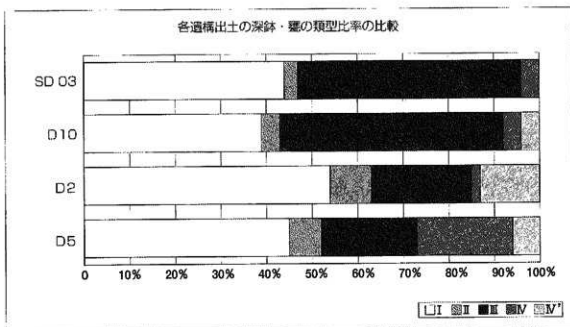
表8 D10出土深鉢・壺の類型別点数（口縁部計測）



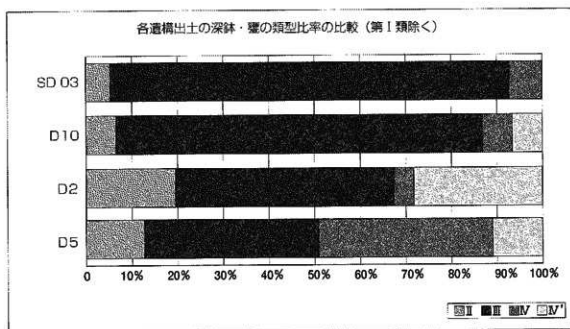
グラフ10 SD03出土の深鉢・壺の類型比率

I	II	III	IV	計
31	2	35	3	71
43.7%	2.8%	49.3%	4.2%	100.0%

表9 SD03出土深鉢・壺の類型別点数（口縁部計測）



グラフ11 各遺構出土の深鉢・甕の類型比率の比較



グラフ12 各遺構出土の深鉢・甕の類型比率の比較 (第I類除く)

深鉢・甕	I	II	III	IV	V'	計
D 5	31	5	15	15	4	70
D 2	45	8	19	2	11	85
D10	30	3	38	3	3	77
SD03	31	2	35	3	0	71

表10 各類型の深鉢・甕の出土点数一覧 (口縁部計測)

や八王子遺跡などの尾張地域における同時期の他の遺跡とは異なる。中期初頭の土器様式である朝日式には第Ⅱ類に見られる属性が少なくないことや、高蔵遺跡出土の中期初頭土器群は搬入品の可能性が大きい土器に限られることから、高蔵遺跡においては、朝日遺跡等で朝日式が成立した後も朝日式が成立することなく、第Ⅰ類と第Ⅲ類主体の土器様式が続いていた可能性がある。すなわち、弥生前期後半から弥生中期初頭への土器の型式変化および土器様式の変化についても、弥生前期における土器様相と同様に、尾張地域という狭い範囲の中で遺跡ごとにはっきりとした地域色ならびに地域性があったことが想定できる。

ただ、本稿の内容のように土器そのものではなく、数値化されたデータをもとにした解釈は、本来土器研究においては副次的なものである。よって今後、高蔵遺跡出土の土器そのものについての考察による解釈が必要となろう。

5. まとめにかえて

高蔵遺跡は概説書にも頻繁に登場する遺跡である。その理由として、学史上重要な遺跡であることだけでなく、現在のところ遠賀川式土器が主体となる遺跡の最東端の一部（豊橋市白石遺跡は例外として）であること、条痕土器群も一定量出土すること、多重環濠集落であること、遺跡周辺に水田可耕地が想定できなといったことが挙げられよう。確かにそれらの事実は弥生時代という時代を考える上で重要であり、高蔵遺跡は概説書等で取り上げられるのにふさわしい遺跡である。しかしこれまで、高蔵遺跡出土の遺物、特に弥生時代前期の資料について具体的に議論されたことはほとんどなかったといってよい。その理由は単純で、南山大学調査分以外のほとんどの資料が公表されていなかったためである。逸早く公表された南山大学調査分のSD03資料については具体的な状況がわかって、名古屋市調査分の資料については細かな状況がつかめないという事態が続いており、研究の進展、例えば土器編年構築の際の障害となっていた。実際、今回の整理作業においてこれまで一部が報告されていたD2・D10出土資料を時期的にさかのぼるD5出土資料の存在が明らかになり、弥生時代における高蔵遺跡の集落の始まりがその分だけ古くなることとなった。

とはいえ、今回の整理作業で、ほとんど進んでいなかった出土土器の接合復元および図化を完了させることは困難であり、本書に載せられた図化資料はすべてではない。本稿ではそのような状況の中でより多くの情報を提示しようと、高蔵遺跡第1次調査出土の前期弥生土器の全体像を数値として示すこととした。実際の資料を数値に変換することで、その資料の持つほとんどの情報は失われてしまうけれども、出土資料の全体像を把握することは可能であると考えられる。

本稿では掘り下げて検討することのできなかった、搬入土器と在地製作土器の問題や類型と集団（作り手）の関係の解明といった尾張地域における弥生時代前期の土器様相を把握するうえで重要かつ不可欠な事柄や、そもそも今回用いた類型組成比率の比較という検討方法からもう少し有効な議論ができなかったかという課題を最後に述べ、まとめにかえたい。

【謝辞】

最後になりましたが、浅学にもかかわらず高森遺跡第1次調査出土前期弥生土器の整理を行う機会ならびに整理作業の成果を発表させていただく機会を与えていただいた、村木誠氏ならびに山原和美氏には様々なご配慮を賜りました。また、お二人だけでなく見晴考古資料館の職員の皆様ならびに関係者の皆様には大変お世話になりました。さらに、ご多忙ながら高森遺跡夜集地区SD03資料の実見を許可していただいた南山大学助教重松和男氏ならびに南山大学人類学博物館の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。記して感謝いたします。

主要参考文献

- 石黒立人 1980 「弥生中期土器に見る複数の系一く様式」の理解に向けて一『考古学フォーラム』1
- 石黒立人 1994a 「第2章 資料の扱い 2. 弥生時代から古墳時代の土器」『朝日遺跡』V 愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人 1994b 「“中間者”としての弥生土器」『弥生文化博物館研究報告第3集』弥生文化博物館
- 石黒立人 1995 「中部・東海・東四二権構造の結節点」『弥生文化の成立大変革の主体は「縄文人」だった』角川書店
- 石黒立人 2002 「2. 弥生土器の系統研究について」『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社
- 紅村弘 1956 「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』13 古代学研究会
- 紅村弘 1981 「東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階-本文編 補足改訂版』
- 紅村弘 1983 「東海西部」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社
- 紅村弘 2000 「同上「関係論文」の解説と展開」『古代人』60 名古屋考古学会
- 重松和男他 1987 『名古屋市文化財調査報告XX 熱田区夜集町高森遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 鈴木克彦 1980 「三重流達賀川式土器」再考」『Mie history』2
- 永井宏幸 1994 「沈積紋土器について」『朝日遺跡』V土器編-総論編 愛知県埋蔵文化財センター
- 永井宏幸 1999 「弥生時代前期の諸問題-三ツ井遺跡からの検討-」『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 永井宏幸 2000 「弥生時代前期「遠賀川系土器」をめぐる諸問題-朝日遺跡Ⅰ期をめぐる-」『朝日遺跡Ⅵ』愛知県埋蔵文化財センター
- 永井宏幸・村木誠 2002 「3 尾張地域」『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社

注

- 1 南山大学助教重松和男氏のご好意により実見・カウントさせていただいた。
- 2 旧園単位でいう尾張のうち、尾張平野および名古屋台地を合わせた地域を尾張地域と設定する。
- 3 本稿では、いわゆる如意形(線ないしそれを模した口縁形をとる変炊き具を究、それ以外(単に外反するものなども)を深鉢とする。
- 4 水Ⅰ式の浅鉢や精製・手摺製の深鉢の口縁部外面には口外帯と呼ばれる文様帯が存在する。この口外帯が興器部強化したと考えられる口縁部の間延びした押圧や強いナデをこのように呼ぶこととする。
- 5 なお、D2環濠の内側の小規模な遺構であるD18から中期初頭土器群(口縁部内面に二枚貝で重弧文等を施す条痕土器群の壺)が第Ⅰ類などと出しており、やはり弥生前期末~中期初頭にも集落が存続していたことが考えられる。
- 6 口縁部片ないし口縁部直下の破片をカウントの対象とした。なお、小片についてもカウントを行ったため、本来は同一個体であるはずの破片についても重複してカウントしている可能性が十分考えられる。また、葉形土器については第Ⅰ類にしか存在しないため別にカウントした。
- 7 なお、第Ⅰ類については口縁部片のみでは壺なのか鉢なのかかわからない個体もあったが、それらについては積極的に究と判断して対象データに加えた。

付論4 高蔵遺跡ブロックサンプル採取地点以外の動物遺存体

名古屋大学大学院人間情報学研究所 山崎 健

1981, 1982年に実施された名古屋市高蔵遺跡の第1次発掘調査において、溝状遺構であるD2の東側埋土上部とD10の西南側埋土中部からカキを主体とする貝層が形成されていた。この貝層は発掘時に名古屋大学の渡辺誠先生によってブロックサンプル（以下「BS」）が採取され、BS以外の貝層は土壌ごと持ち帰られ名古屋市見晴台考古資料館に保管されていた。高蔵遺跡には貝層を伴うことが知られていたが、従来の報告においては貝類以外の分析がほとんどなされていないのが現状である。そのため、今回の報告にあたってBS以外の貝層を水洗選別し、動物遺存体資料の蓄積に努めた。

溝状遺構内のBS以外の貝層を水洗選別した結果、計186点の動物遺存体が得られた。出土内容は、ニシン科（マイワシ主体）などの季節的回遊魚を中心とした魚類が182点、哺乳類が3点、鳥類が1点であった。資料の所属時期は弥生時代前期後半（I-5 様式期）（註）である。これらについて貝層資料内容を表1、確認された動物種名一覧を表2、遺構ごとの出土量を表3、4に示し、以下にその分析結果を報告する。

BS以外の貝層の上澄から、状態の良い資料をテンバコ10箱分抽出して、筆者が5mm目、1mm目フルイを用いて水洗選別を行ない、資料内容の重量を計量した。BS以外の貝層資料内容を見ると、魚骨包含率がD2で平均0.02%、D10で平均0.0008%と魚類遺存体資料の包含率は極めて低い。この包含率が低い要因としては、①もともと動物骨がほとんど廃棄されていなかった、②廃棄された後に多くが消失した、という可能性が考えられる。検出された貝類は表面が著しく摩滅して脱灰している。このことから、貝層の保存状態が悪く②の要因がより強く働いたものと考えられる。ただし、これはBS以外の貝層の状況であり、BS資料と合わせて総合的に考察していく必要があろう。

同定は、原則として現生標本との比較によっている。「未同定」とあるのは比較した現生標本中に一致するものがなかった資料で、「同定不可」とあるのは破損などにより判別できなかったものである。集計に関しては、NISP（同定破片総数）を算出した。NISPは同一個体由来した骨を重複して集計する可能性があり、とくに魚類では椎骨の多い魚種が多く出土しているような偏りが反映してしまう。そのため、魚種ごとに出土椎骨数を総椎骨数で割った椎骨出現率も示して、その補足とした。算出方法としてはMNI（最小個体数）もあるが、動物骨が少量しか出土しない遺跡では相対的な出土量が把握しづらいため、

遺構	試料	体積 (cc)	乾燥重量 (g)	貝殻 (g)	蚌骨 (g)	魚骨1mm (g)	魚骨5mm (g)	魚骨合計 (g)	魚貝率 (%)	魚骨包含率 (%)
D2	2	18400	13900	2980	0	3.1	0	3.1	22.1	0.023
	5	-	-	-	0.5	3.5	0	3.5	-	-
	9	19300	16000	1960	21.3	3.0	0.9	3.9	12.3	0.024
	11	17400	15000	2850	21.1	2.8	0.1	2.9	19.0	0.019
	19	16500	13500	4540	0	1.6	0.4	2.0	33.6	0.015
	22	17600	14500	2460	0	2.3	0.3	2.5	17.0	0.017
	30	17400	13500	1070	0	2.5	0.3	2.8	6.9	0.018
D2合計		106000	88000	19870	45.9	18.8	2.0	20.7	18.0	0.020
D10	4	20300	17500	2600	0	0.1	0	0.1	15.2	0.0006
	8	11900	9000	1440	0	0.1	0	0.1	16.0	0.0011
	40	-	-	-	0	0.4	0	0.4	-	-
	D10合計		32100	26500	4100	0	0.6	0	0.6	15.5
総計		138100	114500	19970	45.9	19.4	2	21.3	17.8	0.015

表1 貝層資料内容

NISPのみ示している。D10は動物遺存体資料がほとんど検出されなかったため、D2とD10の資料を併せて論じていくこととする。なお、水洗選別資料は見晴台考古資料館で保管している。

魚類では最も多く出土したのがニシン科である。ニシン科は椎骨が67点同定されたが、このニシン科と同定された分類群は伊勢湾ではマイワシ、コノシロ、サバにあたる。椎骨以外ではマイワシの方骨2点と角骨1点、コノシロの角骨1点が確認されている。今回の分析ではニシン科が卓越して検出されたことから、資源量・漁獲量の多いマイワシが主体であると考えられる。腹椎の椎体横径は2.75~3.25mm程度で、椎体体長18~21cm程度のマイワシ大羽群で構成されていた。

他の魚種を見ると、サバ属は椎骨、方骨など11点が同定され、標準体長32cmの現生標本よりもかなり小型の個体が主体であった。カレイ科は椎骨、舌顎骨が10点同定された。標準体長21cmのイシガレイの現生標本よりもひとまわり小さい個体である。スズキ属は椎骨、角骨が9点同定され、椎体体長20cm程度のいわゆるセイゴと呼ばれる大きさである。カタクチイワシは椎骨が5点同定され、標準体長13cmの現生標本とほぼ一致する大きさであった。その他にもフグ科、ウナギ属、コチ属、タイ科、カマス属、フサカサゴ科、アカエイ、アイナメ属、サヨリ属、アジ科が同定された。

鳥類は、ガンカモ科の右鳥口骨の近位部が1点同定され、その大きさは現生オナガガモ(♂)よりひとまわり小さい程度である。哺乳類は、シカの右頭骨が2点同定された。そのうち1点は骨端部が外れており、被熱して黒色化している。このほか、シカあるいはイノシシの右上腕骨の破片が1点同定されている。

高蔵遺跡から出土した魚類遺存体をとりあげて、弥生時代前期における高蔵遺跡の漁撈活動の復元を試みていく。まず、魚類遺存体の組成比をNISPで見ると(図1)、ニシン科(マイワシ主体)が約55%と卓越し、サバ属、カレイ科、スズキ属が約7%以上でこれに次ぎ、カタクチイワシ、フグ科、ウナギ属が約3%以上見られた。椎骨出現率においても(図2)、ニシン科(マイワシ主体)が約54%を占めている。次いでサバ属、スズキ属、カレイ科が約7%以上、カタクチイワシ、フグ科が約4%前後認められ、NISPおよび椎骨出現率のいずれにおいても、出土魚種の組成比はほぼ同様な傾向を示した。

出土した魚類遺存体の伊勢湾における生態を考慮すると、伊勢湾内に春~夏にかけて来遊する魚種がほとんどを占めていることがわかる。この季節的回遊魚にはニシン科(マイワシ主体)、サバ属、カタクチイワシ、アジ科などの表層に分布する魚種やスズキ属、コチ属など汽水域を好む魚種が含まれている。とくにマイワシ、サバ属など表層回遊魚種が優占しているため、これらの魚群を集中的に漁獲する網漁のような漁法が行なわれていたと考えられる。また、スズキ属は小型の未成魚が主体であるため、沿岸の藻場や干潟付近、河口域などのより汽水域に近い場も漁場になっていた可能性も指摘される。また、カレイ科やアイナメ属といった底魚類や岩礁性魚類も見られることから、季節的回遊魚を集中的に漁獲しつつも、多様な漁場を利用していたことが推定される。

謝辞

名古屋見晴台考古資料館の村木誠氏、田原和美氏には今回の資料を分析する機会を与えて頂いた。名古屋大学の新美倫子先生には、現生標本の閲覧およびご指導を賜っている。また、名古屋大学大学院生の猪俣樹人氏、野邊地章太氏には、資料の水洗選別を手伝って頂いた。記して深く感謝いたします。

軟骨魚綱 Class Chondrichthyes
アカエイ科 Dasypidae gener spindet

アイナメ属 *Hexagrammos* sp.
スズキ属 *Lateolabrax* sp.
アジ科 *Trachurus* gener spindet
タイ科 *Soaridae* gener spindet
サバ属 *Scomber* sp.
カレイ科 *Pleuronectidae* gener spindet
フグ科 *Tetraodontidae* gener spindet

硬骨魚綱 Class Osteichthyes
ウナギ属 *Anguilla* sp.
ニシン科 *Clupeidae* gener spindet
マイワシ *Sardinops melanostictus* (Temminck and Schlegel)
コノシロ *Konosirus punctatus* (Temminck and Schlegel)
カタクタイワシ *Engraulis japonicus* (Houttuyn)
カマス属 *Sphyræna* sp.
サヨリ属 *Hyporhamphus* sp.
フサカサゴ科 *Scorpaenidae* gener spindet
コナ属 *Platycephalus* sp.

鳥綱 Class Aves
ガンカモ科 *Anatidae* gener spindet

哺乳綱 Class
シカ *Cervus nippon*

* 種名・記号は、中功優 (2000)、内田潤 (1972) によっている。

表2 出土動物遺存体の種名一覧

魚種名・部位	遺体・試料番号										計
	2	5	9	11	19	22	30	4	40		
ニシン科	椎骨	10	3	21	3	13	4	12	1		67
サバ属	椎骨	6		1				1			8
	方骨				R1						1
	前上顎骨	L1									1
カレイ科	尾節様状骨			1							1
	第1椎骨			1							1
	肋骨	1	4	2							7
スズキ属	舌頭骨			R2							2
	椎骨	1	3	1	1				1	7	9
	高骨								L1	1	1
カタクタイワシ	前上顎骨				R1					1	
フグ科	椎骨			4	1						5
ウナギ属	椎骨			2			3				5
マイワシ	椎骨	1		3							4
カマス属	方骨			L1							1
	方骨					R1					1
	前上顎骨			L1							1
フサカサゴ科	口蓋骨				L1						1
	第1椎骨	1									1
コナ属	椎骨	1									1
	椎骨			1							1
タイ科	歯	1			1						2
アカエイ	臼歯				1						1
コノシロ	椎骨				R1						1
サヨリ属	椎骨				1						1
アイナメ属	椎骨						1				1
アジ科	椎骨				1						1
アサギ	椎骨	13	1	7	2	5	2	4	3		37
本調査	椎骨	2	1		2		8	2		1	16
	その他の部位骨					2	1				3
計		38	15	47	13	22	16	22	4	3	182

* L:左, R:右を示している。

表3 魚類遺存体の出土量

遺体	試料番号	種・部位・出土量	計
D2	5	ガンカモ科鳥口蓋骨R上1	1
D2	9	シカ肋骨R1	1
D2	11	シカ肋骨R1 2、椎、シカorイノシシ上顎骨R破片1	2
計			4

* L:左, R:右, 上:近位部, 下:遠位部, 上下のないものは先存している資料。
初:片断, 茶のないものは成獣, 黄:乾燥していることを示している。

表4 鳥類・哺乳類の出土量

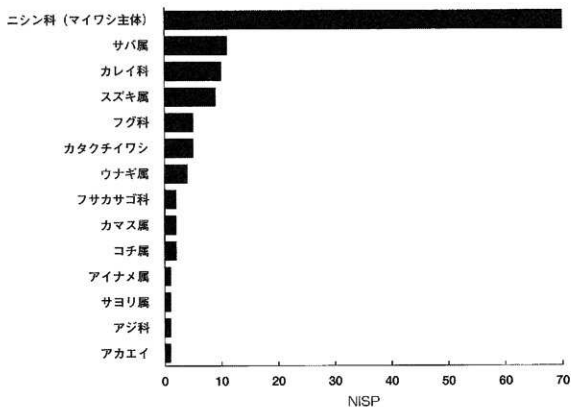


図1 魚類遺存体組成 (NISP)
*タイ科の量はのぞいている。

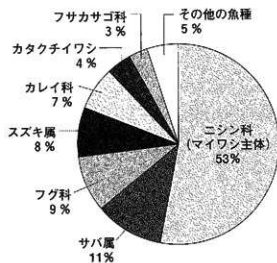


図2 魚類遺存体組織 (相対出現率)

註 弥生時代の土器編年は永井・村木 (2002) に依っている。

文献1 永井宏幸・村木誠 2002 「尾張地方」『弥生土器の様式と編年 東海編一』, 253-412頁。

文献2 中坊徹次編 2000 『日本産魚類検索 全種の同定第2版』東海大学出版会。

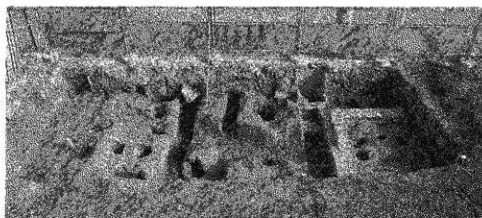
文献3 内田享編 1972 『谷津・内田動物分類名辞典』, 中山書店。



調査区北部全景



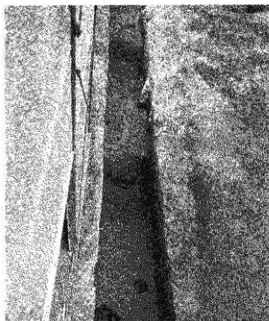
調査区西部全景



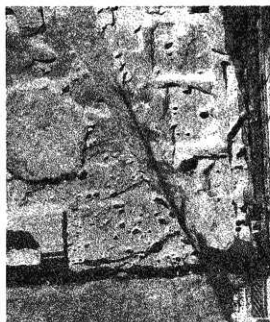
門部分全景



調査区北東部



水道部全景



調査区南東部



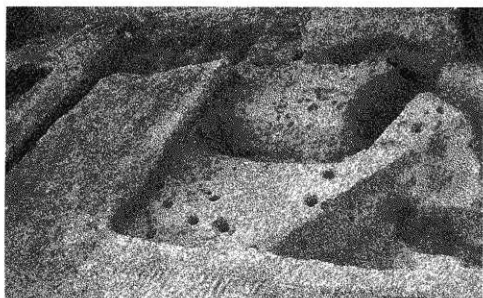
D2 D5



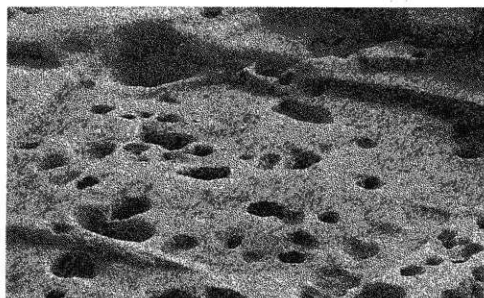
調査区西北部



D10 D3



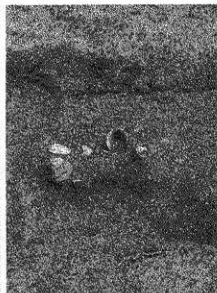
D11



B2



D2 1 竈出土状況



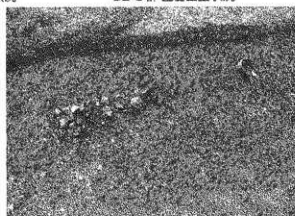
D2 1 群土器出土状況



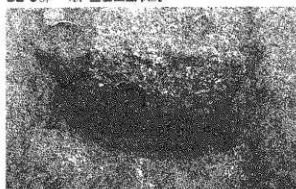
D2 9 群土器出土状況



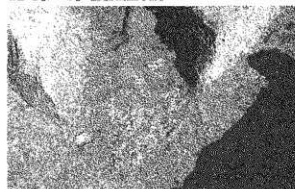
D2 3群・4群土器出土状況



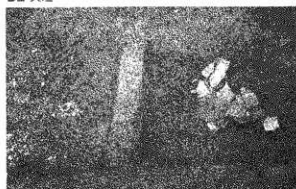
D2 5群・6群土器出土状況



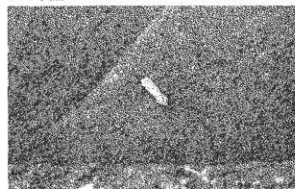
D2 貝層



D10 貝層



D10 土器出土状況



石棒出土状況



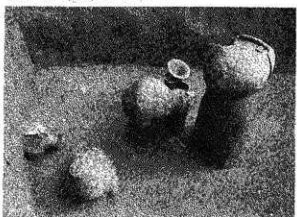
D3 D10 土器出土状況



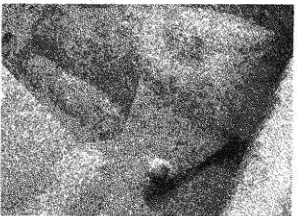
D3 土器出土状況(1)



D3 土器出土状況(2)



D3 土器群V 出土状況



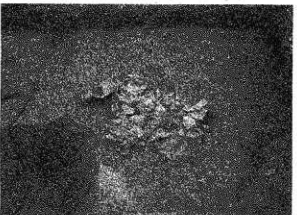
D3 土器出土状況(3)



D3 土器出土状況(4)



D3 上面 土器出土状況



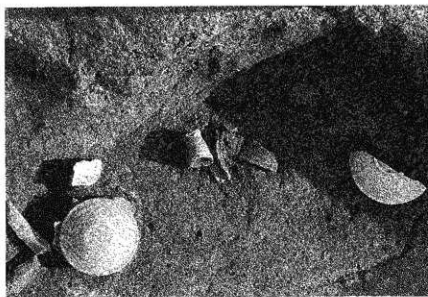
D3 上面 土器群Ⅲ 出土状況



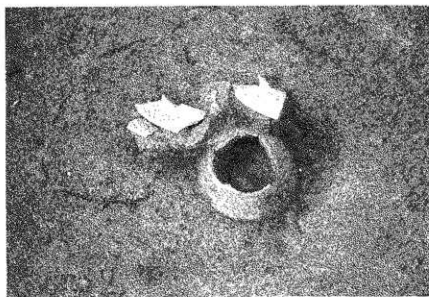
D12 土器出土状況



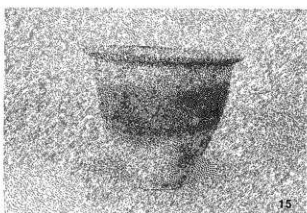
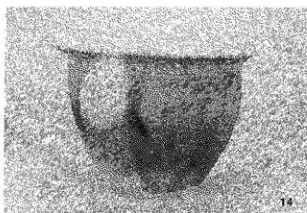
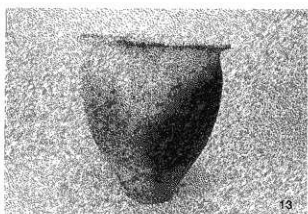
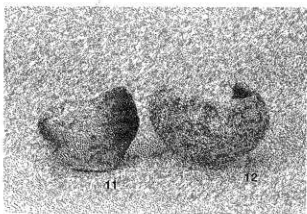
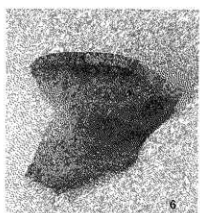
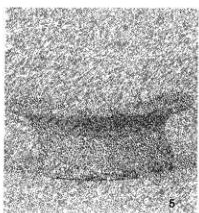
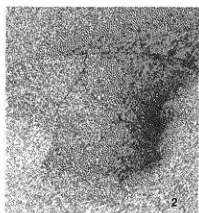
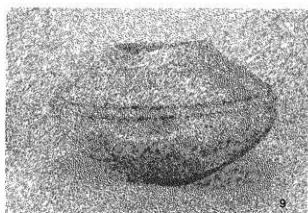
D16 (水道) 土器出土状況

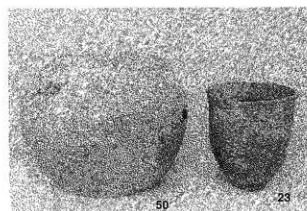
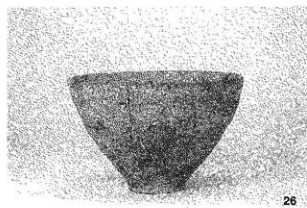
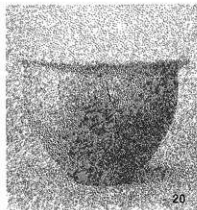
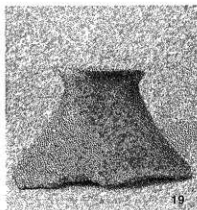
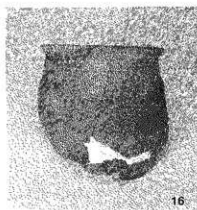
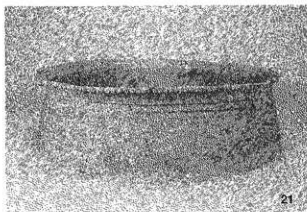
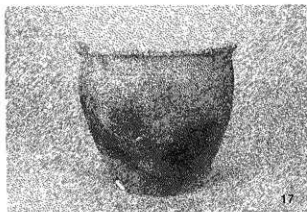


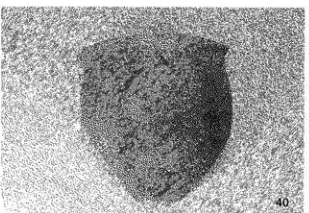
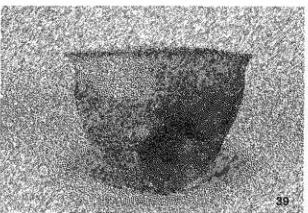
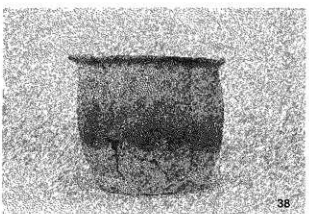
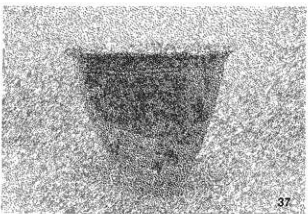
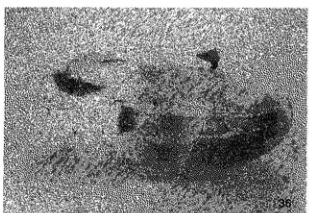
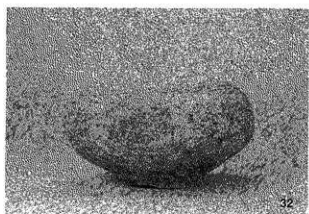
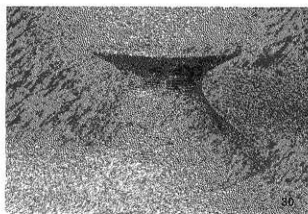
B2 遺物出土状況

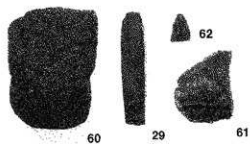
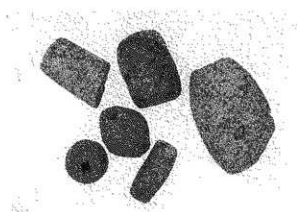
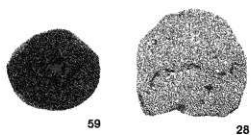
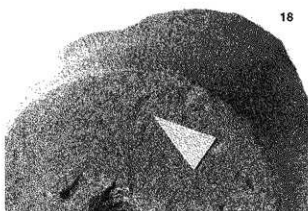
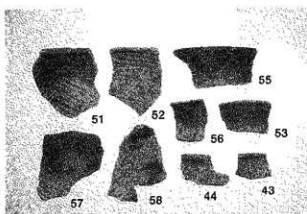
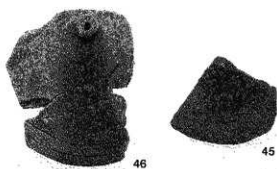
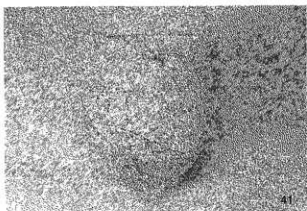


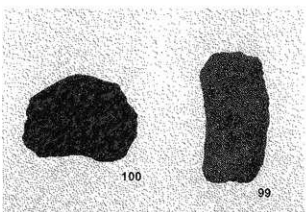
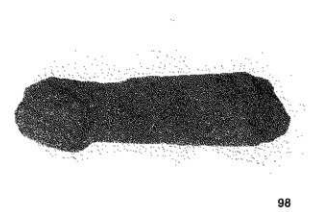
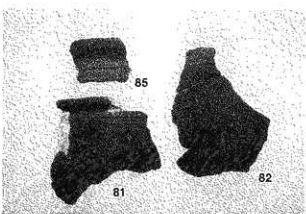
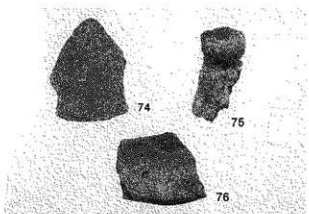
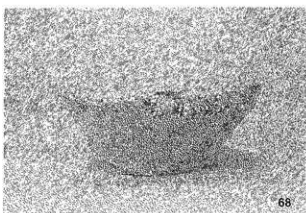
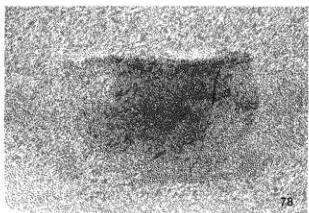
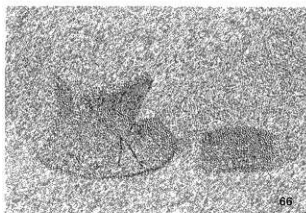
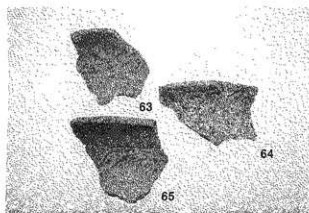
B3 土器遺物出土状況

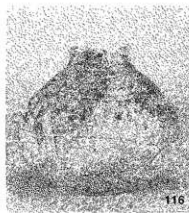
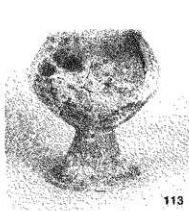
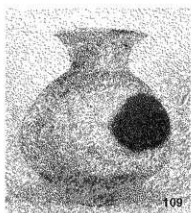
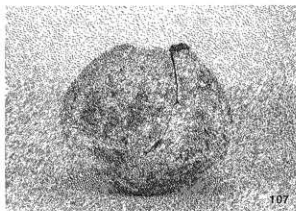
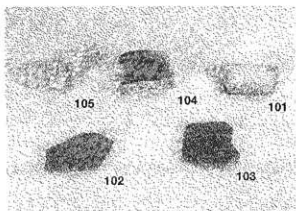


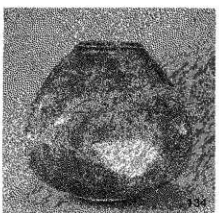
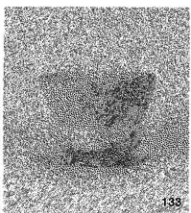
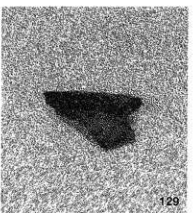
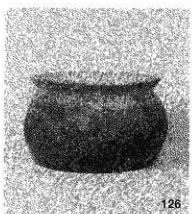
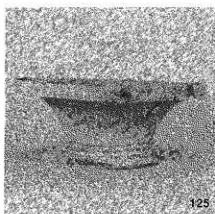
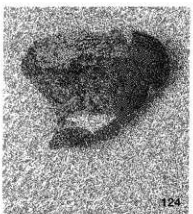
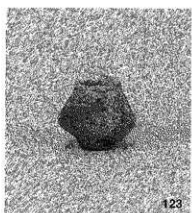
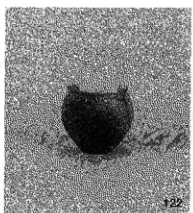
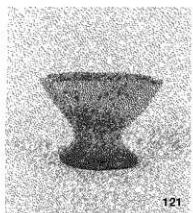
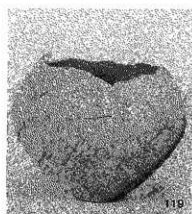
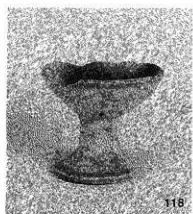
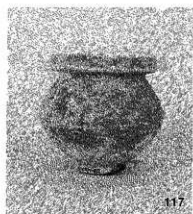


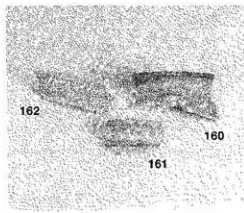
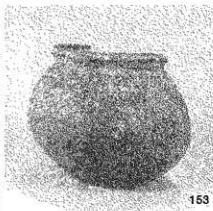
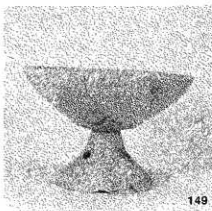
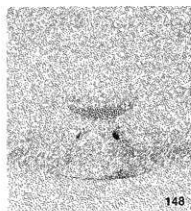
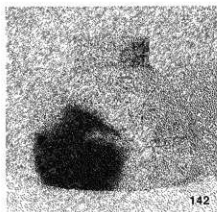
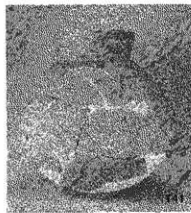
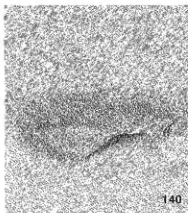
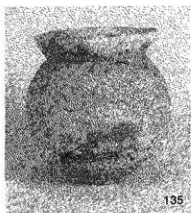


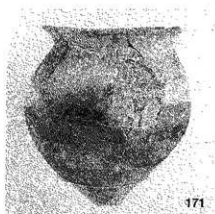




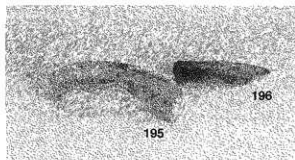
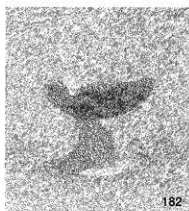
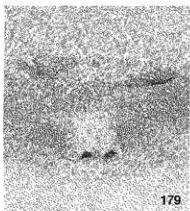




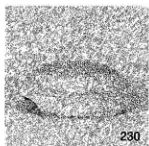
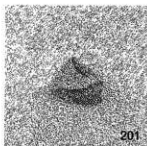
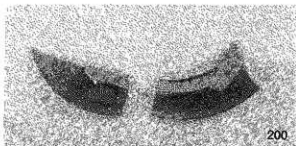
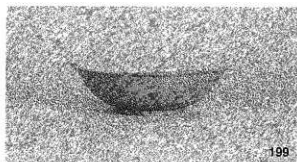
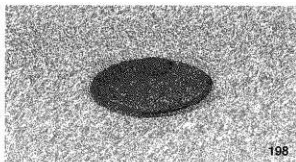
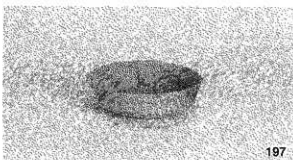




171の
胴部調整



196



報 告 書 抄 録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちようさほうこくしょ							
書 名	埋蔵文化財調査報告書							
副 書 名	高蔵遺跡 (第1次)							
巻 次	45							
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告							
シリーズ番号	59							
編 著 者 名	山田敏一 村木誠 田原和美 渡辺誠 脇田真也 山崎健							
編 集 機 関	名古屋市見晴台考古資料館							
所 在 地	〒457-0026 名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223							
発 行 機 関	名古屋市教育委員会							
所 在 地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL 052-972-3268							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "		m ²	
高蔵遺跡	名古屋市熱田区高蔵町9-7	23100	12-2	35° 08' 06"	137° 54' 18"	1981.9.10 /	611	保育園改築
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物			特 記 事 項
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生~古代	環濠・方形回溝墓・竪穴住居		弥生土器・須恵器			第1次調査

名古屋市文化財調査報告59	
埋蔵文化財調査報告書45	
2003年3月31日発行	
編集	名古屋市見晴台考古資料館
発行	名古屋市教育委員会
	名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印刷	株式会社 名古屋大気堂

